
KOOL

宮森すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K O O L

【ノート】

N O 9 8 1 H

【作者名】

宮森すず

【あらすじ】

『この夏限定、片思い、はじめました』高校三年の夏休み。長編連載。

耳元でモーターが回るような、虫の羽音で目が覚めた。視覚が最初にとらえ、脳に伝達したのは色あせた天井の梁だった。ジオメトリックな骨ぐみの合間に蜘蛛の巣を見つめる。数匹の羽虫が畏にかり、そのまま干からびて埃をくつつけている。仕掛け人の姿は見当たらなかった。どこかよそに、もっと効率のいい場所を見つけたのかも知れない。

僕は上半身を起こして、今まで寝転んでいたソファに座りなおした。首筋と額にじっとり汗をかいていて、背中にシャツがはりついている。梅雨のあけきらない七月の午後は蒸し暑く、目覚めはすがすがしいとは言えなかった。クーラーがないので、しかたなく窓を全開にする。湿っぽく生ぬるい風が部屋の中に吹き込んだ。草木が面倒くさそうに微風にあえぎながら夕立を待っている。

「暑」

今夜は熱帯夜だな、と覚悟して僕はひとつ大きな伸びをした。眠気を追い払ってから、喉が渴いていたのでキッチンへ向かう。アンティークと呼べそうな年代物の冷蔵庫を開けて中を物色する。ビールばかりがごろごろしている冷蔵庫だ。たぶん、フロンガスだってばんばん使っていて消費電力なんか最低の、環境にも財布にも優しい代物。缶ビールの林をかきわけて、ようやくコカ・コーラの赤に手が届いた。この冷蔵庫の持ち主は水分はもっぱらアルコールが入ったものしか飲らないという不健康体だ。ぶしっという期待感をおおる音とともに、僕は炭酸を喉に流し込んだ。刺激とともに声を飲み込む感じ。

コーラのアルミ缶片手にリビングに戻ると叔父がいた。

「おかえり。早かったね」

僕は、ファブリックが擦り切れたオンボロのソファに腰をおろしてブーツの紐をほどく叔父に挨拶した。その中に脱ぎ捨てた靴下をつっこみながら、叔父は器用に片方の眉をあげてみせた。

「鍵は閉めてった気がするが。どうやって入った？」

「これで。母さんがくれた」

ウォレットチェーンにつながった合鍵をくるりとまわしてみせる。

「十花か。……彼女、元気にしてるのか？」

「元気だよ。シドが行き倒れてないか心配して、夕飯のおかず持つてけって言われた」

僕はキッチンを振り返る。母さん手製の肉じゃがが入った小ぶりの鍋は、電気コンロの上に置いてある。叔父がちらりとそちらに視線をやったのを確認して、僕は叔父が座るソファの前に立った。

「明日の朝もう一回火をとおせつてさ。……ねえ、シド」

「叔父さんて呼べよ、甥っこ。何度も言ってるだろ」

ちらりと眉をひそめながら、シドは煙草に火をつけた。空気を吸い込むと先が一瞬赤く燃え上がり、すぐに白い煙が吐き出された。

「叔父さんが言ったんだぜ。スキなときに遊びに来ればいいって。それなのに、俺の顔を見て不機嫌になるのはフェアじゃないんじゃない？」

叔父さん、の部分強調しながら言うと、煙草の煙を吹きかけられた。リアクションを返すのがしゃくで、僕はまばたきもしてやらなかった。

「おぼえておけよ。この世には、社交辞令つてもんと、俺の都合つてもんがある」

灰皿に灰が落ちる。僕は煙草を吸わないけれど、嫌煙権なんか振りかざすつもりはないし、煙草自体もべつに嫌いじゃない。でも、灰皿にたまった吸殻だけは我慢ならない。この世界にこれ以上無意味なものなんてないと思う。吸殻っていうよりも、抜け殻。煙草を

吸うひとたちは、考えごとをするときや、食事のあとや、酒の席や、ただ時間をつぶしたいときや、いらいらしたときに煙草を吸うようだ。たぶん、理由がなくなつて僕らが呼吸しているみたいに自然に吸うんだろう。

「おぼえておくよ。母さんには、シド叔父さんがそう言つてたつて言つて、鍵を返しておくね」

僕は僕くらいの歳の人間に許される無邪気さを上限一杯まで引き出して「コーラごちそうさま」と付け足した。ソファに放り出していた鞆に手を伸ばしたとき、シドの顔を見なかつたのは我ながら上出来だつたと思う。

「かすたか一貴」

名前を呼ばれて、鞆を持っていないほうの手を掴まれたときも、僕には今にも落ちそうな煙草の灰を気にする余裕があつた。叔父はソファから腰を浮かせていた。自分の倍も歳を重ねているはずの男が、前言を撤回するための言い訳を探している。その滑稽さに彼自身気付かないはずもなく、呆れと苛立ちは舌打ちとなつて表現された。

「待てよ、一貴。誤解するな。俺はなにもお前に来るなつて言つてるわけじゃない。暑い中わざわざ鍋を届けてくれたんだろ。礼を言うさ。その鍵もお前が持つていていいぜ」

シドは僕の手首を解放し、そのまま両手を顔の横まで上げて、ホルドアップの格好をした。彼の眼鏡の奥の目が真面目くさつて僕を見た。

「本当にいいの？」

チエーンから外した鍵を鼻先に持ち上げて揺らす。

「ああ。お前が持つていろ」

「じゃあお言葉に甘えて」

鍵をしまい、当初の目的も達成したところで、今度こそ帰ろうとする僕の背中に焦つたシドの声が追いつがる。

「おい、さっきの話だけだな。冗談だから。十花、姉さんには」

「心配しなくても言わないよ」

初対面の頃からうすうす気が付いてはいたけれど、三十四にもなるうかという目の前の男は僕の母にまったく頭があがらない。はっきり言ってシスコンだ。同じ男としてどうかと思うが、僕個人としてはこうしてシドの家に自由に出入りする権利を得られたわけで、文句を言う筋合いでもない。自由恋愛、大いに結構なことだ。

僕が初めてシド・シンクレアに会ったのは十年前の夏。

母親に連れられて叔父の元へやってきた小学生の僕は、すぐさまこの古い洋館に夢中になった。傾いたシャンドリアや上り下りするたびにきしむ階段が、当時夢中になっていたホラーゲームの幽霊屋敷にそっくりだった。

そこで僕らを出迎えたのは、くしゃくしゃの金髪に眠そうな碧眼の若い男だった。くたびれたシャツをひっかけ、裾がほつれたジーンズを履いた「叔父さん」はどう見ても日本人ではなかった。叔父についての事前情報をほとんど聞かされていなかった僕は、まずその外見に驚いて人見知りを発動してしまった。年甲斐も無く母親の影から様子を伺っていると、男はまるで別人のように生き生きとした顔になった。彼の寝ぼけた脳みそが十花を認識した瞬間を、僕は一秒の十分の一単位まで正確に言い当てることができる。あんなに嬉しそうな顔をする人間を、僕は今まで見たことがなかった。

呆れたことに、叔父はそのあと服を着替え、髪に櫛をいれてから再び現れた。そして流暢な日本語をあやつり、まるで大人相手にするように礼儀正しく僕に挨拶した。英国生まれの英国育ち、もちろん母国語は英語だという彼は、半分だけ血のつながった姉と話したのがために死に物狂いで日本語を勉強したという。もともと語学のセンスが良かったのか発音も堂に入ったもので、今ではほぼネイティブと呼べるレベルにまで上達してしまった。

叔父の服装や言動から彼が何をしている人なのか探り出すのは困難だ。十年の付き合いを経た今も、はっきりとはわからない。シド

は十年前も今も、よれよれのシャツとジーンズで一年のほとんどを過ごし、冷蔵庫はビールで一杯で、ラクダ柄の煙草を一日に一箱空にする。気がつけばふらりといなくなり、いつの間にか戻ってくる。変わった事といえば、愛煙家の彼が空港で煙草を吸えなくなったと嘆く時世と、彼と僕の身長差が限りなくゼロに近くなったことくらいだ。

「シド、今何やってるの」

「あん？ お前としゃべってやってるだろうが」

「仕事の話だよ」自然と眉間に皺が寄る。

確か、最後の職業は画家だった。もしくは画商。どちらも売れなという点は同じだ。僕の知る限り、その点だけは終始一環している。僕が知っているだけでも、彼は作家であり、ピアニストであり、作曲家であり、演出家であり、画家であり、詩人だった。そして彼は、そのどれにも満足していないように見えた。

シドはソファに座ったまま、カメラのシャツタを切る真似をした。予想通りというか期待通りというか、また転職している。被写体を聞いて欲しそうだったので、あえて「じゃあ、もう帰るね」と言ったら、あからさまに残念そうな顔になった。今日日の高校生よりも素直だ。

「個展を開こうと思ってよ。今まで撮り溜めたやつを整理して、あと、十花をモデルに何枚か撮りたいんだが。まあ、近いうちに打診しに寄ってみるさ」

それが狙いか、という言葉が喉元まで出かかった。飲み込んで笑顔で「母さんは写真嫌いだよ」と先に釘を刺しておく。叔父が絶句したことに気を良くして、僕は家に帰ることにした。ストレスフルな受験生にはこれくらいのリフレッシュが必要なのだ。

終業式は三十度を越える真夏日だった。しかしどれだけ蒸し暑かろうと、しがない公立高校に空調なんて贅沢品は望むべくもない。開け放った扉からかすかに吹き込む風だけを頼りに、ゆるめたネクタイの隙間から手扇で風を送り込むくらいが関の山だ。即席大型サウナと化した体育館の床に、全校生徒千余名の汗がしたたる。

苦行に近い二時間が過ぎた頃、ようやく校長が禿頭を下げて正面の壇上を降りた。時折耳にする『一丸となって』という言葉があるが、今こそ生徒一丸となつて生活指導教官が発する『以上をもちまして、終業式を終わります』というシメを待っている状況と言えよう。もうここまできたら、いつそ俺が言つてやる、と熱気にゆだつた脳みそは支離滅裂な思考を始める。本当にそろそろ終わつてくれないとあぶないな、と他人事のようにほんのり思った。

夏休みを目前にオアズケをくらつた高校生たちの我慢が限界を超える寸前で終業式は終わり、あとには汗だくながらも晴れ晴れとした笑顔が残った。浮き立つ心のままに夏休みの予定や別れの挨拶が交わされ、高揚が暑さをつかのま忘れさせてくれる。白い入道雲と青い夏空のコントラストが美しい。

「奈瀬なせ」

開放感にひたっていると、同じクラスの幸村圭次ゆきむらけいじに声をかけられた。同じクラスになったのは三年になった今年が初めてだが、ある出来事を境に意気投合してしまい、最近では何だかんだで一緒に居ることが多い。

「奈瀬、加藤が探してたぜ。職員室に顔だせてさ。何かした？」

「ん、たぶん進路だろ。この前白紙で提出したから」

「えええ、ナンでまた」

小柄な幸村は、ちらつと上目遣いに僕を見上げた。

「……べつに。浮かばなかったから書かなかった」

「んなのテキストに書いときゃいいのに。お前ってヘンなところで真面目だもんなあ」

「一つくらいないの、って聞かれたよ。これって複数あるのが普通なの？」

「あんまし深く考えてねーんじゃねえかな、みんな。それよりさ、午後から空いてる？ またちよつと付き合っって欲しい所があるんだけどなあ」

「やっぱりあのテの店？」

聞くと、幸村は「新しいトコ見つけたんだ」とニシシと笑った。

「俺、飯食って着替えてから行くからさ。二時間後でいい？ 駅前まで待ち合わせ」

「いいけど。俺、普段着だからね」

「あ、奈瀬はそのまんまでジューブン。じゃ、あとでな」

何が十分なんだ、と思ったけれど追求する代わりに軽く手をあげて見送った。元陸上部の幸村はアスファルトの照り返しをものともせず、さっさと走って行ってしまった。

僕は、職員室に顔を出そうか一瞬だけ迷い、そのまま帰ることにした。まだ当分、白紙が続くだろうなという確信に似た予感。

これがもしかして、自嘲とか無常とか云うモノだろうか。

「なんだか新鮮だな」

家に帰り着くと叔父がいた。正確に言うなら、玄関先で不審者まがいにくろくろしている男がそうだった。

一瞬声をかけるのをためらったほど見事な紅薔薇の花束をかかえた叔父は、主観的には笑えたけれど客観的には非常にさまになっていた。この男は普段の格好があまりにもだらしなないせいか、たまにまともな服装をすると必要以上に絵になる。きちんとしたシャツを着込み、髪を整えて立っていると平凡な住宅地では浮いてしまうの

だ。さらに今日は、真つ赤な薔薇がそこにトドメを刺している。格好いいのは結構なことだが、放っておくとご近所の噂になりそう。こういう場合はさっさと声をかけて、家の中に隔離してしまうに限る。

「上がらないの？」

「一貴！」

声をかけると、助かった、と言わんばかりにシドはほっとした顔になった。

「母さんいないの？ん、いるじゃん」

玄関の鍵はかかっていなかった。ドアノブをまわしながら、我ながら意地の悪い声が出た。

「入る？それとも帰る？」

「入る」

僕は笑いかみ殺しながら玄関を開けて叔父を通した。三十路をとおに越した男が、中学生みたいに浮き足立っているのはなんとも奇妙だ。間違っても可愛げがある、なんて呼べない男だけど、さすがに笑っちゃまずいだろう。良心に従い本音はそつと胸の中に仕舞いこみ、僕はひとりで自室へ向かった。着替えを片手に風呂場に行く途中リビングを横切れば、今度はお見合いめかしく緊張した面持ちで十花の前に座るシドが見えた。

おおかた、写真のモデルを頼みに来たのだろう。半分血のつながった姉を女神のごとく崇拜する弟は、五十本以上はありそうな薔薇の花束を手渡していた。その顔が安堵と歡喜に笑み崩れるのを見届けて、僕はシャワーを浴びることにした。

さっぱりしたところでTシャツとジーンズに着替え、スポーツドリンクをあおって一息ついた。ふたりがいるリビングは冷房が入っているため閉め切られている。耳をすませると話し声したが、内容までは聞き取れない。気にしないことにして、昼飯を済ませることにしよう。冷蔵庫を物色するとサラダと枝豆のスープがあったので、あとは適当にトーストでも焼けばいいか。邪魔するほど無粋じ

やないぞ、とつぶやいてキッチンでそのまま食べることにした。

食べ終えた食器を洗っているといい時間になったので、財布だけを尻のポケットに突っ込んで家をでた。駅までは自転車でせいぜい十分という距離だ。外は雲ひとつない快晴で、きつい日差しが容赦なく降り注いでいた。僕は影になる場所を選びながらのんびりと自転車をこいだ。

どうしてそんなにお母さんがスキなの？

と、昔聞いたことがある。多分、出会って間もないころだ。叔父のストレートな愛情表現は、当時小学生だった僕には信じられないことばかりだった。厭わしいというよりは恥ずかしい、という気持ちが強かったように思う。たとえば僕に好きな女の子がいたとして、その女の子に対して叔父のようなアプローチが出来るかといえば、とんでもない。考えたこともない、同じことをするくらいなら屋上から飛び降りるほうがまだ、くらいには思っていた。早い話、まだまだ、好きな相手にはやさしくするより意地悪したい年頃だったということだ。だから、叔父の存在はある意味僕にとっては脅威であり、同時に理解できないながらも無視もできないという、ひどく中途半端なものだった。

どうしてそんなに、と聞いた僕はちょうど反抗期で、馬鹿にしたような口調の裏で子供らしい独占欲がはたらいていた。

お前もいつかわかるさ、と。

叔父はにやつと笑って言った。そのいつかがいつなのかはわからなかったし、今もわからないけれど、大人になるのも悪くないかもしれないな、と思わせてくれたことは確かだった。

ぼんやりとした、頼りがいのない期待感。

あるいは、期待なんてみんな、そんなものなのかもしれないけれど。

そんなことを思い出しているうちに駅に着いた。駐輪場で自転車の鍵をかけていると、仕掛け時計のオルゴールが聴こえてきた。駅の時計は一時間ごとにイツ・ア・スモールワールドのオルゴール・

アレンジが鳴り響く仕様なのだ。設計者が悪いのかよほど税金が余っているのか知らないが、ものすごく趣味が悪いと思うのは僕だけだろうか。

それはそれとして、駅で待ち合わせ、といったら仕掛け時計の下で落ち合う、というローカルルールがある。ぴったり約束の時間に到着してセオリー通りに時計の周辺を見渡すと、その一角に遠巻きの人ばかりができていた。

「奈瀬くん」

人だかりの中心になっていた人物がこちらにむかって手を振った。「こつちこつち」

呼ばれて無視するわけにもいかず、僕もちょっと手を上げて合図した。「おまたせ」

野次馬の好奇心と羨望と嫉妬の眼差しがちくちく刺さる。値踏みされているようで、あまりいい気はしない。なんだ彼氏待ちかよ、というぼやきが聴こえて今度は吹き出しそうになった。世の中、知らないほうがいいこともある。

「どう？」当の本人は全く意に介した様子もなく、黒いスカートの端をすこし持ち上げてみせた。絵本かディスプレイ映画でしか見たことがない仕草だ。

「暑くないの？」僕は一番気になっていたことを聞いた。

「もつと他に言うことは」

「目立つね？」

「もつと、他に、ないのか」

服を替えると中身まで変わるのだろうか。作った可愛らしい声のまま、友人は凄んだ。僕はあらためて幸村圭次の格好を観察した。

足元は編み上げのショートブーツ。スカートは膝丈で、ベルトマークしたウエストからふんわりとふくらんでいる。その形から察するに、スカートの下には半球形を維持するためのアーマチャーが必要だろう。パフスリーブの袖にもスカートの裾にも黒いレースがあらわされていて、襟元には薄紫色のリボンがタイの代わりに結ばれ

ていた。

「そのカツラじゃコスプレにしか見えないと思うけど」
「ウィツグ！」すぐさま鋭い訂正が飛んだ。

幸村は今、銀髪にピンクのメッシュが入った、ロリポップキャンディみたいなウィツグをかぶっている。おまけに首元とおそろいのリボンで髪を左右の耳の上、高い位置で結んでいる。ちょっと正気では考え付かない斬新な髪型だ。

「ありがたいツインテールだぜ。マニア垂涎のアイテムじゃねえか。ロマンがわかってないなあ、ロマンが。だいたい、お前がこの前のドレスは好みじゃないなんて言うから、わざわざシックめのエレガントな黒で統一してやったんだぞ」

「戻ってるよ、口調」

幸村ははつとして口元を押さえ、それからもう一度表情をつくった。その顔にも丁寧に薄化粧がほどこされ、睫毛にはマスカラ、唇にはグロスが塗られている。

「行きましょ、奈瀬くん。買い物に付き合ってくれる約束でしょ」
よくやるなあ、というのが本音だったけど、こちらに向けられた流し目はなかなか本格的で、妖艶だった。

幸村は黒いレースの日傘をさした。僕はキャップを目深にかぶって歩き出した。街路樹のそばを通ると、蝉の鳴き声があった。

相変わらず、すれ違う人には振り返られ、通行人からはちらちらと見られている。なかには、携帯電話のレンズを向けてくるような大胆なやつもいたし、一度はいかにも怪しそうなプロダクションから声をかけられたりもした。

「わりと大手ね、今の」

幸村は強引に渡された名刺をゴミ箱に破り捨てながら言った。ゴスロリやコスプレの雑誌を何冊か出している出版社なのだそうだ。スカウトはまったくくちくち格好をした幸村と僕を見て、少しまごつきながら友人に名刺を渡して口説き、ご丁寧なことに僕にも違う名刺をさしだした。幸村が取り付く島もない態度だったので早々

に解放されたが、僕は白紙のままの進路希望を思い出してしまい、
なんとなく苦い気持ちになった。

「でも本当に目立つね、その格好」話題を変えてみる。

「目立っているのは奈瀬くんもだよ」「くすつと笑われた。

「そりゃあ、今の幸村と一緒にならね」

「ちがうよ、鈍いなあ。奈瀬くん、自分のことにあんまり興味ない
でしょう。別に頭悪いわけでもないのに、どうしてそういうこと言
うかな。それとも嫌味か？ 進路にしたって、お前なら選択肢なん
て山ほどあるだろうが。真面目なのかこだわりなのか知らねえけど、
どうでもいいとか、そういうのだけはやめろよな」

僕はすこし驚いた。幸村にしては珍しく、はつきりと棘のある言
い方だった。彼は口にしてから、しまったというように舌打ちして
そっぽを向いた。普段の彼はそういう突っ込んだことを言わない男
だ。ただでさえ格好が格好な上に、らしくない物言いをされて、僕
は返答に詰まった。

「ごめん、今のは俺が悪い」いつもの癖で髪に手をやろうとした幸
村は、ウィッグに気づいて中途半端に上がった手を所在なげにおろ
した。

「別にどうでもいいと思ってるわけじゃないけど……、幸村は卒業
したらどうするの？」

「俺は工学部に入ってエンジニアになる」

即答して幸村はすこし照れくさそうに笑った。

まだ見慣れない、見慣れた友人の顔を見て、僕はほつと詰めてい
た息をはきだした。

が、長い睫毛とうるんだ唇のまま「そろそろ着くぜ」と男
言葉を使う様子はどうにも倒錯的で落ち着かない。そういう趣味は
ないつもりだったんだけど。

目のやり場に困って視線をあげると店の看板が見つかった。ゴシ
ック・ロリータとパンクファッションが専門のセレクト・ショップ
のようだ。ここにたどり着く前に何人かのそれらしい通行人とすれ

違っていたので、頭の中である程度内部の予測をたてる。

手動の重いドアを開けるとその先は別世界だった。空気の中に目に見えない濃密な何かが漂っているような。まずひとりきりなら入ろうと思う類の店ではない。

僕はおとなしく幸村を先に店内に通し、その後につづいた。店内は黒と紫を基調にまとめられていた。それほど広くもないスペースにごちゃごちゃと品物が詰め込まれている。そういうアレンジなのだろう。冷房が入っているのはありがたい。店で売られているものが、黒い服やフリルやスカルマークや深紅の薔薇や十字架や蜘蛛のモチーフやその他もろもろのオカルトチックなアイテムなどではなく、犬猫であればもつとありがたいのに、と思わないでもなかったけれど。

訪れる客は、幸村に近いスタイリングが大半を占めていた。これは男性がスカートをはいているという意味ではなく、女の子が幸村と同じカテゴリのファッションに身を包んでいるという意味だ。中にはもちろん男性もいた。しかし、彼らはスカートを穿いているわけではなく、レザーやスタッズといったパンクっぽい格好が多い。やはりここでも幸村のスタイルはマイナなんだな、と認識する。ただし、彼は一見しただけでは少女、しかもかなりの美少女にしか見えないので、本当にマイナなのは僕の方がもしれない。

「ねえねえ奈瀬くん。これ、似合うかな」

幸村が僕のTシャツの裾を軽くひっぱって声をかける。彼の手にあるワンピースは、僕の目には明らかに装飾過多に見えるのだけけど、なんとなくそれをストレートに伝えるとまずいことになる、程度の予測はついた。前回、初めてこの手の店を一緒に訪れ、同種の質問をされた思ったままを口にしたらしばらく口をきいてくれなくなったからだ。同じ轍は踏むまい、と自分に言い聞かせる。

ワンピースは蝶の模様が入った黒のレース。ちょうど今彼が着ているものと同じくらいのだ。

「かわいいんじゃない？ でも今の幸村ならもつとシンプルな服も

似合つと思つけど。せつかく綺麗なんだから」

言葉を選びながら、本音もミックスさせつつ、いつもの格好のほうが好きだと主張してみる。と、幸村は片手を口にあてて、もとから丸い目をさらにまんまるにしてみせた。目がでかい。

「奈瀬くんが女子に人気ある理由、わかった気がするわぁ」

「なにそれ」

「そのギャップ！ やっぱりこう、きゅんとくるのはそういう温度差なのよねえ。その顔でそういうこと言っちゃうんだ、みたいな。罪作りだなあ、うんうん。でもたしかにこのワンピだと甘くなりすぎちゃうかも。返してくるね」

幸村はひとりで何かに納得していたが、戻ってきてからもまだにやにや笑いを浮かべていた。チェシヤ猫みたいだ。ちょうどヘアカラーもお揃いだし。

「奈瀬くん、それわたしに言う分にはいいけど女子に言ったら誤解されるぞう。男のわたしでもテンション上がったからね」

何のキャラだよ、と突っ込みたくなつたが幸村を喜ばせるだけの結果に終わりそうなので僕は大人しく黙った。本人も言うとおり、今日の友人はいつも以上にハイテンションだ。幸村の言葉に、そばにいた男性客がぎよつとして彼を振り返った。もちろん、そんなことを気にする幸村ではない。

「ねえねえ、他人の目から見たらどんなカップルに見えてるんだろうね。奈瀬くんなんて、彼女の趣味につきあっているやさしい彼氏だよ、絶対」

幸村は完全に笑っている。今度は口元に手をあててニシシとわらう犬のキャラクタが浮かんだ。

僕はしばらく考えてから「カップルに見えないんじゃないかな」と正直に答えておいた。

マナーモードに設定した携帯電話が震えたことを幸いに、僕は店の外へ出た。サブディスプレイに「三鷹 茜」と表示されている。電話は幼馴染からだった。

「はい」応えると、低めのひんやりとした声がわずかなノイズに混じって聴こえた。

「茜あかねです。カズ君、圭ちゃんと一緒にいるやろう。明日から二週間大学の用事でアメリカに行きます、と伝えてくれん？」

僕は一瞬、三鷹みたかの言うことが理解できず面食らう。普段から滅多に電話などかけてこない上に前置きなしでしゃべる幼馴染は、それだけ言うところ「よろしく」と電話を切るうとした。

「ちょ、待って、三鷹。アメリカって何？ おじさんかおばさんに会いに行くの？ なんで自分から幸村に言わないのさ」

「バッテリー、切れているから」

ああ、と納得した際にあっさり電話は切れた。

「あいつ」

思わず舌打ちして、携帯電話をたたむ。そこへ買い物を終えた幸村が店から出てきた。

「奈瀬くん、おまたせ」

「幸村、携帯電話の電源切れてるってさ」

「え？ ほんと？ あ、やった、バッテリー危ないと思ってたんだあ。もたなかったかあ。あれ、でもなんで奈瀬くんがそんなこと知ってるの？ もしかして電話くれた？」

幸村は無反応な携帯電話をチェックして、あきらめて僕を見上げた。

「三鷹が俺に電話してきた。なんか、明日からアメリカに行くって

言つてたけど。それも二週間くらい。なにか聞いてる？」

三鷹茜の両親は地元の国立大学で社会学の教鞭をとっている。ふたりとも非常に多忙な人で、一年の三分の一は国外にいる。フィールドワーク、現地調査というのだろうか、それに出かけて何ヶ月も帰つてこないこともざらにある。

家が近所だったこともあって、十花は昔からよく三鷹を気にかけていた。必然的に僕たちは二人で遊ぶことが多くなり、それは高校生になった今も変わらない。周囲はそれを、微笑ましいカップルだと認識していたようだが、僕に言わせれば的外れもいいところである。彼女は天才だ。

僕が知る、ただ一人の天才。

「ああ、進路決めたって言つてた。やっぱ、アメリカの大学に進むんだろ。たぶん、今回はその下見じゃねえかな」

幸村は指先で自分の頬をこすりながら言う。口調が元にもどつていることには気づいていないようだ。

僕は、三鷹が事前に幸村にある程度を打ち明けていたことに驚いた。たしかに二人は付き合つていて世間が彼氏彼女と呼ぶ関係なだけけれど、実体はすこし、いやかなり「世間」からは外れていると思う。

僕は素直に感動した。三鷹が対人的なサービス精神に著しく乏しいことを知っているからだ。それはほとんど皆無に近い。必要最小限の言葉を必要な時に必要なだけ、というのが彼女の基本的なコミュニケーションスタンスだ。それすら彼女の尺度ではかられているのだから、他人には絶対的に不足していると感じられる。それは、幼馴染の僕も例外ではなかったけれど、人間は遅かれ早かれ環境に適応する生き物で、……早い話、僕は三鷹茜という人間に慣れてしまったのだ。

あの調子では学校や親にも相談せずに一人でさつさと決めたに違いない。僕はとつくの昔に比べることの無意味さを思い知つたはずの、幼馴染の行動力や決断力その他諸々の能力値の差を考えそうに

なって、やめた。ただ、純粹にすごいと思うだけだ。

「なあ、奈瀬。もしかして、俺の行動って茜に読まれてる？」

お前だけじゃないよ、幸村。

塾にも家庭教師にも縁のない夏休みはこつくりと過ぎてゆく。最初の一週間で曜日の感覚がなくなり、時間は無限に残されているように感じられるようになった。僕はこの十日あまりシドの家に入り浸り、定位置となったソファにごろりと横になって惰睡をむさぼっている。こうしていると、ますますいろいろなことが遠ざかった。自分が他人のように思えてくる。親しい友人や母親と離れ、彼らの影響力が弱まると、僕はどうやら僕であることを忘れてしまつようだ。

夏の遅い夕暮れがやってきて、窓の外をオレンジに染める頃、叔父がどこからともなく帰ってくる。十花の前以外の彼は、一環してグウタラのダメな大人だ。櫛をいければ見事なブロンドも、今は無残に汗で額にへばりつき、手にはコンビニのビニル袋をさげていた。どうせ中身はビールだろう。

「あつちい、なんて暑さだ、日本の夏は」

シドは缶ビールを冷蔵庫に並べつつ文句を言った。去年の夏も、一昨年の夏も、一言も違えずに同じ文句を同じシチュエーションで繰り返している。案外、律儀なのだ。

「ここはまだマシだよ、山の中だし。街中だったら三十五度を越えてるよ、今日みたいな日は」

シドはようやく冷蔵庫を閉め、ビールを呷った。缶はよく冷えているのか水滴が浮いている。彼の喉が上下して、ビールを嚥下する様を見るときもなしに眺めていると、ふいに目が合った。僕は意識的にゆっくりと視線をはずし、もう一度目をつむった。フローリングの床を歩く裸足の足音が聴こえた。足音は僕のいるソファのすぐそばで途切れ、唐突に冷たい何か頬に押し当てられた。

ぎょっとして目を開けると、叔父が両手にビールを持って上から

僕の顔を覗き込んでいた。

「ほれ、ビール。飲みたかったんじゃないのか？」シドはもう一度冷えた缶を僕の頬にぴたぴたと押し当てた。「タマにはいいさ。夏休みだしな」と、理屈にならない理屈を述べる。

僕は仕方なしにビールを受け取った。どうやら、機嫌がいいらしいことはわかる。彼の勘違いを正してビールを断つてもよかったが、迷っているうちにシドはさっさと風呂にいつてしまった。体を起こしてソファに座りなおすと、窓がちょうど真正面にくる。僕はビールを飲みながら、薄墨色に暮れてゆくグラデーションがかつた空を見る。吹き込む風は少し、湿った草の匂いがした。

それから再びソファに横になり、僕はアルコールが全身にゆきわたるに任せた。動くのが億劫になり、すこし眠い。あれだけ眠ってまだ眠気が襲うのだから、これが若いつてことなのかと思ひ、可笑しかった。

いつしかうとうとと微睡んでいると、ぼんやりとアルコールの霞がかつた脳に耳慣れない音が届いた。最初はそれが何だかわからなかった。しばらく耳をすませていると、ようやくそれがとろりとしたピアノの音だということに気づく。溶けたチヨコレートをかけた、マシユマロみたいな音だ。弾き手のテクニクによるものなのか、楽器の個性なのか。

「シド？」

リビングを抜け、廊下に出ると隣の部屋に灯りがともっていた。扉ごしにピアノの音が漏れ聴こえてくる。

僕は形だけのノックをして扉を開けた。部屋にはうすく煙草の煙がただよっていた。シドは風呂上りの濡れ髪のまま、くわえ煙草でピアノの前に座っていた。ピアノは、塗装がところどころ剥げた、アンティークと呼ぶのもおこがましい古めかしたアップライト。

とろとろ、たら。

とろん、たらん、くわん。

たらら、りら、くう、ん。

ピアノは、そんな風に鳴った。弦が伸びて、音が割れて、それが中できずぶって、何年も何年も樽の中で眠っていたウイスキーのように、不思議な味わいに変わっていた。

シドは鼻から煙をもうもつと吐き出しながら、クリーム色に変色した鍵盤を指で弾いている。若干前のめりに目を閉じて、指先だけが撫でるように優しい動きをする。タンクトップの肩は、皮膚の下にひそむ骨の動きを教えてくれた。鎖骨が終わる辺りに、青い花が一輪咲いている。

「シド」

二度目に呼びかけると、叔父はようやく僕に気づき、うつすら目を開けてこちらを流し見た。

「よう、飲んでるか、甥っこ」言いながら、ピアノの上に置いてあった缶ビールをかがけて飲み干した。

「前から気になってただけだよ」

僕は、シドの肩に彫られたタトウを見ながら、一脚だけある椅子に、背もたれを抱く格好で座る。

「あん？」と、おざなりに先をうながしながら、愛煙家の男はそれは美味そうにキャメルを吸う。

「よくそんなザマで作曲家だかピアニストだか名乗っていたよね」三百五十三リットルのビールのせいかな、僕の口からすると暴言がでてくる。本当に気になっていたことは別にあつたはずだけど、なんだかどうでもよくなってしまった。

「失敬なやつだな。けらけら笑うなよ。CDだってちゃあんと出したんだぜ。ええと、なんだ、六年前だったかな」

「ほら、怪しい」

二人とも酔っ払いだから、普段よりも気安く冗談を言い合う。シドは、このまま自分のピアニストとしての作曲家としての、だったかもしれない腕に疑問を持たれたままでは宿酔いになるとかどうとか主張した。ついでに、今から俺の実力を見せてやるから

拝聴するようにとのたまうと、にやりと笑って酔っ払い特有の、悪意のない迷惑行為に取り掛かった。

僕は、椅子の背もたれに顎をのせて、仕草だけは紳士的な彼の一礼を見守った。ピアノの前の椅子に座りなおすと、おもむろに指が鍵盤の上へ。

いきなり和音がきた。それも、体全体の重みを使って鳴らすような痺れるやつ。

左手がスウィングする。

もつと、もつと、スウィングする。

突然右手のメロディが乱入。

細かなトリルや装飾音のトッピング。

音が飛び跳ねて、右手は高く高く上がる。

一転、転がるように二オクターブを滑り落ちる。

テンポが上がって、どんどん上がって。

右手のメロディはほとんど速くて聴きとれないくらい。

ピアノのカバーの内側で、音は飽和状態。

炭酸みたいにしゅわっと出てくるカタルシスには程遠い、くぐもって滲んで重なって、何層ものレイヤーになって細いパイプから押し出されてくるような。

フラストレイティッド・サウンド。

音色はビター・スイート。

本来ならば観賞に耐えないおんぼろピアノは、狂った音でこの上なく奔放に鳴り響く。

僕は笑いながらそれを心ゆくまで味わった。

最後の一音まで。

なぜだか無性に楽しくて、不覚ながら、ぼんやりと、終わらなければいいのと思った。

気がつくくと、僕はリビングのソファでうたた寝をしていた。正面の窓から、白い月が覗いていた。この家には壁掛け時計というものが存在しないので、携帯電話で時間を確かめた。十一時をすこしまわったところだった。思ったほど時間はたっていない。

そろそろと様子をみながら体を起こす。軽い眩暈がしたがすぐに収まった。どうやら酔いは醒めているらしい。

リビングを見渡しても叔父の姿はなかった。キッチンに灯りがついているので、そちらにいるのだろう。そう思っていたら、両手にマグカップを持ったシドが器用に足でドアを開け放しながらリビングに入ってきた。

「悪酔いしてねえかと思って」

そう言っ、あたたかいカップを手渡される。礼を言って受け取ると、液体はレモンと蜂蜜の匂いがした。

「なに、これ」

匂いを嗅いで、おおよその材料を思い浮かべながら念のために確認すると、「叔父さん特製『蜂蜜レモンのアップルシードル改』だな。酒飲んだあとにこれさえ飲んどきゃ絶対宿酔いになんねえからさ」

そう言っ、叔父は自らも口をつけた。喉の乾きを覚えていた僕も、甘そうな匂いにつられて一口飲んだ。

「これ、酒じゃん！」

ほどよく温まったアルコールが喉を焼く。咽て咳き込んだ僕を見て、叔父は情けないといわんばかりに肩をすくめた。「冗談じゃない、ビールよりも度数が高いぞ。」

「当たり前だろ、シードルなんだから。隠し味にテキーラが入って

るのが『改』。んで、ジンが入ってたら『ハイパー』な。覚えてお
けよ、ここ、テストに出ますよー」

「……酔っ払いめ」

酔いは醒めていたはずなのに頭痛がしそうだ。僕はため息をつき、
あきらめて林檎酒をテーブルにおいた。

「なんだあ、いつちよまえに溜息たあやるねえ。悩み事かあ？ 一
貴も年頃だもんなあ。叔父ちゃんが相談にのってやるうか。そうだ、
お前には特別にいい話をしてやろう」カップに特製シールドをなみ
なみと注ぐと、叔父は向かいのソファにどっかりと腰を据えた。

「十花と俺のなれそめはな」

「シド、ストップ。いい話なんて聞きたくないし、俺はそもそも悩
んでないし、シドの日本語は間違ってる。なれそめってというのは、
恋人同士が出会ったきっかけとか、たしかそういうときに使うの。

シド、母さんの弟でしょ？ は？ 血のつながりは半分だけ？ ン
なこと関係ねえよ」

「まあまあ。今夜、どうせ泊まっていくだろう？ もうこんな時間
だもんなあ。宿代だと思って聞いておいてもバチはあたらねえんじ
やねえかなあ」

酔っぱらいは僕の冷たい視線をものともせず、さっさと正攻法
に切り替えてきた。この早業、というか荒業、というか。

「バチはあたらねえって、いちいち日本語が古臭いんですけど」

憎まれ口を叩く僕を横目で見ながら、シドはふふんと鼻で笑った。
ああ、そんな得意げな顔をして。いい年をした大人が、と思わない
わけでもないが、本人が大真面目なのと心底嬉しそうにしているの
とでどうにも憎めない。これがほだされるってことね、と思いが
ら、僕は海のように広い心で話の続きをうながした。

「あれはちょうど十七年前の話だ。俺はまだ十六かそこらのガキで、
パブリック・スクールに通ってた。知ってるか？ イギリスのパブ
リック・スクールってやつは黴が生えたようなおっかしな習慣が山
のように残っているんだぜ。化石みたいな教師と、ツンとしたかわ

いくねえガキが山ほどいて、おまけにいまどき寄宿生。俺は寮住まいに飽き飽きしてた。

いつものように情性でクラスに顔を出していたら急に呼び出されて、教師から母親が交通事故で急死したと聞かされた。目の前が真っ暗になった、比喩じゃないぜ。俺は貧血を起こしてぶっ倒れた。それから葬式までの記憶はほとんどなくてな。どうも後から聞いた話だと、俺の方が今にも死にそうな様子だったらしいが。

葬式の当日は滅多にないくらいいい天気だった。雲ひとつなくてさ、風が吹いてて。教会の芝も木も青々としていた。そんな気持ちのいい日なのに、レティツィアはいないんだ、もう二度と会えないんだと思ったら、どうしようもなく悲しくなった。本当に、今すぐに叫んでその場を飛び出すか、うずくまって大声で泣いてしまいたいそうだった。

でもそうするわけにもいかなかった。先に親父が全部やっちゃってたからな。あんなに取り乱して、なりふり構わずに嘆く人間を見たのは初めてだった。親父がどれだけレティツィアを愛してたか、考えたら俺はなにもできなくなった。

ほとんど茫然自失でそれでもなんとか立ってたら、誰かが俺の名前を呼んだ。その声が母親にあんまりそっくりで、悪い夢が、醒めたのかと錯覚しそうになった。振り返ると同時に、その誰かは俺を抱きしめた。ぎゅうっと抱きしめて、レティとおんなじ声で何か俺に言ってくれた。それが奈瀬十花だった。その時はまだ日本語なんてしらなかったから、十花がなんて言ってくれたのかわからなかったが、たぶん、大丈夫、とかしつかりしなさい、とかそういうことを言われたんだと思う。やさしい、綺麗な声でさ。

それが彼女と俺のハジメテ「シードルで喉をうるおして、シドは続ける。

「俺はそれまで彼女が実の姉であることは愚か、彼女の存在すら知らなかった。最初に彼女がたどたどしい英語で姉だと名乗り出てくれたときも、俺の聞き間違いかと思ったほどだ。十七年近く生きて

きて一度もそんな話聞いたことがなかったし、彼女は東洋風の顔立ちだったし。でも、本当はそんなことはどうでもよくってな。あの時あの場所で、十花が俺を抱きしめてくれたらから俺は今ここでこうして生きていられると、思ってる。早い話が、俺の命の恩人なんだよ、彼女。

まあ、またすぐに離れ離れになっちまうんだけど。葬式が終わって、親父は相変わらず塞ぎこんでたけどとりあえず馬鹿な真似はしないくらいには落ちついて、やっと、彼女と話す時間が出来るんじゃないかと思つた矢先だ。

俺は十花にレティの話をしたかった。彼女の口からレティのことを聞いたかった。一緒に悲しんでくれる相手が必要で、まったく泣けるほど子供だった。彼女が日本に帰国する時聞いたときは、恥もプライドも全部放り出して泣いてすがつた。もう大混乱。それでも彼女が帰るとわかつて、また自失しかけた俺に、十花は辛抱強く話しかけてくれた。それがまた、ほとんど日本語で、ぜんっぜんわからねえんだが、もう意地みたいになつて、うんうんうなずいて聞いてたら、いつの間にか別れの挨拶みたいになつて。また泣いてそれで本当におしまいだ。

今考えたら、十花は日本に赤ん坊のお前と旦那を残したままイギリスにきてたんだ。ひとりっきりで来たのにも、何か理由があったんだろう。もしかしたら本当は名乗り出るつもりじゃなかったのに、あんまり俺が情けねえ顔してたから思わず姉だつてバラしちまったのかな、とか。まあ、そのへんは自惚れだけだ。

で、そのときのことを思い出すと、叔父ちゃんとしては当時の自分をぶん殴つてやりたくもなるわけで。でももう一回やり直しても何回やり直しても、同じことをするんだろうな、と。今なら言葉がわかるぶん、もひとつ夕チが悪いかも。

一貴、これでわかつたろ？ 俺が『どうしてそんなにお母さんがスキなの』か

シドは話し終わると煙草に火をつけた。深く吸い込み、ゆっくり

と煙を吐き出す。いささか自己主張の強い青い目をすこし伏せ目がちに、黙って座っていれば似ていないこともない。半分とはいえ、血のつながった姉弟なのだ。

僕は冷めたマグカップを手の中で玩びながら、叔父の話を検証した。これは、僕がまだ言葉を覚える前の話だ。シドが今の僕くらい歳の、母さんはきつと二十三かそこらで、まだお互いをしらなかつた。実母の死が海を隔てて暮らしていた二人の姉弟を引き会わせた。叔父のいうところの、運命の出会いというやつだ。たしかに、偶然だとしたら気の利いた演出だ。

僕は納得した。なるべくしてなつた、と。それ以外の道など初めから存在しなかったのだ。

「……筋金入りのシスコンか」

僕はまだまだ甘かつたらしい。どうせシドのことだから、と話半分で聞いていたが、まっとうすぎるほどまっとうなエクスキューズではないか。同じシチュエーションにいたら、誰だつてシスコンになりそうだ。むしろ出来すぎていて、かえって怪しいほどだ。

「いやあ、お前にも見せてやりたかつたよ、あのとときの十花姉さんを。あれは女神か天使だね。美人で優しくて頭がよくて芯が強くて情に篤いのになかなか流されてくれなくて……。日本に帰したくなくて、泣きながらハンストまでやったのに置いていかれたときは、正直どうしようかと思つたが」

前言撤回。

そこまですたらまつとうでも健気でもなく単なる大馬鹿だ。『どうしよう』はそれこそ彼のハンストに付き合わされた周りの大人たちのセリフだろう。

「叔父さんがどうしようもないってことは十分すぎるほどわかつたから。それよりも、お父さんのほうは大丈夫だったの？ ものすごくシヨック受けてみたいじゃん」

血のつながりはないものの、ポジシヨン的には僕の祖父にあたる人なのだ。その後の様子が気になる。

「親父？ まあ、大分参つてたな。何せ、大学生の頃からずっとレ
ティー筋。一度は留学生だった一貴の祖父さんにとられちまって、
それでも思い続けて、祖父さんが亡くなった後に日本まで行ってプ
ロポーズしたらしいから。結局この歳になるまで新しい恋人もつく
らず再婚もせずに生きてるよ。あれは生涯レティー人だろうな。ま、
一応ぴんぴんしてはいるけど」

「そ……うなんだ。でも、元気になったならよかったよ。大好きな
奥さんが亡くなって、おまけに息子はハNSTだなんてあんまりだ
からね」

シドの、たつた一人を思い続ける執念というか根性というか、そ
れは間違いない父親ゆずりだと僕は確信した。

「ああ、もう明日が今日になっちまったな。一貴、お前リビングの
ソファで寝ろよ。夏だし適当にバスタオルでもはおつてりや風邪ひ
くこともねえだろ。お前があと二十センチ小さけりや一緒に寝てや
つたんだがな」

やれやれ、と肩をすくめる男は、続いてふああ、と大きなあくび
をした。「でつかくなりすぎ、お前」

おやすみの挨拶をして、叔父は部屋に引き上げていった。

僕は二人分のマグカップを片付ける。

ひとけのないキッチンにはひんやりとして、風が草木を揺らす音が
かすかに聴こえた。

高校生のシドを想像してみる。きつと今よりも生意気で、今と同
じくらい物憂げで、尖っていたに違いない。変わり者だから友達は
すくなかったかもしれない。でも、意外と女の子には人気がありそ
うだから侮れない。

すくなくとも、彼は自分が欲しいものをしていて、それを手に
入れるために努力を惜しまない人間だったということだ。非常識で
自分本位で傲慢な十六歳だっただろうな。きつとまわりの大人たち
は気苦労が絶えなかっただろう。

考え出すとなんだかちよつと楽しくなって、僕はひとりでくすく

す笑った。ソファに寝転がってからは、翻って自分自身のことを考えた。比べるつもりはないが、あの叔父にだって高校時代はあったのだ。

なんだか変な感じ。

僕はなにが欲しいんだろうな。

いつかわかるだろうか。

ああ、でも、急がなくちゃ。

進路希望、加藤先生、出さないと。

悪いよな。悪い？

そういや、あのときどうして幸村に怒られたんだっけ。

三鷹は……。

夏の風物詩。

台風がきた。

朝目を覚ますと、我が家はすでに暴風域に入っていた。ゴウゴウと吹き荒れる風が雨戸を揺さぶる。この分では植木鉢も自転車もなぎ倒されているだろう。清水の舞台から二十回は飛び降りた気で買ったルノーのマウンテン・バイクはどうなっただろう。もう手遅れだろうか、鮮やかなブルーの塗装が剥がれていたら悲しい。悲しいけれどどうにもこうにも、ベッドの中は居心地がよい。外が台風ならばなおさらだ。仕方がない、乗ればいいか、とあっさりあきらめ、僕はベッドの中で寝返りをうった。

僕は、台風や雷が嫌いじゃない。いや、実はけっこう好きだ。夕立なんかも、素敵だと思う。

アスファルトに土ぼこりの匂いがまじり、空気が生ぬるく水分を含んでひたひたになると、そろそろ来るな、と空を伺う。さっきまで真っ青だった空に大きな雲が立ち込め、焦げ付く太陽を飲み込み、足元から影が消える。風がざあっと吹いたとたん、大粒の雨が地面を斑に染めてゆく。スコールのように一気に激しさを増し、窓や車や人や犬や取り入れそこねた洗濯物をすみずみまで水浸しにする。街全体が鈍色にひかっている中で人々が足早にとおりすぎてゆくのを見ていると、自分が忘れ去られてゆくような、妙なすがすがしさを感じることもある。そこには、人間の古い部分に呼びかけるシグナルが混じっている。なんとなく、そわそわして耳をすませてしまふのだ。この、ちょっとだけ走る緊張感がヤミツキになるのだと思う。

そんなわけで、僕は風のうなり声に耳をそばだて、外の様子を想像しながら寝返りをうった。雨戸が閉めてあるので、部屋の中は真

つ暗だ。時計を見るのはなんだか勿体なくて、僕は手探りでそつと枕元の目覚まし時計をふせた。それでもうしばらく、この非日常的な空間を楽しめる。そう思った矢先、階下から僕の名前を呼ぶ声がした。

「なんだよ一体、と思いつつ往生際悪く狸寝入りをきめこんでいると、唐突に部屋のドアが開かれた。とつくに陽は高くあがっているらしく、暗闇に慣れた目には廊下が恐ろしく明るく感じられた。

「一貴、仲本くんから電話だ」

問答無用で部屋の明かりがつけられて、僕はしぶしぶ上半身をベッドからもぎ離れた。「仲本？」

仲本晴吾なかもとせいごはたしかにクラスメイトだけど、夏休みの朝っぱらから電話をかけてくるような行動的なやつじゃない。そもそも、携帯電話を持ちだしてからは、僕宛に固定電話が鳴ること自体がまれだ。

「一貴」

階下から再び呼ばれ、今度こそベッドから抜け出すと、起き抜けの回転数が落ちた頭にパジャマという心もとない状態で受話器を取り上げた。

「……はい」

無愛想な声で電話に出たら、後ろから十花に頭をはたかれた。

「もしもし、奈瀬です」母親の教育的指導のもと、言い直す。

「ごめんね、寝てた？」軽い口調で仲本が返してきた。

調子は軽いが、ピッチは低くてすばらしくいい音だ。朝っぱらから聴いていいような声じゃない。

「平気。もう起きようと思ってたし」

自慢じゃないけど僕は朝に弱い。午前中、とくに十時までの時間帯は炭酸の抜けたコカ・コーラぐらいどうにもならない。今も立っているのが面倒になってきて、僕は受話器を肩と耳の間にはさんだままその場にずるずると座りこんだ。

「あ、あのな。とりあえず連絡網の中身、先に言っとくわ。台風で今日は補強なしだから。って言っても、その分じゃ奈瀬は来るつも

りなかつたんだろっけど」

仲本は気楽な調子で笑いながら、僕が寝ぼけていることを看破した。彼はクラスの中の男の中でも低めの穏やかな口調で話すので、気を抜くと夢の世界へとUターンしてしまいそうになる。

「で、こつからが本題だけだな。おい、奈瀬、起きてるか？　ちやんと聞いてよ？　お前が茜ちゃんにも電話するんだよ？」

「起きてる」応えながら、ようやく頭が正常に動き出して五感が覚醒し始めたのがわかった。

何のことはない、仲本は学校の緊急連絡網に従って電話してきていたのだ。僕の学校は夏休みの補習授業の代わりに、補強講習という時間をとっていて、参加は生徒の自由意志に委ねられている。あくまでも、自発的に学ぶことが学問の基本姿勢であるという校長の英断らしい。補強講習は夏休み中、お盆を除いて週に二日程度組まれている。基本的には個人が苦手分野の克服のために受けるが、みんな大体、友達同士で話し合っって好きな授業を受けている。ちなみに、僕は一度も出席したことがないが、幸村なんかは真面目に顔を出しているらしい。僕の場合、余裕があるからではなくてただ単に暑い中を出歩くのがおっくう、という怠惰きわまりない理由であることが個人的には残念だ。

などと若干自虐的な冗談に、思考の十パーセントほどを割きながら、僕は仲本の話に「起きていますよ」の合図がわりのあいづちを打つ。

「うちのリーダーと姫さんがどうも前から計画立ててたらしいんだわ、この夏休みはクラスみんなでキャンプするって。泊まる場所も姫さんの親がただ同然で提供してくれるらしい。日取りは今のところ二週間後の土日、一泊二日。食事は出るけど、その他に食べたいものがあつたら個人的に持ち込み可。あとの細かい話は、明後日の補強の後でみんな話し合う予定だから、参加したかったら奈瀬も顔だしなよ。明後日はたしか、加藤の世界史だろ」

「よく加藤が許可したな、そんな計画」

僕は半ばあきれてつぶやいた。とても大学受験をひかえた高校三年生の夏休みとは思えないのどかさだ。

「そのあたりは、あのふたりのことだからソツなくクリアでしょ。案外、加藤も行きかけたのかもしれないしね、キャンプ。どちらにしても大人の付き添いが必要なんだから、いいんじゃないの、担任くらい。俺は絶対行きませよ。姫さんと一つ屋根の下なんて多分これが最初で最後だし。チャンスは逃さず、思い残すことのないように全力で臨むよ」

「あれ？ 仲本って推薦？」

「馬鹿おっしやい。センター試験組だ」

「男前」

僕は苦笑しながら、きつとクラスのほとんどの男が仲本と同じ答えを返すだろうなと予想した。

「奈瀬は姫さん狙いじゃないの？ あ、そうか、茜ちゃんがいるのか」

「ばあか」

予想していなかった名前に受話器を落としそうになる。三鷹は幸村の彼女だぞ。幸村と仲のいい仲本が知らないはずはない。彼流のジョークなのだ。

「茜ちゃんも美人だけど、男が絶対声かけられないタイプだよねえ。そういえば、もう何週間も前だけど、クラスで茜ちゃんが雑誌めくってたからちらっと覗いてみたら、日本語じゃなかったよ。すごいよねえ。俺にも見せて、とか言わなくてよかったよ」

「そうか。英語だったらむしろラッキーだと思わないとな」

僕は冗談半分、本気半分の HALF AND HALF で答えておいた。

「とにかく、そういうことだから茜ちゃんにもよろしく」

「了解」

三鷹は今アメリカにいる、というのをわざわざ説明するのが面倒で、僕はそれだけ言って電話を切った。

「リーダーと姫さん、ねえ」

冷蔵庫から冷えたウーロン茶を取り出してガラスのコップに注ぎながら、あのふたりならやりそうなことだ、と考える。

『リーダー』こと夏木咲也と『姫』こと九条璃桜。ふたりは我がクラスの栄えある学級委員長さまだ。今回の緊急連絡も、担任からまずこのふたりへ連絡がゆき、そこから二手にわかれてそれぞれ名簿の順に電話をかけてゆく。この機会をのがさず、正規の内容である補強講習キャンセルに加え、サマーキャンプのお誘いを乗せてくるくらい、あのふたりには朝飯前なのだ。

ニックネームのとおり、夏木はイニシアチブをとるのが上手なりーダータイプの頼りになる女子で、クラス内外の女子からは絶大な人気を集めている。また、男からは若干遠巻きにされつつも一目置かれた存在で、もちろん担任をはじめとする教師陣の覚えもめでたい。元生徒会会長という肩書きからして、絵に描いたような才媛だが性格はあくまでさっぱりとして、こういう言い方は失礼なのかもしれないけれど、そこいらの男よりもよほど男前である。

その夏木とならんで我がクラスの勢力分布図を二分しているのが九条璃桜だ。彼女は、一言で言ってしまうとお嬢様で、こちらは言わずもがなという気がするが男に人気がある。僕らの学年は、九割以上の男が一度は九条に憧れ、その半分は現在進行形で彼女と親密なお付き合いがしたいと日々精進にはげみ、さらにその半分は何らかの形で積極的なアプローチに出た経験があるというのが通説だ。ちなみに、未だ成功した者は皆無という噂の難攻不落要塞。夏木咲也とはまた別のカリスマ、というよりこちらはアイドルに近い。

同性に人気がある女子と異性に人気がある女子。正反対に見えるふたりは本来互いを疎ましがるものではないのだろうか。もしくは、互いをライバル視して反目しあってもよさそうなものだ。

しかしである。彼女たちは非常に友好的な関係を築いている。男の目から見たらちょっと友好的すぎるくらいだ。基本的に九条は率直で素直で物怖じしない。彼女の言動はときに周囲をどきりとさせるが、そういう場合は必ずと言っていいほど、夏木がさりげなくフ

オローにまわっている。同じクラスにいればそんな場面には事欠かない。そのおかげか、九条はクラスの女子からは『すこし変わっているけれど、九条璃桜だから仕方がない』という免罪符というか、治外法権というか、そんなものを獲得しているようだ。

その結果どうなるかと言うと、これは中央集権である。九条璃桜が発案し、夏木咲也が指揮をとればクラス全体が動く。そういう仕組みが始業式からの二ヶ月で出来上がっていた。また、夏木のリーダーシップと九条のカリスマは、体育祭ベストチームワーク賞という形ですでに証明されている。僕らの学校では、夏休みの前に体育祭が催され、チームはクラスごとの学年縦割りで編成される。百人を超える高校生の集団を、彼女たちほどうまくまとめあげたリーダーは他にいなかった。

とにかく、そんなふたりが企画したサマーキャンプだ。きつとクラスのみんなは両親の心配や反対を押し切り、全力で参加してくるはずだ。僕はちらりとカウンタ・キッチンに立つ母親の姿を盗み見た。

十花は僕に受験勉強をしろとは言わない。実力テストの結果も聞いてこないし、成績書に目を通していいのかどうかさえ怪しい。受験生の母親としてはかなりレアな人物だと思う。自分は自分、息子は息子という考え方を徹底しているが、放任主義というわけでもない。実地で検証してみよう。

「母さん、俺、再来週にクラスのみんなでキャンプに行くかもしれない」

とんとん、と包丁がまな板をたたく音が同じリズムで繰り返される。きゅうりが輪切りになって小山をつくっていた。昼飯のサラダになるのだろう。隣の小鍋では乳白色のマカロニが踊っているはずだ。

「君の好きにしてください。もう自分で判断できるよね」

検証終わり。止めるでもなく、勧めるでもなく、十花は料理の手を休めない。息子の大学受験よりも作りかけのサラダの塩加減が気

になる人だ。自由にさせてもらえる半面、コケてもそれは自分の責任。これが我が家の教育方針で、十花にも僕にも合っているのだと思う。

「ああ、そうだ。茜ちゃん、そろそろアメリカから帰ってくる頃だったかな？」

そう言えば、僕もキャンプの連絡を三鷹とその次のクラスメイトにまわさなくてはならない。

「予定では明後日だったと思うけど。もう一度メールで確かめてみるよ」

「ありがとう。でも、もうお昼ごはんができるから、パソコンを立ち上げるのは食べてからにしてね」

僕がインターネットに接続するとなかなか止めないことを知っている十花は、食器をテーブルに並べながら釘を刺した。

「あ、じゃあ、連絡網だけ先に」

僕は急いで自分の部屋に戻り、終業式の際にもらったプリントを探し出した。そこにはクラスメイト全員の名前と電話番号が載っている。最近は個人情報の保護や、漏洩を防ぐ目的で学校側も若干神経質になっているようで、赤いインクで『取り扱い注意』の文字もプリントされていた。

「ええと……三鷹茜の次は、と。……あ、ムーミンか」

僕はフィンランドの妖精を連想させる、ふつくらとしたフォルムの女子の顔を思い浮かべた。誰が最初に呼び始めたのかは知らないが、彼女のあだ名はムーミン。それが体型もさることながら雰囲気にもぴったりはまっていて、クラスでは本人も進んで採用したオフィシャル登録済呼称だ。まだあまりしゃべったことはないけれど、普段は大人しいイメージの女の子だったと思う。どちらかというと、僕は『スノークのお嬢さん』に近いと思っている。

そんなムーミン、もとい森川奈菜もりかわななの電話番号をプッシュして、呼び出し音が鳴ると三回目で本人が出た。

「もしもし、森川です」

「あ、おはよう。同じクラスの奈瀬だけど、わかる？」

しばらく返事がなかった。あれ、もしかして覚えてもらえてないのか、とほんのり心配になってきた頃、ようやく「はい、あ、うん、わかるよ」とすこし焦った声が応えた。

自己紹介の必要がないことがわかってほっとしたところで、僕は簡単に連絡内容を伝えた。

森川はすぐにキャンプに行く気になったらしく、「どうやってお母さんを説得しようかなあ」と真剣に考えていた。

互いに、リーダーと姫が好きそうな企画だね、という意見でも合意し、それじゃあ、と言って受話器を耳から離そうとした間際、「奈瀬君は、キャンプ行く？」と聞かれた。

「どうかな。まだわからないけど」
まっさきに三鷹と幸村の顔が浮かんた。あのふたりは行くだろうか。

「そっかあ。まだわからない、のかあ」

僕はその言い方にちよつと引っかかるところを感じたけれど、気にとめることもなく、今度こそさよならを言っ受話器をおいた。

キッチンに戻ると味噌汁の匂いがした。

「スパゲッティ茹でてあるから、好きなだけとりなさい」

浅蜷の味噌汁とボンゴレ・ピアンコにマカロニサラダという統一感のあるのかないのか微妙なメニューは、それでも文句なく美味しかった。

三鷹への連絡とメールチェックを兼ねてパソコンをたちあげる。メーラーを起動させてざっとメールボックスに目を通し、新着メールからスパムや解除し忘れたメルマガなどをゴミ箱へ移すと、新しくメールを作成した。

日本語で書くか英語で書くかで数秒悩んだあと、万が一ブラウザが日本語環境になかった場合のことを考えて英語で書くことにした。英語の勉強になるかも、というのはほんの気休めだ。

『 Mitaka ,
 Leader and Hime are planning
 to go camping during this summ
 er vacation .
 What do you think ? Are you go
 nna be in ?
 By the way , Toka wants to kn
 ow when you gonna be back . 』

リーダーと姫がキャンプを計画しているけど、三鷹はのる？あと、母さんがいつ帰国するのか知りたがってる。これだけ打って、さらに五分ほどねばってみたものの他に気の利いたイデオムも思い浮かばず、短い文面を何度か読み返して僕は送信ボタンを押した。午後をすこしまわっていた。約半日の時差があるので、むこうはそろそろ真夜中だ。もっとも、夜更かしの三鷹にはまだほんの宵の口だろう。

パソコンはひとまずそのままにしておいて、僕は自分の部屋にもどることにした。寝起きで電話にでて、朝昼兼用の食事を摂るあい

だも、ずっとパジャマのままだったのだ。いくら夏休みとはいえ、一日中パジャマというのはいかなものか。こんなことでは新学期が思いやられる、と自分で自分にささやかなプレッシャーをかけて、僕は着替えることにした。

まだ雨戸が閉じたままだったので、部屋の中は真っ暗だった。蛍光灯の灯りをつけて、筆筒からタンクトップとジーンズをひっぱりだす。やけに静かだなと思い、雨戸を開けてみたら空はもう真っ青になっていた。天然の光はまぶしくて、僕は目をほそめた。まだ屋根や道路が濡れている。台風は雲も一緒に吹き飛ばしてくれたらしく、遠くの山あいにもちよっぴり入道雲が顔をのぞかせているだけだった。

「夏だな」

今この瞬間にも気温はぐんぐん上がり、それに比例して蝉の声も大きくなる。一分のすきもない夏空を見上げ、まだすこし強い風を感じていると、机の上に放り出してあった携帯電話が短く震えた。サブディスプレイにメールのマークが点滅する。幸村からだ。

『明後日の補強こいよ。キャンプ行こうぜ』

僕は軽い気持ちで『了解』と返信した。げんきんなもので、一度参加すると決めてしまえば、ほのかな期待が沸いてくる。幸村と自分が参加するならあるいは、というやつだ。運がよければ返事が返ってきているかもしれないと思い、僕はもう一度パソコンに向かった。

メールボックスをチェックすると、果たして三鷹からの新着メールが届いている。交差点の前に来た途端、赤信号が青に変わったみたいなのラッキー。よし、と気合を入れてメールを開くと、三鷹らしい簡潔な文章がブラウザに表示された。予定を変更して夏休みいっぱいにはアメリカに留まるのでキャンプには行かれない、というのがその全文である。僕も人のことは言えないが、相変わらず味も素っ気も挨拶さえもないメールだ。もちろん三行の文中には詳細な理由などありはしない。

幼馴染が不参加だというだけで、氷で薄められたジュースみたい
に、キャンプが急に味気なく思えてくる。重症だな、と心中溜息を
つく。パソコンの電源を落とし、代わりに携帯電話を取り上げる。
幸村は知っていたのだろうか。知らなかったら、きつとがっかりす
るだろう。どちらにせよ、早々に前言撤回、とはいかなさそうだ。
気が乗らないクラスキャンプに参加するか、親友にさんざん詰られ
た拳句、拗ねて口をきいてもらえなくなるか。どちらがまじだろう、
と考えているあたり、生来の面倒くさがりだと思う。

僕にとっての三鷹は航海士のコンパスであり、旅人が見上げる北
極星だ。つまり、正確であり揺るぎない。もしも彼女がまちがって
いるのなら、この世には信頼に足るべきものなどひとつもないと、
僕は本気で信じている。

まだお互いがほんのちいさな子供だったころ、彼女はすでに自分
が誰であるかを知っており、他の誰にも見えなかった。三鷹茜の視
点、視野、洞察、直感、客観性、分析力、思考、すべての言動が他
人のそれを圧倒していた。それはもう、比べることさえ馬鹿らしい
ほどに。

歳も性別も国籍も関係なく、世界は三鷹茜とそれ以外に分かれて
いた。その境界線はあまりにもはつきりとしすぎていて、僕は子供
心に彼女はなんてひとりなのだろうと思ったものだ。

だからというわけではなく、ましてや僕がどうにかできるなんて
思いがつたわけでもないけれど、僕は三鷹のとなりにいることが
多かった。たいていはふたりきりで、おしゃべりしたり本を読みあ
つたりあぜ道を散歩したりした。すべては子供のたわいのない遊び
だったが、彼女はよく笑い、よくしゃべった。どんなに遠くへ歩い
ても三鷹と一緒にいて道に迷うことはなかったし、思いつきで尋ね
る質問にはいつもちゃんと答えが用意されていた。たとえば、どう
して空は青いの？ だったり、どうやって飛行機は飛ぶの？ だつ
たり、死んだらみんな幽霊になるの？ というような。

成長するに従い、三鷹はしゃべらなくなった。いろいろな人や物

事を切り捨ててしまった。自分が自分以外に与える影響、望む望まないに関わらず、それを正確に把握して彼女はできうる限り不干涉を貫いた。僕に対しても。

そうなつてから初めて気づいた。自分がどれだけ彼女に依存していたかを。大事な決断を迫られるとき、なにかを選ばなくてはならないとき、いつも無意識に彼女の思考をトレースしようとしていた。三鷹ならどう対処するだろう、どう行動するだろう、その思考パターンは僕の中であまりにも自然になっていた。それは三鷹と出会って十年経った今も変わらない。僕本来の思考回路と溶け合つて、もう、誰の視点で物事をとらえているかもあやふやだ。確かに考えているのは僕で、僕の脳が信号を出して情報をこねくり回しているだけなのに、主観と客観が奇妙に交じり合つたそれは僕のものであつて僕のものではないような気がした。

三鷹はそんな僕の癖に気づいていたようだ。気づいていて、僕が間違えればそつと修正してくれた。修正パッチは会話の端々に表される微妙なニュアンスだったり、かすかな表情の変化だったり、素っ気ない一言だったり、よくよく観察していなければ見逃してしまつようなものばかりだ。けれど、彼女の与えてくれるヒントが、まだ自分を完全に切り捨てはしないという証拠のような気がして、僕はその度に安堵した。

彼女の思考の広さも深さも、僕の想像なんて及びもしないだろう。そもそも、三鷹茜以外に三鷹茜の思考を推し量れるはずがない。ましてや、僕は天才でも何でもない、ただの平凡な人間だ。卑屈になつているわけでも過大評価しているわけでもなく、ただ、僕は純粋に彼女をすごいと思うのだ。

くやしさも勝ち負けもなく、それどころか比較の対象にすらならない。そういう人間が存在することを、僕は彼女と出会って初めて知った。そして、彼女の存在自体を稀少で貴重で、この上なく好もしく、綺麗だと感じる。

三鷹茜の友人であることが、僕が唯一誇れること。

彼女に冗談を言って笑わせたことが密かな自慢。

口数がすくなくて、誰といてもひとりで、人と関わることを半ばあきらめてしまった、僕の幼馴染。

はやく帰ってこいよ、と。

メールに書けないかわりに呟く。

君はきつと、全部ひとりで決めちゃうだろうけど。

ずっと先までみえちゃうだろうけど。

僕や幸村がそばにいることをゆるしてくれたように、自分をもっと甘やかしてあげたらいいのにと、考えずにはいられない。

僕が考えることなんて三鷹はお見通しだろうから、僕はあえてそうする。ひとりになりたがる、三鷹のそばにいたいと思う。

「だから、幸村と付き合い出したときは、本当に驚いたな。正直、ちよつと妬けたよ」

メールのマークが点滅する携帯電話を指ではじいて、僕はすこし笑った。

その日の午後、それも一番暑い時間帯に叔父から呼び出しがかかった。生憎十花が仕事の関係で外出していて、しぶしぶ電話にでたのが運の尽き。

「かずたかー、ちょうどよかった、ちょっと今手が放せねえんだ、手伝いに来てくんねえかな」受話器越しに間延びした男の声が聴こえて、なんとなく嫌な予感はしたのだ。

「なんだ、叔父さんか」

「なんだとはなんだ。こんな時だけ礼儀ただしく叔父さんなんて呼ばなくていいんだぜ。それよりも家が大変なんだ。昨日の台風で一気にガタがきてな、いろいろ飛ばされちまつたし、修理したいんだが俺ひとりじゃどうにもならねえし。……あ、今舌打ちしたる。聞こえたぞ、クソガキ」

「溜息ついたんだよ。だいたいさ、俺が初めてあの家に行ったときだって相当のボロだったじゃんか。床は軋むし蜘蛛の巣は張り放題だし二階のトイレの電気はつかないし住人はろくに手入れもせずに分らつとどっか行っちゃもうし！今じゃほとんど幽霊屋敷だぜ？なんでそんなになるまで放っておくかな。住むなら修理とかリフォームとかするよね、普通」

「だあかあらあ、こうやって今やってるだろう。そうぼんぼん捲くしたてんなよ。お前だって、あの家が雨漏りして水に濡れた階段が腐って抜け落ちたり傾いたシャンドリアが急に落下してきたり割れた窓から泥棒が入ってきたりたまたま居合わせたお前が人質にとられたり身代金を要求されたり十花が悲しんだり俺が悲しんだりしたら困るだろう？」

「無駄に具体的だね」本当に、無駄に。

「お前俺の屋敷ダイスキだもんな？」 休みごとに入り浸ってるじ

やねえか。だつたらお前だつて同罪だ。いい子だから手伝いに来るつて言えよ。叔父ちゃんは今もう、ほんとに参つてるんだからさ」

僕はぐつと黙り込んだ。はつきり言つて、行きたくはない。外は屋敷が見えそうなほどの暑さだ。参つてる、なんて弱気なこと言つているが、シドは殺したつて死なないタフな男だし、そもそも参るほど真剣に家の修理なんてするものか。そんな殊勝な人間ならとうの昔にやつている。

しかし、シドの飛躍した心配はともかく、僕がシドの屋敷を気に入っていることは間違いない。もしも本当に床を踏み抜いてしまつたりしたら、きつと後々手伝わなかつたことを後悔するだろう。

「しかたないなあ」

僕は目先の利益よりも将来への投資を選び、しぶしぶシドの頼みを受けることにした。

「サンキューー貴、あいしてるぜ甥っ子。屋敷で待つてるからな」

それだけ言い置いて、電話はブツリと切れてしまった。最後のセリフだけ聞いたら、英国人というよりも軽くてノリのよいラテン系の男が浮かびそうだ。そこまで考えて、僕ははたとシドがなぜわざわざ家の固定電話にかけてきたのか、その理由に思い至つた。僕に用事があるのなら、初めから携帯電話にかけてくるはずだ。

「さては母さんにふられたな」

十花は写真の話を断つたのだろう。シドが遠慮したり緊張したりするのは彼女を相手にするときだけだ。面と向かつて断られて、それでも諦めきれずに機会をうかがっているにちがいない。直接十花に電話できずにいるところが姉弟の力関係を物語っているようで可笑しかった。

僕は財布と携帯電話を掴み、すこし迷ってから世界史の教科書をバックパックにつっこんだ。夏休みに入ってから一度も開いていないが、補強講習に顔を出すなら形だけでもさらつておこうと思つたのだ。ツートンカラーのマウンテン・バイクは台風の前に十花が玄関に入れておいてくれたらしく、傷ひとつついていなかった。母

親に感謝しつつサドルにまたがると、強い日差しがじりじりと肌を焼き、湿った空気が全身にまとわりついてくる。この季節は自転車に乗ってもあまり爽快感が味わえないところがツライ。それでも、生暖かい風を頬に感じながらペダルを漕ぎ出すと、僕は叔父の屋敷へとむかった。

本人が酒のツマミに語っていたが、彼の母親で僕の祖母にあたる人はイギリス人と日本人のハーフで、当時オックスフォードに留学していた僕の祖父と結ばれた。ふたりは女の子に恵まれたが、ほどなくして祖父が病死。その後、シドの父親からの根気強いアプローチがあつて祖母は再婚したのだ。子持ちの未亡人だったレティツィアとの結婚には親族からの風当たりがさうとう強かつたらしい。シドの父親はそれらをすべて粉碎し、ときには辛抱強く、ときには強引に、ありとあらゆる手を尽くしてまわりを説得してしまった。シドに言わせると、当時のエピソードは今でも親族の間で語り草になっているのだとか。奈瀬の家はシンクレア家と縁が薄く、僕はシドのお父さんと面識はないけれど、まちがいなく似たもの父子だと思う。

シドだつて、まともな格好をして死んでいるか眠っているか、せめて黙っていれば、誰の目から見ても文句のつけようのない英国紳士だ。灰色がかつた金髪や知的な雰囲気、碧眼、手足が長く腰高のプロポーシオンは日本人にはない魅力だ。なにより、全体としてのバランスが美しい。同じ男として、憧れないといえば嘘になる。

ところが普段の彼はというと、一年中くしゃくしゃのシャツにジーンズで、髪はぼさぼさ。野暮つたい眼鏡がデフォルトという、真正銘格好に無頓着な人なのだ。さらに、見た目に輪をかけて振る舞いが奇矯なものだから、紳士は愚か一般人にも見えない。

はつきり言つて、僕の理解の範疇なんてはるか地平線の彼方だ。三鷹が不動の北極星なら彼はムーミン谷に落っこちる狂った彗星だ。僕にはわけがわからない。わけがわからないのに、ひどく魅力的であることは認めざるをえない。僕は、あの古い屋敷を気に入って

ると同じかそれ以上に、変人の叔父を気に入っているのだ。

そう、このくそ暑い真夏の昼下がりに自転車をかつとばして呼び出しに応じてしまうくらいには。

やっとの思いでたどりついたとき、僕は全身汗でびっしょりになっていた。ナイロン製のバックパックが背中に張り付く。中で教科書が発酵してワインになっていても驚かない。元気よくふりそそぐ蝉の声が恨めしかった。

とりあえず一息つこうと思い、玄関の扉を開けた途端、「かずたかー」とやけに間延びした声に呼び止められた。声は真上から降ってきた。何歩かさがって上を見たら、屋根の上にシドがいた。

「何やってんの？」

叔父は腕まくりに足まくり、おまけに麦わら帽子までかぶって二階の出っぱった窓に腰かけていた。昭和の子供がカブトムシを捕りに出かけるような格好だ。思わず虫かごを渡してあげたくなる。

「なにつて、修理に決まってるだろうが」

シドは屋根の上から怒鳴り返してきた。よく目をこらして見てみれば、彼の顔からも汗がしたたっている。なにもこんな日中に屋根の上で作業しなくてもよさそうなものなのに。

「ちよつと休憩したら？ 夕方になったらもうすこし涼しくなるじやん。喉かわいたから飲み物もらうよ」

叔父は夕立がどうの雨漏りがどうの、とぶつくさ言っていたが、やがて梯子を下りる音が聴こえてきた。僕は一足さき上がりこみ、まっすぐキッチンに向かって冷蔵庫の中を物色した。

「相変わらずビールばかりだな」

今日はかるうじてライムとペリエが見つかったので、それを頂くことにした。これらもどうせ、アルコールと混ぜられてカクテルか何かになるはずの運命なのだ。

緑色のガラス瓶の口から輪切りにしたライムをつっこみ、残りはラップを巻いて冷蔵庫へ戻しておく。ペリエを片手にリビングに顔を出す、シドはソファの上でだらしなくのびていた。

「お疲れさま」

片目だけ開けて僕のほうをちらっと見たかと思うと、おもむろに右手が伸ばされた。僕はおとなしくガラスの瓶を手渡してやる。一口飲んでから、アルコールが入ってないことに気づいたらしくちよつと嫌そうな顔になったが、つづけてもう二口ほど飲んだ。

「……はあ。まったくお前の言うとおりのボロ家だぜ。折れた木の枝が二階の窓ガラスを割るわ、そこから雨が吹き込んで部屋中水浸しになるわ、屋根から雨は漏るわ、それがたまたま整理しようと思つて出しっぱなしにしてた写真の真上で、現像したばかりの写真が水死体になるわ」

「それはご愁傷様」

「ごしゅ……なんだつて？」

「残念だったね、て言ったの」

僕は叔父の手からガラス瓶を取り返す。このままの勢いで全部飲まれてはかなわない。

「一貴、とりあえずお前は二階の部屋、掃除してくれ。俺はもうちよいしたらまた屋根に上がるから」

そう言つと、麦わら帽子を顔にのせ、胸の上で手を組んで静かになつた。昼寝するつもりのようなのだ。

僕は仕方なく空になつた瓶を捨てて二階へあがってみることにした。心なしか、台風の前よりも階段の軋みが大きくなつたような気がする。二階には階段をはさんだ両側にそれぞれ三部屋、合計六部屋がある。手前から一部屋ずつドアを開けて、中を確認していった。「ビンゴ」

三度目にドアを開けた先が目的の部屋だつた。正面にある窓の一部がダンボールでふさがれている。割れたガラスこそ散らばっていなかったが、雨が吹きこんだ床には新聞紙やウエスやティッシュペーパーが散乱していて主人の狼狽ぶりが見てとれる。なんとかしよつという努力の跡がうかがえないこともないが、途中で嫌気がさして投げ出した、が正解だろう。

僕は部屋の中をざっと見渡してそう見当をつけると、まずはモップと雑巾とゴミ袋を調達することにした。畳やカーペット敷きではなく、フローリングだったことが不幸中の幸いだった。

「バケツもいるな」

吸いとりきれなかった水溜まりと乾きはじめた泥水を思いうかべて気合を入れる。ジーンズを膝までまくりあげ、掃除用具一式を装備して災害現場に到着すると、まずは濡れた紙と布をゴミ袋にどんどん捨てていく。ウエスだと思ったのはどうやら叔父のTシャツとトランクスのようだ。雑巾にもなりそうにないので、そのまま捨てることにする。

細かいガラスの破片が残っていると危ないので、モップでざっと床を撫でてから、こびりついた泥や砂を雑巾でぬぐった。そうやって動き回っていると、汗が頬を伝い落ちる。バイト代までは期待しないが、夕飯くらいは奢ってもらわないと割にあわない。僕は叔父に連れていってもらおうレストランをあれこれ考えて暑さをまぎらわせた。

小一時間ほどかけて部屋はようやく台風前の景観を取り戻しつつあった。ついでなので部屋全体に雑巾がけをしていると、ライティングデスクの下から濡れた木の枝が出てきた。

「こいつが元凶か。どう責任とってくれる」

僕は折れた枝を拾い、立ち上がるうとした拍子にデスクにしたたか頭をぶつけた。

「いつてえ……」

思わず頭を抱えていると、目の前をひらりと横切るものがある。反射的に指で搦んでいた。覗き込むと、一枚の古い写真だった。若い女性が生まれたばかりの赤ん坊を腕に抱いて微笑んでいる。

「母さん？」

日付けは十七年前。まだ二十代の十花と幼い僕の写真、だと思う。よほど大事にしまわれていたのか、ずっと日の目を見なかったのか、折れ目ひとつなく陽に焼けた痕もない。何気なく裏返して、そこに

書かれていた文字に目を奪われる。見覚えのある母親の筆跡で、こ
う書かれていた。

『わたしは幸せだ。

奈瀬や、一貴や、君に出会えた。

君たちの存在がわたしを支え、救い、慰め、律し、ときに翻弄し
つつも、わたしに喜びをあたえてくれる。

覚えておいてほしい。

わたしも君を、かれも君を、だれも君を、貶めることなどできな
い。

この世でそれができるのは、他ならぬ君だけだ。

自分を哀れむのはやめなさい。

君はもつと自由になれる。』

十花が半分だけ血のつなだった弟に送った言葉。その下には、震
えるような走り書きの筆記体でひとこと、『A s y o u w i s
h』と添えられていた。

あなたの、ねがうままに。

姉が何を想ってこれらの言葉を送り、弟がどんな気持ちで読んだ
のか、当時を知らない僕には想像もつかない。けれど、一見突き放
しているようで、十花は十花なりに、たったひとりの弟を愛しく、
いじらしく思っていたのだろうか。

僕はすこし、おもはゆい気持ちになった。ふたりが、僕と変わら
ない歳の頃にこんなやり取りをしていたなんて、想像したこともな
かった。

「シドが十花をスキな理由、か」

こんなところにも、転がっていた。きっとほかにも、目に見える
ものも見えないものも含めて、たくさん証拠物件がこの家には眠
っているのだろう。

僕は、ライティングデスクのひきだしに、そつと写真をしまった。
そうしてから、ずいぶんと時間がすぎてしまっていることに気づく。
外はいつの間にか遠雷が鳴っている。夕立がきそうだ。屋根で修理

をしているはずの叔父を思い出し、僕は掃除用具を片付けて様子を見に行くことにした。

階段を下りている間に、暗く立ち込めた雲から大粒の雨が落ちてきた。ぱたぱた、という音はすぐに激しい雨音にとって代わった。きつと叔父はずぶ濡れになっているだろう。急いで玄関へ走る僕の背後から、英語で罵る声が聴こえた。まさか、という予感とともにリビングを覗くと、雨漏りを直しているはずのシドが天井から滴る雨に顔を洗われて飛び起きるところだった。

「まさか今まで寝てたの？ 俺が二階をひとり掃除してたつてのに？」

僕の怒りを代弁するように、雷鳴が響いた。さっきよりも近い。シドは見ているこっちが眠くなりそうな大あくびをして、やっと僕を見た。

「わりい。……寝てた？ 俺」

「どうやらそうみたいだね」

できる限り冷たく言い放ったつもりだが、叔父はさして悪びれるわけでもなく、寝癖のついた金髪をがしとかきませた。そしてついと腕を上にもたす。ひろげた手のひらに再び水滴が落ちた。

「とりあえず、応急処置しなきゃな」

そして再びバケツの出番となった。ソファを後方へずらしてバケツをちょうどよい位置にセットしてやる。

カタ、タ。と。

トタンのバケツが雨だれを奏でた。その様子を見ながら、僕らはどちらともなく床に腰を下ろした。空気のように軽い沈黙が満ちる。雨はふりつづく。

ときおり、光って轟く。

機嫌の悪い子供のように。

「お前、泊まってく？」

ややあって、叔父が口を開いた。

「雨がやんだら帰る。明日は学校だし」

「そうか」

また、ほんのすこし。バケツの水が溜まるだけの時が流れた後。シドは立ち上がるとキッチンへ消えた。

「じゃあ、飯食っていけよ」

本当は十花が用意してくれているんだけど。今度会ったときに夕飯奢ってくれたらチャラにするけど。

「なに作ってくれる？」

結局、僕はそう聞いた。

「チーズトースト」

キッチンでフライパンをがちゃがちゃやる音が、しばし雨音を消した。

シドの作るチーズトーストは、本当にチーズしか挟まれていないとつてもシンプルかつ潔い食べ物だ。ベーコンやハムといった相性のよさそうなメンバーを含め、チーズ以外を挟むのは邪道なのだそう。その代わり、ブレッドとチーズはちょっとだけいいものを使う。あと香り付けのオリーブオイルにも。

大学生の頃から必ず同じ手順で作っているらしい。

「俺がつくるチーズトーストが誰より一番美味いんだぜ」

と、本人が言い切るのだ。

そして今のところ。

実は僕にも異存はない。

台風も夕立も過ぎてしまえば、翌日はまた腹が立つほどの完璧な青空だった。幸村との約束がなければ、間違いなくクーラーの効いた自室に籠城して一步も外へ出なかつただろう。

心頭滅却すれば……なんて空しいことを呟きながら、僕はかろうじて家を出た。理性的な判断をくだせば、熱中症にかかる危険を冒して世界史の補強講習を受けることにどれだけの価値があるのか、そもそもこんな状態で頭に入るのか、家でかき氷メーカーで氷でも削っていたほうが有意義じゃないのか、合成着色料と人工甘味料のミックスをイチゴと呼べるのか、などなど。疑問と自問はつきない。結局一度も開かなかつた世界史の教科書が入った鞆が、やけに重く感じられた。特大のアイスクューブを抱く動物園の白熊が羨ましくなり始め、迷走する理性も蒸発し尽くそうかというころ、ようやく学校にたどりつく。

約三週間ぶりの学校だ。校門をくぐると、ちらほらとクラスメイクトの姿が目についた。みんな溶けたアイスクリームのようになっている。

「あれ、めずらし、奈瀬じゃない。キャンプ行く気になったの？」
声をかけてきたのは仲本だった。長身のクラスメイトは、夏休みの前よりもすこしだけ髪が伸びて大人びた顔になっていた。

「幸村に誘われたんだ」
「相変わらず仲いいよねえ、おふたりさん。アレで案外、幸村は人を選ぶやつだからね。気に入られて懐かれた気分はどうよ」

「懐くって犬猫じゃあるまいし」

「まあ、そんなに可愛いもんじゃないわな。でもたしか、奈瀬は今年が初めてじゃない？ 幸村と同じクラスになるの。あ、俺とあい

つは同じ陸上部な。俺がハイジャンであいつは短距離。幸村はめちゃくちゃ速いよ。おまけにアホみたいに走るの好きだし」

「はは。そんな感じだよな」

そんなとりとめもない会話をしているうちに教室についた。驚いたことに、すでに半分以上の席が埋まっていた。

「おお、集まったね。でも、こんなもんじゃないでしょう。まだ増えるぜ、絶対」

仲本はそう言って彼の席につき、僕は窓際の自分の席に向かう。

椅子を引いたところで入れ替わりに幸村がやってきた。

「奈瀬、えらい、ちゃんと起きてるじゃん。休みの日は昼まで寝てる奈瀬くんにしちゃ上出来だ」

「失礼だな、休みの日でも起きるよ。まあ、十一時ごろには。それよりさ、三鷹のことだけ」

幸村は笑うのをやめ、ちよつと肩をすくめる。

「聞いた。夏休み中ずっとアメリカだった。しゃあないよな、本人がそう決めたんなら。よつぽど居心地いいんだろうなあ。さすがに新学期が始まるまでには戻ってくるだろうし、それまで待つよ。キヤンプは残念だけど、茜はたぶんそういうの興味ないだろうし。ま、奈瀬が参加してくれるだけでラッキーかな」

「三鷹なら、大丈夫だよ」

そう言うと、幸村は素直にうなずいた。彼は僕よりもずっと器が大きいんじゃないだろうか。少なくとも僕よりも前向きだ。悔しいけれど、僕のほうが幼馴染の不在が堪えているらしい。

「じゃ、また後でな」

チャイムがなり、担任で世界史の教師でもある加藤が入ってくる。幸村は自分の席へと走っていった。

そつとクラス全体を見渡すと、三分の二以上が出席している。加藤の世界史にこんなに人が集まるのは後にも先にもこれっきりだろう。

「みんな、余裕ねえ」

教壇に立つた世界史の教諭は、ずらりと並んだ顔ぶれを前にして、呆れと感嘆をこめたコメントをもらした。長い髪をきゅつと後ろでひつつめた彼女は、額に浮かんだ汗をハンカチでぬぐった。

すこしばかり頭が固いところがあるが、僕たちはおおむね彼女とうまくやっている。加藤は手綱のとりかたがうまい。締めるところは締めるが、ちゃんとゆるめる場所もしている。とくに面倒見がいいわけでも、生徒よりの立場に立っているわけでもないけれど、頼めば案外すんなりと動いてくれる。そして、動かしたのは十中八九リーダーと姫だ。

実際、担任の後ろ盾がなければ、大学受験を控えた高校三年生がのんきにキャンプになんて、親たちがとても許しはしなかつただろう。ふたりの計画にぬかりはない、ということだ。

夏木と九条も、それぞれの席で補強を受けている。もつとも、九条璃桜は教科書を開けるでもなく、ノートをとるでもなく、優雅に腰かけているだけで、反対に夏木は熱心に加藤の講義を聞いている。九条は、ときおり夏木の背中に視線を投げていた。

世界史のトピックは、戦後日本の経済成長、その背後に控える冷戦、そして核の時代へと移っていった。高めのアルトで十年は十分に短縮されて語られる。国が統合され、分裂し、革命が起こり、イデオロギーが崩壊し、パラダイムは転換する。ペンキを塗りかえるように、次々と歴史が移りかわってゆく。

「一九四五年のヤルタ会談が戦後の道しるべとなり、四七年にはトルーマン・ドクトリン、マーシャル・プランといった政策を打ち出して、アメリカはヨーロッパとの関係を深めていきます。この時期世界の二極化がどんどん進みます。つまり、資本主義のアメリカと東欧中心に共産主義を打ち出すソ連。この二国が世界の中心だったの。お互いに、自分のテリトリーを広げよう、相手の力を削ごうとたくさん政策が打ち出されました。中国がソ連と手を組めば、アメリカは旧植民地のフィリピン、また世界大戦時の敵国だった日本とも日米安全保障条約というかたちで手を結び……」

僕は頬杖をつきながら黒板の文字を追っていた。ふと加藤と目があつた。終業式に呼び出しをすっぱかしていたことを今更のように思い出して、僕はあわてて目をそらす。そこへタイミングよくチャイムが鳴った。

「それじゃあ、今日はここまでね。残ってキャンパスの計画を立てるなら、終わった後で先生にも内容を知らせてください。夏木さん、九条さん、よろしくね」

はい、と優等生ふたりが応じる。

「それから奈瀬くん。君も、終わったなら職員室まで来なさい」

今度逃げたら許さないわよ、とその目が語っていた。僕は観念してうなずいた。

加藤が授業用のメモと教科書を手に教室を出ていくのを見送りながら、いくつかの大学名と学部を即席で思い浮かべてみたが、どれもこれもしっくりとはこなかった。まずい、という焦り半分、どうにでもなれ、という開き直り半分で僕は結局居直ることにした。まだ時間はあるはずだ。

少なくとも、もうしばらくは。

五分の短い休憩のあと、加藤に代わって教壇にはリーダーと姫が立っていた。

「みんな、椅子だけ持ってもっと前へきて」夏木が手招く。

一分ほどかかって全員が適当な位置に陣取ると、九条がチョークで黒板に大きく『キャンプ・ミーティング』と書いた。結局、クラスの三分の二にあたる二十人が集まっていた。この中で、加藤が言うように「余裕」なのは旧帝大、早稲田、慶応といった難関校すべてが合格圏という噂の夏木と、受験勉強そのものに縁がなさそうな九条の主催者組くらいだろう。

その他大勢は、塾や家庭教師や両親といった物理的な障害と、自分自身という精神的な障害をどこ乗り越えて今日ここに集っている。心なしかみんなの目、特に男子の目には「なにがなんでもキャンプに行つてやる」という闘志が宿っている気がする。より正確を期すならば、「なにがなんでも姫とキャンプに行つてやる」となるところだ。

当のお姫さまは、普段と変わらないペースでどんどん黒板に文字を埋めてゆく。チョークをもつ指と白い手首に視線があつまる。その手が止まるまで、みんなは静かに大人しく待っていた。五、六分を要して黒板に既決事項、未決事項、仮の予定を書ききり、姫はコトリとチョークを置くと、ハンカチで白くなった指先をぬぐった。

「ありがとう、璃桜」

それまでいくつかメモをとっていた夏木が顔をあげ、九条を労った。それに豪奢な笑みが返されて、目撃した連中から男女を問わず、思わずといったため息がもれた。

「それじゃあ、始めようか」

リーダーの声に、ぼうつと姫を眺めていた男子も居住まいを正した。夏木は自らも椅子を引き寄せて座ると、一度クラスをざっと眺め渡した。

「まずは、集まってくれてありがとう。今日初めて補強に来た人たち、ようこそ。常連のみんな、今日もおつかれさま。緊急連絡網で伝えたとおり、来週末にクラスキャンプを計画しています。三年のこの時期にキャンプなんて狂気の沙汰だと思われるかもしれませんが、いけど、否定はしない。わたしたちはこれから夏休みの貴重な二日間をつぶして、湖畔のペンションにこもって、好き勝手なことをする。でもそのためには、成績を落とすわけにはいかないし、ご両親を説得してもらわなくちゃいけないし、なにより自分が後悔しないようにしなくちゃいけない。勉強は今まで以上に手をぬけないよ。もちろんキャンプへの参加は強制じゃない。今の話を聞いて気が変わった人がいたら、このまま帰ってくれてかまわない」

ここまで一気にしゃべって、夏木は数拍の間を置いた。辞退者はゼロ。どうやらこのメンバーは全員参加らしい。どんな形であれ、男子の九割は姫とのお泊りに高校生活を捧げているから戦わずして戦線離脱などありえないし、両親の説得に失敗した成績不振者や家族旅行でキャンプに参加できないやつらは今頃涙をのんでいるだろう。ちなみに、三年の夏がまだ終わっていないというツワモノもごくごく少数ながら存在する。

また、他方の女子はというと。

「ぜつたい行く。夏木くんとキャンプ行くもん！」

「わたしだって行くよ。勉強もがんばるし、誰にも文句なんて言わせない。せつかくリーダーが計画してくれたんだから、絶対楽しいよ」

「彼氏の誕生日だけど、誕生日は来年もある。でもリーダーやみんなとのキャンプは今回が最後！ 比べるまでもないよ、そんなの」
つぎつぎに、わたしも、わたしも、と声があがる。軽んじられている彼氏さんの立場がまったくない。思わず、比べてやれよと内心

つつこむ僕である。

「わたしも楽しみにしてる」

そう言ったリーダーは、普段大人の前では見せないような、いたずらっぽくて心底愉快そうな笑顔だった。その余裕の受け答えはときどき男達を戦々恐々とさせる。きつと今、クラスの半分は夏木が男でなくてよかったと胸をなでおろしているはずだ。

「とりあえず名前と人数の確認がしたいから、今から回す紙に自分の名前とメールアドレスを書いてほしい。簡単に既決の事柄から確認していいから」

僕は黒板の文字を見た。横書きの日本語は硬筆の手本のようにだ。いつ見ても、姫の字は溜息が出るほど流麗。

三つある大分類のうち、『既決事項』と書かれた下には、キャンプの日取り、場所、集合時間、現地へのアクセス方法といったベシシクなアイテムが並ぶ。

「キャンプは来週の土日を使って一泊二日。泊まる場所は、九条璃桜さんの叔父上が管理していらっしやるペンション。来週末は特別に貸切にしてもらえそう。現地集合で集合時間は十時。詳しい場所は地図をメールに添付しておくけど、車が必要な場合は相談して欲しい。キャンプ場の近くにはちよつとした湖と綺麗な川が流れていて、去年お邪魔したときは、七月だったけど川辺で蜚が見られた。ペンションはすごく快適で、いただいた食事も美味しかった。今回は一日目の夕食と二日目の朝食を用意してもらえる。部屋は全室シャワーとユニットバス完備だけど、それとは別に大きな露天の温泉もあるよ。まずはここまでのいいかな」

温泉というキーワードに「おお」と声が上がった。

「女って温泉好きだよな。混浴だったら俺も好きだけど」

幸村が耳元でぼそぼそと囁いた。

「三鷹に言つてやる」

「え、ちょ、まじやめて」

前を向いたまま冗談で言ったら本気で焦っていたので、尻にしか

れてんな、と可笑しくなった。

「昼飯は？」

発言したのは、自他共に認める姫ファンの横田か。リーダーが一足早く姫と一つ屋根の下の夏休みを過ごしたと聞いて、心中穏やかではなさそうだ。

「うん、考えたんだけどね。せっかくみんなでキャンプに行くんだから、自炊も醍醐味かなと思うんだ。もちろん、三食はきついし、せっかくペンションでも食事を用意して下さるから、昼食だけ作るのはどうだろう？　ちなみにこれは既決事項じゃなくて、提案だけだね」

夏木は黒板を振り返り、『仮の予定』を親指でさしながら説明する。夏木の提案に女子の全員が賛成し、料理の腕に多少なりとも覚えのある男は、ここがポイントの稼ぎどころだと判断して膠着した戦況の打破を狙う。この時点で自炊派の勝利が確定し、僕をはじめとするペンションのお昼ごはん派の希望は切なくついでた。民主的な多数決とは、マイノリティの意見が一顧だにされないシステムだということに思いを馳せてみたりみなかったり。

結局、メニューは満場一致でカレーに決まった。

「ここでもう一つ提案があるんだ。キャンプして普通にカレーをつくるのもいいけど、せっかくだからゲームをしないか。簡単なイニシアチブ・ゲームを」

す、と夏木は黒板の文字に意味深な視線を投げる。クラス中の視線がつかられてそちらへ動いた。こういうパフォーマンスがずば抜けて上手いのも夏木の強みだ。

イニシアチブ・ゲーム。

初めて耳にするカテゴリーのゲームだった。それはほかのクラスメイトも同じらしく、みんな夏木の説明に耳をすませる。

「シミュレーション・RPGの野外ゲーム版、とでも言ったらいいのかな。五人一組のグループ単位で役割分担を決めてカレーをつくる。火をおこすところからスタートして、ゴールは食事の後始末ま

で。調理器具はペンションのものを借りられるし、材料は必要なものと分量を伝えれば、これも用意してもらえ。そうだよな？」

最後は姫への確認だった。姫はかるくうなずいて肯定した。

「ここまででは、キャンプに行つて普通にカレーをつくる場合と変わらない。違うのは役割分担。このイニシアチブ・ゲームで用意されている役割は三つ。シェフが二人、ネゴシエーターが二人、それからリーダーが一人だ。五人一組でグループをつくつた後は、それぞれが自分の役割を演じながら料理を完成させる。一人につき一役。今日集まつたのはたまたま二十人びつたりだけど、当日の参加者の総数が五で割り切れなかつたら、六人のグループになる。もちろん、その場合はハンデがつくけどね」

リーダーがしゃべっている間に、姫が黒板に、

・シェフ（2）

・ネゴシエーター（2）

・リーダー（1）

と書いた。

「それぞれの役を紹介しよう。まずはシェフだ。シェフの仕事は調理。でも、ただ料理ができればいいってもんでもない。料理に必要な火をおこすのもシェフの仕事だ。用意された焚きつけで手際よく薪に火をつけて欲しい。そのほかにも、料理は意外と力が必要な部分があるからね。女子にはかり任せていると、昼食を食いつぱぐれることになるかもしれないよ。食材はカレー以外のものもつくれるように幅をもたせて揃えるつもりだから、何ができあがるかはシェフの腕と機転にかかっている。限られた時間と食材、調理器具を最大限に活かしておいしいカレーをつくって欲しい」

つまり、料理が上手いふたりがシェフになつたとしても、火をおこし、火力を適切に保つことが出来なければカレーが無事に出来上がる保障はないわけか。だったらふたりのうちひとりとは、料理はうまくなくても、手先が器用でアウトドアの経験がある者がシェフになつたほうがリスクは少ないかもしれない。

「でもね、残念ながらすべての食材と調理器具が最初から平等に分配されているわけじゃないんだ。ひとつのグループが最初から持っているアイテムは非常に限定され、かつ偏っている。どのグループも、最初に持っている食材と調理器具だけではカレーどころかなにひとつまともな料理はつくれない。ではどうやって必要なアイテムを揃えるのかと言うと、ここでふたつ目の役・ネゴシエーターが登場する。ネゴシエーターの仕事は調理器具と食材の調達だ。調達の基本は等価交換。おたがいのアイテムを物々交換してもいいし、人力を貸し出すことで対価としてもいい。どれだけ腕のいいシェフがいたところで、食材がなければ料理はできない。どの食材、どの器具をどのタイミングで手に入れるかが勝敗を分ける。交渉能力に加

え、機転と判断力が要求される。必然的に、シェフとの相性も問われるね」

たしかに連携プレイがうまく運ばなければ昼飯にありつくのは難しそうだ。シェフが火をおこし始めると同時に、ネゴシエーターは食材を集めに奔走するだろう。スタートダッシュでつまづく、挽回するのは骨が折れそうだ。もちろん、ゲームである以上ネゴシエーター同士の妨害策もとられるだろう。それがどの程度許容されるのか、そもそもルールが存在するのかがすこし気になる。ノールなら極端な話、どのチームも昼飯を食いつばくれる可能性があるからだ。

夏木と目が合った。彼女は僕の考えを見透かしたかのように「ルールはおいおい説明するとして、最後の役へ移ろうか」と話を進めた。

僕は唐突にチェスの盤を思い浮かべていた。夏木と九条がチェス盤をはさんで向かい合い、たがいに駒を進める画だ。

夏木咲也が白。

九条璃桜が黒。

ビショップが、ルークが、クイーンが。

キングを追いかける。

盤上を支配するプレイヤーはたがいに一歩も引かず、先の先を読みあう。

そんなイメージがぐるぐると頭の中をめくり、僕はちよつとげっそりした。

“権謀術数？”

どこことなく、そんな言葉を贈りたくなるような我がクラスのリーダーと姫である。

「リーダーの役目はゲームメイクにある。ゲームの流れを作ること、優先順位を決めて、取捨選択をして、最も効率のいい道を見つけること。必要ならばシェフとネゴシエーターの間に入って緩衝材にも潤滑剤にもなる。特に大切なのは、リーダーがチームとしての意志

決定者であることだ。シェフとネゴシエーターはリーダーの決定には逆らえない。そして、リーダーだけが限定的にはあるけれど、他の役の働きをすることも可能だ。これは他のルールと一緒に今から説明する」

他の二つの役に比べて具体的な仕事内容がわかりづらいが、要はなんでもこなせ、ということらしい。

それにしても、この説明だけ聞いていると、とても目的がカレー作りだとは思えなくなってくる。

なんだか煽っているなあ、というのが僕の印象である。気のせいだといいのだけれど。

いつの間にやらクラスみんなは、もう真剣に自分がどの役についてるか考えてるし、仲がいい者同士でグループを作りはじめている。たしかまだ、夏木が言い出した提案のレベルだったはずなのに。

「リーダー役は責任重大っぽいからパスだよな」

ここにもひとり、すっかりゲームに乗り気な男がいる。きれいに日焼けした顔の真ん中で大きな目がきらきらしている。幸村は意外とこういうゲームが好きなのだ。人生ゲームとかモノポリイとかにハマる方だ、と以前言っていたことを思い出した。

「奈瀬はどうする？ あ、一緒のチームな、もちろん」

どれでもいい、というのが本音だったけど、とりあえず考えるふりをした。それは、幸村へのサービスみたいなものだけれど、大した労力ではない割に、けっこう効果があるのでエコロジイだと思う。幸村にやさしく、僕にやさしく、というキャンペーンが僕の中で展開されているみたい。

「シェフかな」

「まじ？ 料理できる？」

無難なところを狙ったつもりが、驚かれました。驚かれたことに驚いてしまう。

「うーん、まあ、切って茹でたり炒めたりするくらいは。でもとりあえず、ルールを聞いてからかな、決めるのは」

まだチーム分けも済んでいないのだ。そもそも、ゲームなどして
いないで普通にカレーを作る、という選択肢はどこへ行ってしまっ
たのだろうか？

「茜がいたら、リーダーに適任なのにな」

幸村は残念そうだ。たしかに三鷹ならリーダーの資格は十分すぎ
るのだが、問題は、たとえ彼女がキャンプに参加したとしても、こ
のゲームに参加することはないという確信だろうか。

麗質のポーカーフォイスに浮かぶ呆れとも哀れみともとれるまな
ざしはある意味壮観だ。普通の人間なら恥じ入るし、マゾっ気のあ
る人間なら惚れるだろう。ごくまれに、そんな三鷹を前にしても平
然としている人間がいて、その数少ない例外のひとりが幸村圭次と
いうわけだ。

「なに？ 思い出し笑い？」

当の本人に横から顔を覗きこまれ、僕は急いで表情を取り繕った。
三鷹のサディスティックな微笑を思い浮かべて頬がゆるむなんて危
険だ。

「……なんでも」

「わ。やーらしい。誤魔化そうとしてる。お前が意味もなく嬉しそ
うな天才するはずないもん」

「嬉しそうな顔？ してない、してない」

ますますもって重症だ。僕らの声が聴こえたのか、教壇の姫がち
よっと尖った視線をよこした。声に出さずにごめん、と口をうごか
すと笑顔にもどったので、メレンゲの焼き菓子みたいな人だなと、
わかったようなわからないようなイメージを抱きつつ、ほっとして
あとは大人しくリーダーの説明に聞き入った。

「これでペナルティはいいかな。それじゃあ最後にルールを説明しよう。ルールは三つ。マテリアルバインド、アクションバインド、そしてリプレイスメントだ。名前は覚えなくてもいいから、内容だけ知っておいて欲しい、簡単だからね。まず、マテリアルバインドっていうのは食材のしばりのこと。カレーに欠かせない、米、ルウ、肉、ジャガイモ、玉ねぎ、ニンジン。これらの食材はルウを除いて一グループに種類ないし二種類だけ最初から与えられている。自分のチームの食材をうまく利用して他のチームから足りない食材を調達するんだ。何をどれだけ使ってもいいけど、この六種類は全部必ず使ってカレーを作る。それがひとつ目のルール。それから、もう気がついてると思うけど、アクションバインドはみんなの行動を制限するルール。さっきも言ったように、ひとりかひとつだけ役割を演じる。そして、その役割以外の行動はとれない。厳密に言おうか。シェフは火のそばから離れてはいけない。ネゴシエーターは食材を調達するけど、一度シェフの手に渡ったら、その食材には触れられない。もちろん包丁や鍋にも触れない。ただし、例外がある。一度手に入れた食材を使ってネゴする場合だ。ここで三つ目のルール、リプレイスメントが適用される。この時だけはリーダーがネゴシエートすることができる。ただし、リーダーとリーダー同士の交渉はできないし、食材は一度ネゴシエーターが調達してきたものかメインの六種以外でなければならぬ。もしも、ルールを破ったらペナルティ。出来上がったカレーを加藤先生に試食してもらって、独占と偏見で順位を決めてもらう。最下位のチームもやっぱりペナルティ。どう？」

夏木がフィードバックを促してクラスをぐるりと見渡した。たが

いに視線を合わせ、うなずき合って意見を確認すると、「楽しそうだね」「のった」「俺も賛成」「わたしも」とつぎつぎに声があがった。

夏木がちらりと九条を振り返る。九条が自慢げな笑顔をかえす。本当にこのふたりは仲がいい。

「それじゃあ、お待ちかねのチーム分けといこうか」

その言葉にわっとクラスがわいた。一気に現実感を帯びてくる感じだ。

「好きなモン同士でいいんだろう？ リーダー」

「男女コンゴー？」

気になるところは皆同じだ。リーダーはそのふたつ共にうなずいて、クラスの喝采を浴びていた。

「それじゃあまず、ふたりもしくは三人で適当に組んでみて」

うちのクラスの男女比は六対四というところで、理系クラスとしては女子の割合がけっこう高い。このキャンプの参加者に限って言えば、ほぼ半数が女という高校生男子にとってはかなり期待とプレッシャーを煽る構成になっている。さすがに一年坊じゃないから、ヘンにがつついていてるわけじゃないけど、みんなそれなりに意識はしていて、誰と誰が組むのかに興味津々だった。僕はご指名どおり幸村と組み、ついでに仲本を誘おうかと探したら、奴はちゃっかり女子のグループに収まっていた。

「なんだよー、晴吾ー。お前俺らよりも女がいいのかよー」

「つたりまえっしょ」

幸村が仲本にじゃれついている。部活が一緒だったというだけあって、このふたりも仲がいい。幸村自身は文句のひとつも言っちゃれと思っっているのだろうが、身長差のせいか仲本の受け答えのせいか、どうも犬ころがじゃれついているように見えてしまう。この光景はけっこうちよくちよく見られるもので、密かにクラスメイトの心を和ませていたりする。閑話休題。

「いい感じにばらけたね。それじゃあ、男女もちゃんと混ぜるよう

に五人組になつてみようか」

夏木の言葉に、今まできやあきやあ言いながらはしゃいでいた女子の動きがぴたりと止まった。フリーズしたのは女ばかりのグループだった。つまり、彼女らは同性の仲のいい友人と組んだばかりに、お目当ての「夏木くん」に声をかける権利を失ったことになる。まあ、夏木は九条と組んでいるので、誘う誘わないの躊躇はあつたのだろうが、するしないの問題が一気に出来る出来ないの問題に摩り替わってしまったのだ。内心の焦りと後悔は推して知るべきか。その一方で、最初から男女混合できていたチームは内心ガツポーズだったろう。女は夏木、男は九条、利害関係が一致しているのだ。一気にリーダーと姫の獲得に乗り出すかと思われたが、ここにもさらなる障害が待ち受けていた。

「奈菜ちゃんはわたしと一緒にグループね」

九条が目敏く、ひとり出遅れていたムーミンを自分のチームに引きずっていた。この問答無用の強引さが姫の姫たる所以である。

「いいでしょう？ さっちゃん」

かわいくお伺いなど立てているが、夏木は基本的に九条の言葉に否とは言わないので、姫の決定的な歯止め役にはなりえないのだ。

これで、かなりのチームがふるいにかげられた。リーダー・姫・ムーミンという異色チームと組めるのは、男ふたりもしくは男女ひとりずつのチームのみとなった。権利を失ったチームが臍を噛みながらも成り行きを見守る中、

「おー、じゃ、ちようどいいじゃん。俺らと組まねえ？」

幸村があっさりと立候補していた。もう一組残っていた候補は、幸か不幸か付き合っている唯一の男女チームだったので、お互いの手前か、特に不満の声は上がらなかった。

「そうね、そうしましょう」

そして、またしても決定打、鶴の一声を放つたのは九条璃桜だった。このグループ分けの後しばらく、僕と幸村は『ダークホース』『大穴』『無害そう顔して策士』などと不名誉な呼び名を頂くこ

とになる。

「えー、これじゃ勝てねえよ。ゲームする前から勝負みえてるじゃん」

姫と同じチームになれなかった男どもが落胆を隠しきれずに場をしらけさすようなことを言った。馬鹿だな、沖。と、僕は心の中でそいつに同情する。九条は見た目こそ深窓の令嬢だが、ただ大人しただけのお嬢様などではない。言いたいことはぼんぼん遠慮なしに言うし、周りにも自分にも求めるレベルは非常に高く設定されている。そんな姫が、情けない文句をたれる男に好印象を持つはずがないじゃないか。

「なら、ハンデをつけましょう。夏咲也はリーダーのポジションから外す。そして、わたしのチームは割り当ての食材を選ぶ権利を放棄します。一番最後でけっこうよ。これで文句はないわよね」

あつたら許さないわ、と言外に言い放つ姫の勢いに吞まれ、不満顔だった男どもが黙っていつせいに首を縦に振った。

「文句っていうか……」藪をつついて蛇を出してしまった沖は、しゅんとうなだれてぼそぼそと言いつきを口にしていた。

「璃桜。ペナルティのこと忘れてない？ リーダー云々はともかく、食材はけっこう大きいよ」

暴走する姫君を、夏木がそつと呼び戻す。一緒のグループになつてしまった僕たちも対岸の火事を決め込むわけにはいかなさそうだ。「心配しなくても平気。さっちゃんがネゴシエーターしてくれたらいいんだもん」

おお、蛇が仔猫になった。心なしか、口調も幼くなっている。同じクラスになってから繰り返す目の当たりにしてきた光景だが、何度見ても鮮やかな変わり身だ。

「んじゃあ、リーダーは誰がする？」

「ああ、ちよつと待って。みんな、五人組になれた？ 余っている人はいない？ いなかったら、そのグループの中で役割を決めていこう」

夏木はてきぱきと指示を飛ばすと、教壇を離れて僕たちのグループに合流した。姫と、姫に手を引かれたムーミンがそれに続く。

「改めてよろしく」

夏木が女子三人を代表して、ソツのない笑顔を見せる。大人だな、と思う反面、あまりに出来が良いすぎる気がして少しテンションが下がった。冷静になればなるほど、彼女がいかにもリーダーという役割に向いているかがわかる。夏木をリーダーから外す、という条件がハンデとして成り立つのかどうかという大前提に誰も疑問を挟まないのがその証拠だ。名実ともに夏木はクラスの中心、扇の要だった。「おー。こつちこそよろしくな。姫さんとムーミンも」

幸村はまったく気負った様子もなく、にこにこ笑っている。森川は姫に手を握られたまま、はにかむようにうなずき返した。

「それじゃあ、一通り希望を聞いていきましょう。レディ・ファーストでいくわね。まずは奈菜ちゃん。なにがいい？」

姫は強引でマイペースで人の話なんて聞いちゃいけないけど、基本的に女子には優しい。森川は完全に油断していたらしく、「え、えっと」と、言いよんだまま下を向いてしまった。四人分の視線を一斉に浴びて、とにかく居心地が悪そうだ。姫がまた、決め付けるようなことを言い出さないかと思ったが、彼女は実に辛抱強く待った。先に幸村が焦れて口を挟みそうになった頃、ようやくムーミンはぼつりと口を開いた。

「リーダー、やってみたいな」

聞き間違いかと思った。そう思ったのは僕だけじゃなかったらしく、

「リーダー？ まじで？ すごい」

幸村が身を乗り出さんばかりに聞き返す。それにこっくりとうなずいて、ムーミンは心細そうに顔を上げた。

「あの、がんばる、から。ダメ、かな」

「ダメじゃない」

「ダメじゃないよ」

幸村と九条の声がかぶさった。夏木だけが、一瞬なにか言いたげな顔で森川を見た。森川は目をそらさなかった。

「うん。ダメじゃない。がんばろうね、森川。奈瀬もそれでいいかな」

反対する理由なんてなかった。積極的な森川には驚かされたけど、こっぴつのも新鮮でいい。

「もちろん。リーダーよりもリーダーに向いてたりしてね」

ムーミンが慌てて否定して、夏木がわざと拗ねたふりをして、幸村と九条が冷やかして、そうしていつの間にか、僕たちはチームとして打ち解けていた。

「えっと、次はさっちゃん。さっちゃんは どうする？」

「ネゴシエーターで」

夏木はあっさりと九条の要求を呑んだ。

「リーダー、リーダー。ちょっと姫さんに甘すぎるんじゃない？」

嫌なときは嫌って言ったほうがいいんじゃない？」

「幸村くん」

再び蛇になった九条に静かに名前を呼ばれて、幸村は石のように固まった。

「本当にネゴシエーターでいいの？」

「奈瀬くんまで」

むくれた姫の頭をよしよししながら、夏木は苦笑する。

「うん。最初からネゴシエーターがいいなと思ってたんだ」

「え、もしかして料理は苦手？」

「実はりんごの皮も満足に剥けない」

「うっそお」

自分だつて五十歩百歩のくせに、幸村はやたら嬉しそうに夏木にからむ。完璧だと思つていた相手に案外かわいい不得手があつて、かえつて親近感が沸いたらしい。

「うふふ。わたし知ってる。さっちゃん、りんごは包丁じゃなくてピーラーで剥くもの」

「どうして知ってるの？」

つい聞いてしまったら、「えっとね、わたしが風邪をひいて学校を休んだ日にね」と明らかかなノロケが始まったので、ああ、お見舞いに来てくれてりんごを剥いてくれたのかよかつたね、と生ぬるく聞き流すことにした。

「ほら、璃桜の番」

さりげなく会話を引き取つて、夏木が横道にそれよつとする姫を連れ帰つてきた。さすがだ。

「シェフにするわ」

てつきり夏木と一緒にネゴシエーター志望だと思つていた。僕は幸村と顔を見合わせる。

「俺、料理無理」

ふるふる、と幸村は首を横にふつた。

「じゃあ、決まりね」

「確認するよ。リーダーが森川。璃桜と奈瀬がシェフで、幸村とわたしはネゴシエーター。みんな、それでいい？」

「全員がうなずいた。」

結局、丸一時間あまりかけて、ミーティングはお開きとなった。

お互いの持ち物やキャンプの大まかな予定などを確認して、最終的に雑談になってきた辺りで夏木が締めくくった。

「幸村、俺も帰るけどどうする？」

「あー、俺も帰るわ。じゃあな、リーダー、姫、ムーミンも。キャンプで会おうぜ。あれ、奈瀬、加藤に呼ばれてなかった？」

「あ……」

完全に頭から飛んでいた。さすがに二度続けて忘れてました、じや済まされないか。

「行ったほうがいいんじゃない？」

「だな。思い出させてくれてサンキュ」

「うんにゃ。またメールする。じゃあな」

「うん」

廊下で幸村と別れて職員室に向かう。大きく開け放った窓からグラウンドが見渡せた。影が濃い。三年生が引退した野球部がトンボを引いてグラウンドの整備をしていた。スパイクがたてる土ぼこりをスプリンクラーが緩和する。ありふれた光景だった。三年間、特に意識して眺めたこともなかった。卒業なんて、まだまだ先だ。大事も、受験も、まわりが騒ぐほどにはリアルではなかった。なんとなく他人事のように眺めていたものが、ぼんやりとしたものが、すこしずつ輪郭を鮮明にして視界に入ってくる。ああ、来年、俺はここにはいないんだな、と当たり前のことをしみじみと感じた。

失礼します、と一応声をかけてから職員室の扉を開けた。休み中だけあって、さすがにがらんとしていた。三年生の担任が数名、顔を上げたので軽く会釈してから加藤の姿を探す。彼女は立ち上がった。

て手招きした。

「もうミーティングは終わったの？」

「あ、はい。夏木さんと九条さんももうすぐ来ると思います」

「そう。それじゃあ、彼女たちが来る前に君と話しをしましょうか。ここ、掛けていいわよ」

隣のデスクからキャスター付きの椅子を引いて、書類の山からクリアファイルを引っ張り出す。見覚えのあるそれは、夏休み前に白紙で提出した進路希望の用紙だった。ああ、とうとう来たなと思う。加藤はしばらくの間、クリアファイルに視線を落としていた。そこから何が読み取れるわけでもないのに、僕はすこし居心地が悪くなる。キーン、という金属バットと硬球のぶつかり合う音が、ふぞろいに交じり合いながら響いていた。

「奈瀬くん。はじめにこれだけ確認させて。君、進学するつもりはあるのよね？」

「それは、はい」背筋をただす。

「そう、ああ、よかった。それならいいの、問題ないわ。おうちの都合や方針ならともかく、本人の意思がね、やっぱり大事でしょう、こういうものは」

「はあ」

「君、進学したらいいと思うよ」

加藤は手近にあったノートをぺらぺらとめくりながら言った。僕は担任の言葉の意味を図りかねた。曲がりなりにも僕のクラスは理系の進学組で、彼女はその担任だから、この時期にエンジンがかかっていない生徒には、とりあえず走る気があるのかなのか、そこから確認しておこうということだろうか。走りだして完走するかどうかはまた別の話だとしても。

「なんだか腑に落ちないって顔してるわね。あんまり焦りもなさそうだわ。大物なのかしらねえ、君は」

「それ、褒めてないですよ」

「うん、そうね。もうすこし、危機感を持って欲しいっていうの

は本音。でも、一学期の成績から言えば、今からでも十分間に合うわ。学部 of 志望はある？」

「いえ、特には」

「志望校も？」

首を横に振る。答えていて、正直情けなくなってきた。幼馴染も親友も、とつくに自分の進むべき道を見つけているというのに。

「そうかあ。困ったわねえ。今すぐ本命を決めろっていうわけじゃないんだけど、いくつか候補くらいは挙げて欲しいかな。そうだ、Y大の工学部なんてどう？ 奈瀬くんは物理も数学も危なげないし、いい学校だと思うのよね。県外だけどS大は偏差値的にも射程距離だし、N大も狙えると思うわ。あとは、滑り止めの私立もいくつか受けるわよね？」

「あの、先生。俺、自分で決めますから」言ってから、しまったと思う。

「あら、そう？」

加藤はじつと僕を見据えた。しばらくして、小さなため息が吐き出される。これみよがしでないだけだった。

「すいません」僕は素直に謝罪した。

「まあ、君の場合迷うのも無理はないのかもしれないわ。実際、これくらい得意不得意がない子も珍しいのよ。これ、狙ってやっているの？ 選択科目まで含めてオール八だなんて。全教科満点の子はね、いるのよ、本当にまれにだけど。だけどオール八は奈瀬くんが初めてだなあ」

「狙えるほど器用じゃないです」

夏木や三鷹じゃあるまいし。おおかた、オール十を取ったのもこのふたりだろう。

「でも、推薦入学は十分狙えるわ。奈瀬くんもキャンプに参加するのよね？ 先生も保護者として同伴しますから、その時でいいわ。ちゃんと志望校を書いて提出しなさい」

ぺらり、と紙切れ一枚を差し出して、加藤は「以上よ」と締めく

くつた。僕は「はい」と返事をしながら、来週末のことを考えた。みんながわいわいとキャンプを愉しむ中、ひとり担任と進路相談かと思うと憂鬱になる。幸村の言うとおり、適当な学校を三つほども選んで空欄を埋めてしまえばいいだけなのに、僕は一体なにをぐずぐずしているのだろう。ざらざらした困惑と失望を噛み締めながら職員室を後にする。どちらも、これまでの人生であまりお世話にならなかった感触だ。特に、変人の叔父に困惑させられたことはあっても、自分の煮え切らない行動にショックを受ける日が来ようとは予想外もいいところだ。砂漠の真ん中でひとりはぐれ、途方にくれた旅人みたいなものだ。たよらない足元、右を向いても左を向いても目印はなく、どちらに進めばいいのか見当もつかない。おまけにじっと突っ立っただけでも干からびる。タイムリミット付きの迷路。「あつ。やめよ、不毛な想像」

ただでさえ暑いのに砂漠で遭難なんて冗談じゃない。僕は自己暗示が効くタイプなので、こういう考えにとらわれている時はたいがい碌なことがない。切り替えるのが一番だ。志望校くらい書いてやるぜと呟いて、迷いを知らない掛け声を響かせる野球部の横を足早に通り過ぎた。

その夜僕は夢をみた。

僕には昔からみているお決まりの夢があつて、それらをみている時は割と早い段階に「ああ、いつものヤツだな」と気づくのだ。何かに追いかけていて免許も持っていないのに車をかつ飛ばして逃げる夢か、家の中に悪い奴ら（これはさすがに自分でも子供っぽくて恥ずかしい）が入ってきてそいつらに見つからないように隠れている夢か、……幼馴染の夢か。

今夜は、気づくと小学生くらいの僕と『近所の茜ちゃん』がしらない街の路面電車で並んで座っていた。

僕の街に路面電車は走っていない。車窓から眺める風景は、どこか外国のものみたいにふわふわしていた。たぶん、映画で見たか写真集で見たかした場所なのだろうが、僕にはどこだかわからなかった。まあ、夢なんだから適当なものだ。

僕は風景を眺めるのにも飽きて、電車内に視線を動かした。本当に、よいしょって視点を切り替える感覚なのだ。僕の視点は僕の本体からは若干離れた場所にあつて、ゲームのプレイヤがコントローラのボタンひとつで視界を選ぶように、ちょっとさくさく切り替わる。

車内はがらんとしていた。大きな電車だ。中をみているのに、外側の塗装が臙脂色だということはわかっていた。中は灰色。なぜかシートはふさふさしたラビットファーで出来ていた。やわらかくてカーブのたびに身体が沈む。子供の頃に見た映画の影響なんかが出ているのかもしれない。風のように駆け抜ける猫のバスに乗れたら素敵だとドキドキしていた小学生の僕。

僕ひとりではしゃぐのも恥ずかしいので、隣の茜ちゃんを見てみ

る。そつと視線を動かそうとしたのに、僕のコントローラは初期不良でも起こしているのか、茜ちゃんと真正面から目が合った。

茜ちゃんは黒くてまっすぐな髪をリボンで結んでいた。普段は履かないスカートを履いていた。靴はストラップがついたグリーンのエナメルで、今日はすごくおしゃれしてきたんだなと思った。

かわいいね、茜ちゃん。

思ったことが、声にでていた。すごいな、小学生の俺。これが中学生だったら、こつは素直になれまい。意識しすぎて窓ガラスをぶち割って電車の外に飛び出すのが関の山だ。よかつたな、夢で。

茜ちゃんは、驚いたのか切れ長の涼しい目を見開いて、それからちよつと恥ずかしそうにうつむいた。その仕草が僕を勇気づけ、ついでに調子づけた。

本当にかわいいよ。茜ちゃん。僕、茜ちゃんのこと好きだ。

言ってしまった。しかも、そんなに簡単に。ちよつと素直にしゃべりすぎじゃないのか。本気にしてもらえなかったらどうしよう。僕は期待半分不安半分で茜ちゃんの反応をうかがう。

カズ君。

そつ、茜ちゃんは小学校の頃からずつと僕のことをカズ君と呼ぶ。僕は、いつの頃からか、茜ちゃんを三鷹、と名字で呼ぶようになった。なんとなく、名前で呼び合うのは決まりが悪かったのだ。冷やかされたりしたら、茜ちゃんも嫌な思いをするだろうなと思って自分から呼び方を変えたのに、最初の頃は馴染めなくて茜ちゃんとの距離が遠くなったような気がした。悩める青春。男はプライドが高くてガキなのだ。

茜ちゃん。

僕は名前を呼ばれたのが嬉しくて、美味しい餌を前に待てを食らった犬ころみみたいに、うずうずしながら彼女の言葉を待った。本当に犬だったら、尻尾をちぎれるほどに振っていただろう。

ほんまに好きなん？

やわらかいアクセント。茜ちゃんは好んで関西風のアクセントを

使う。ご近所に越してくる以前、小学校に上がるまでは京都にいたからだという。僕は、茜ちゃんのそんなしゃべりかたも好きだ。そう言ったら、茜ちゃんはうっすらと笑った。そのとき、僕はようやく気づいた。目の前にいるのは、小さな小学生の女の子ではなく、よく見知った十七歳の三鷹だということに。

当たり前じゃないか、俺たちはもう高校生なのだから。

今更ながら、しまったと思う。これじゃまるで、デートして告白したみたいな流れじゃないか。困ったことになったぞと思っていると、ふと、やわらかな手が頬に触れた。白くてすべすべで、しっとりした感触はやけに生々しくて、夢だとわかっていても僕の心臓は飛び跳ねた。

好きなら、ええよ。

茜ちゃんは、両手で僕の頬を包み込むようにして、まっすぐに見つめ返してくる。

なんて都合のいい。いや、夢なんだから当然なのか。混乱している。落ち着け。

うん、好き。

裏腹に、僕の口からはすらすらとそんな言葉が出てくる。嘘じゃない。嘘じゃないけど、素直すぎる。後ろめたい。誰にだろう？

茜ちゃん、いや、三鷹は混乱する僕をあっさり無視して、長いまつげに飾られたまぶたをそっとふせた。

うわあ。

タイミングよく唇をふさがれて、まぬけな声を聞かせずに済んでしまった。やわらかい。女の子ってこんなにやわらかいんだ。それにすべすべする。気持ちいい。僕は反射的に三鷹の身体を押し倒しながらそんなことを考えた。便利なもので、その時点ですでに三鷹の衣服ははだけていて、僕の手が触れているのは彼女の素肌だった。やばい、やばいぞ。

三鷹は女の子で、美人で、かわいくて、ちょっとありえないくらいに頭がよくて、おまけにグラマーだった。自分でもオメデタイと

思っけれど、そんな三鷹が微笑みながら、ええよ、なんて言っていて、キスしてくれているのだ。嬉しさと恥ずかしさと期待で、どうにかなりそうだった。僕はやわらかくていい匂いがする三鷹の身体を抱きしめて、今度は自分からキスをした。

その続きは、お決まりのパターンで恐縮だが、とても人様にはお聞かせできないR指定の内容で、脳みそがピンク色に染まった僕は、朝目を覚まして目が覚めたことを呪った。

「アホか、俺は」

夢精していた。しかも、親友の彼女で。

これで絶望しなかったら、人生の何で絶望したらいい？ と思うほどに自分が嫌になった。夢だとわかっていたのに、この結末とは情けない。夢の内容がピンクだったせいか、夢精してしまったせいか、いつもなら絶対に目が覚めないような時刻に起きたことだけが救いだ。自分の母親に、朝から汚れたパンツを洗っている姿を目撃されることほど気まずいことはない。一丁前に羞恥心はあるのだ。そして、そのせいでもものすごく後ろめたい。単なる夢なのだから、と忘れてしまいたいのに、なまじっか仲のよい相手だっただけに行為そのものもリアルだった。

「ごめん、三鷹。ごめん、幸村」

罪悪感で心臓が痛い。

僕は初めて、三鷹が日本にいないでよかったと思った。近所なので、どうしても顔を合わせる機会が多くなる。今はとてもじゃないが、まともに彼女の顔を見られない。

洗面所で水洗いした下着を洗濯かごに突っ込んで、僕はふらふらと自室に戻った。時計を見ると、午前五時半。普段なら、蹴飛ばされても目が覚めないような時間だった。

「ああ、外、もう明るいな」

朝日が目に染みる、なんてばそばそ呟きながら、僕は目の奥に焼きついた妄想を振り払った。

それもこれも、進路が上手く決まらないせいだ。加藤の前でも調

子が狂いつぱなしだったし。きっとそうに違いない。

「彼女でも、つくろっかな」

一緒に受験勉強でもしたら、もう少しやる気が出るだろうか。お互いがんばろうね、なんて励ましあって受験を乗り越えられたらこんな夢もみなくなるかもしれない。いい思い出にもなるだろう。受験生だからって、何もストイックに勉強ばかりやっていけばいいってもんじゃない、はずだ。ストレスだって溜まるし、精液も溜まる。「仲本に誰か紹介してもらっていう手もあるな」

悪くない考えに思えた。うちのクラス一番のモテ男は、女友達の数も半端じゃない。それだけモテるにもかかわらず、本命は姫さんだと言い切ってシングルを貫いているのだから、ある意味見上げた心意気だ。あとでメールでもしておこう。携帯電話のアドレスを確認しようと鞆を探ると、メール着信ランプが点滅していた。何気なく開いてから後悔する。

「おーす、奈瀬。先帰っちゃったけど、加藤平気だった？ キャンプであおーなー！」

僕は頂垂れた。気持ち的には幸村に土下座して謝りたかった。しかし、夢の話で土下座されても困るだろう。実際何て言って謝ったらいいのかわからないし。

僕は再び、ちくちくとした罪悪感を抱えてベッドに転がった。幸村はいい男だ。気さくだし、面白いし、明るいし、おまけに運動神経は抜群で男女関係なく人気がある。趣味はちよつと特殊だが、実際に女装したらけっこう美人だった。そんな親友ができて、受験でそれどころじゃないと正直あまり期待していなかった三年のクラスが一気に楽しくなった。三鷹と付き合い始めたと聞いた時も、僕は心からふたりを祝福した、はずだ。

三鷹が好きだ。

幸村が好きだ。

好きなふたりが付き合っているのが嬉しい。

これが、正解じゃないのか？

そう思ったんじゃないのか？

何で今更、こんな夢をみて、こんな後ろめたい思いをしなきゃならないんだ。

何の意味もない。忘れよう。

意味なんてあつてたまるか。

本当に、

今更だ。

僕は枕を天井に向かって投げつけた。埃をくっつけて落ちてきたところを、蹴り飛ばして床にたたきつけた。僕の代わりに酷い目にあつたそいつを横目で見ながら、溜息をつく。

幸村はいい奴だ。三鷹は幼馴染で、親友の彼女だ。以上。

はい、おしまい。

僕は幸村に返信しようと思って、結局何と返していいのかかわからないまま携帯を置いた。その後、何度か返事をしようとして携帯電話を取り出しては、送信ボタンが押せずに放り出す。それを繰り返しているうちに行き詰まり、三日間考え続けた末に放棄した。文字通り、お手上げだった。結局幸村と顔を合わせる機会はなく、メールが送られてくることもなかった。そして、あつという間にキャンプの週末がやってきた。

集合時間の十時を二分ほどすぎた頃に顔を出すと、すでにほとんどのメンバーがそろっていた。

「奈瀬ー、こっちこっちー」

幸村がささず声をかけてくる。私服だが女の子の格好ではなく、Tシャツにハーフパンツという健全な男子高校生のスタイルだった。もちろん髪も短い。

「なになに、ワンピース期待してた？ 残念でしたー、俺の代わりと言っちゃなんだけど、姫さんが超かわいいよ」

ハイテンションでまわりついてくる幸村は、完全にいつもの彼だった。体から力が抜ける。実際に幸村の顔を見るまで、自分が緊張していることにすら気づいていなかった。僕は本気で幸村に合わせる顔がないと思っていたし、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。我ながら融通が利かないのも思う。だから、何も知らないとは言え、いや、知りようがないのだけれど、幸村が普段の調子で僕に声をかけてくれたことがありがたかった。

「幸村の代わりにされちゃ、姫さんも黙ってないんじゃない？ ていうか、期待してないから」

「だから、そういう可愛げのないことは、かわいいかわいい姫さんを見てから言えってば。来てよかった、幸村くん、僕をキャンプに誘ってくれてありがとおって感謝する気になるぜ」

話の流れ上九条の姿を探すと、彼女はすぐに見つかった。男どもの視線が彼女に集中していたからだ。

「たしかに、かわいいいな」僕は素直に認めた。

九条は、真っ白なワンピースに華奢なサンダルを履いていた。こ

れ以上ないくらいに女の子らしくて、お嬢様っぽいスタイルだった。ただし、それがキャンプに着ていく服かと問われれば、首をかしげるところだが。

「だろう、だろう？ あれで、リーダーと一緒に白いベンツから降りてくるんだぜ。なんかいちいちやるのが派手なんだけど、姫さんだと納得しちゃうんだよなあ」

幸村は頭の後ろで手を組みながら、チームごとに出欠をとっている姫とリーダーを顎でしゃくってみせた。そこが定位置だと言わんばかりに、夏木も九条も自然にふたり一緒に作業している。九条と違い、夏木は膝上デニムに白シャツという動きやすそうな服装だった。すらりと惜しげもなくさらされた格好のいい足に、僕はちよつと目を奪われた。高校には指定の制服があるので、案外クラスメイトの私服というのは目にしないものだ。みんなも、互いの見慣れない私服姿に照れながら、女子などは洋服やアクセサリを褒めあつたりしていた。

「いいよなあ、女子の私服。中でも姫さんはダントツ可愛いけど、リーダーの爽やかな色気も捨てがたい」

バリトンの美声に耳元でぼそりと呟かれ、僕は咄嗟に耳を押さえ返り返った。

「仲本！」

「リアクションがでかいよ、奈瀬くん。女の子に見とれるくらい、健全な男子高校生なら当たり前。けっこうけっこう。淡白なのは損なだけ。ああ、でも姫さんはやめてね。奈瀬、ライバルにするにはちよおつと荷が重そうだから」

そう言っつて仲本晴吾はにっこり笑った。いかにも女受けしそうな顔で。

「おい、晴吾。またそんなチャライ格好して。ねえ、また背伸びたんじゃない？ 今何センチ？」

「んー、最後に測った時は186だったかな。もちつと伸びてるかも」

「ひゃくはちじゅろうくう？ くそ、ちったあ俺にも分けるよ、晴吾ばっかずりい」

「こればかりはなあ。もうあんまし伸びてほしくないんだよねえ。着る服とか困るし。分けてやりたいのはやまやまだけど、圭次は今のままでいいよ。そのほうがかわいいじゃない」

「さりげなくチビって言ったろ。……なんかム力つく」
「ええー」

ふたりはきやあきやあ言いながらプロレス技をかけあっている。素が躁状態の幸村はともかく、仲本がこんなにはしゃぐのは珍しい。本当にこのキャンプを楽しみにしていたのだろう。

「奈瀬、先に出欠済ませちゃいなよ」幸村の首にヘッドロックをかけながら、仲本があっち、と視線で教えてくれる。

「あつ、奈瀬の馬鹿、助けてから行けよっ」

薄情者、と情けない声を上げる親友はしばらく仲本に預かってもらうことにして、僕はリーダーと姫の元へ向かった。先に気づいた九条が「奈瀬くん、いらっしやい」と微笑んでくれる。

「お疲れ。何か手伝えることがあったら言って」すでに忙しそうなふたりに声をかける。

「ありがとう、助かるよ。人数は大体そろったみたいだから、加藤先生のほうを手伝ってくる。その間、ここ、代わってもらってもいいかな」

「いいよ。ついでに二、三人連れていけばいい」

夏木からペンとファイルを受け取って、九条の隣に立つ。加藤はペンションの入り口に停めた車から、クーラーボックスを降ろしていた。力仕事向きの人材はたくさんいるのだ。活用してもらえばいい。夏木もそう思ったのか、「そうしよう」と言っただけで近くの男に声をかけていた。

「いいところだね」僕は深呼吸しながら言った。街中とは空気の味が違う。口から肺を通して、全身に酸素が行き渡る。

最寄の駅からさらに車で三十分、最後のコンビニからは十五分と

いう立地は、ほどよく街から隔離されており、高校生には手ごろな小旅行といえた。

「ふふ。そうでしょう。すこし標高が高いから涼しいし、静かで過ごしやすいから夏に出掛けるにはいいと思ったの。一度、みんなと一緒に来てみたくて」

九条は、長い髪をやわらかく風になびかせながら、空を見上げて目を細めた。木々の間から差し込む光が、土の地面にはつきりとしたコントラストの陰影を刻む。鳥の声も虫の声も、驚くほど近くから聴こえる。質のよい音楽ホールの中にいるような、三百六十度の音響設備だ。

「外なのに車のエンジン音が聴こえない場所に来たの、俺、初めてかもしれない」耳をすませても、聴こえてくるのは自然の奏でる音だけだ。

「夜はもつと、びつくりするくらい静かよ。慣れていないと眠れないかもしれないわ。肝試しにも最適なもの」

「肝試し？へえ、そんなものまで予定に入ってるんだ」

「ペナルティよ。覚えているでしょう？」

僕はまじまじと九条の顔を見返した。

「ごめん。ペナルティって何だっけ」

思い出せずにいる僕に、九条はちよつと口を尖らせる。

「カレー作りでズルしたときのペナルティ。あと、一番おいしくないカレーを作ったグループにも。もう、奈瀬くん。さっちゃんの話、聞いてなかったでしょう。幸村くんとしやべっていたの知ってるんだから。ちゃんと見てました、わたし」

「ごめん」僕はあわてて謝る。

「うふ。奈瀬くんは素直だから許してあげる。同じチームだから、トクベツね。がんばろうね」

さらっと笑われて、僕は息を飲み込む。男ならみんな姫さんが好きだよ、と以前仲本が言っていたことを思い出す。これは確かに、と僕は変なところで納得させられた。仲本と違って姫さんに恋愛感

情を抱いているわけではないはずだが、目の前で綺麗に微笑まれるとやっぱりドキドキした。下心がなくてよかった。あったらこんなものじゃ済まなかっただろう。男どもが浮かれるはずだ。

「あ、奈菜ちゃん。こっち、こっちよ」

思わず右手を心臓の上にあてて鼓動を確かめる。幸い、九条は遅れてやってきた森川奈菜にむかって手を振っていたので、僕の変な行動を見られずに済んだ。

「リオ、ちゃん。奈瀬、くん。遅れて、ごめんなさい」

森川は走ってきたのか、肩で息をしながらタオルハンカチで額の汗をぬぐった。その顔を見て、僕はあれ、と思う。こいつ、こんな顔してたっけ。

「大丈夫よ、みんなも今来たばかりだから。これで全員集合ね。加藤先生を呼んで来るわ。奈菜ちゃん、これ、よかつたら使ってね」

九条は傍に置いてあった小さなバッグから化粧ポーチらしきものを取り出して、森川に渡していた。僕は九条を制して、代わりに加藤を呼びに行く役を引き受けた。ムーミンが手鏡を覗きこむ。背中から二人の話し声が聞こえた。

「どうしよう、汗で全部流れちゃった」

「一度クレンジングをして一からお化粧したほうが、お化粧なおしするよりも早いかもれない。ペンションに大きな鏡があるわ。大丈夫よ、奈菜ちゃん。今日のリップ素敵ね」

ああ、化粧、していたのか。どうりで顔が違うはずだ。女は化粧で別人になるというし、今のふたりの会話で合点がいった。あの調子だと、普段のムーミンはノーメイクなのだろう。気合が入っているのはどうやら男ばかりという訳でもないらしい。ムーミンにもお目当ての相手がいるのだろうか。誰だろう、夏木かな？ あれ、女同士でも化粧するほうがモテるのか？ そんなことを考えながら、僕は加藤に全員が揃ったことを告げた。

おおお、というどよめきが漏れる。お姫様のペンションは彼女のステイタスにふさわしく、非常に豪華な造りになっていた。二棟ある建物の片方が客室になっていて、今日は十室すべてが貸切りである。ペンション、と呼んでしまうにはいささか重厚すぎる玄関を抜けると吹き抜けのロビーがあつて、そこでオーナーらしき人物に出迎えられた。加藤が若干気おされながらも、教え子の叔父でありペンションのオーナーでもある九条氏に挨拶する。氏は四十歳前後と思われる非常にダンディな叔父様だった。渋くて品のある大人の男、という雰囲気だ。同じ叔父でもこつも違うのか、と僕は心中唸る。

専属のシェフがいるらしいよ、と誰かが囁いた。あのオーナーって独身かなあ、これは女子の声。ここ、普通に泊まったら幾らするんだろうね、この疑問はたぶん全員の心を代弁していた。ロビーにはどっしりとしたマントルピースを始め、ヨーロッパの歴史を感じさせるようなアンティークの調度品がさりげなく配置されている。鑑定眼なんてないに等しい高校生の目にも、なんだか高そう、程度には価値が伝わってくるのだ。

「はい、みんな、注目。今から鍵を渡すからね。部屋割りは覚えてるわね？ 代表の人が取りに来て。失くさないでね」高い天井に加藤の声がいつもよりもよく響いた。

鍵が行き渡ると全員で九条氏に礼を言い、さっそくそれぞれの部屋へと向かった。ペンションの特色である華麗な内装は、もちろん客室にも存分に反映されていた。それぞれの部屋にテーマと名前が与えられていて、全室違う造りになっている。

僕の部屋には『ユニバース』という名前がついていた。その意味はすぐにわかった。部屋に入って電気をつけようとしたら、天井に

いきなり天の川が現れたから。

「すげえ！ プラネタリウムじゃん！」

幸村は荷物をベッドに放り投げ、瞬きをくりかえす夜空と化した室内を眺め渡す。僕も一瞬呆気に取られて天井を見上げる。蠍座のアンタレスが赤く輝き、天の川にその尾を浸していた。

しばらくおたがい無言で星を見た後「あとで全部屋まわろうぜ」の一言で僕は我にかえった。扉を閉めていなかったので、近くの部屋のやつらの歓声が聴こえていた。

「オツケー。その前に電気つけるよ」

「ういーす。超面白いな、ここ」

今度はきちんと照明がついた。改めて室内を見渡すと、プラネタリウムの装置以外にも惑星やスペースシャトルの模型といったオブジェが飾られていた。凝っている。この分だと他の部屋にも期待がもてそうだ。ひとまず荷解きしてしまおうとスポーツバッグに手を伸ばした時、中途半端に開いたままのドアをノックして、夏木と仲本が顔を覗かせた。

「よっ。部屋めぐり中なの。スゴイね、ここも」すぐそばの惑星、たぶん配置的に木星だ、を指でちよんとつつきながら仲本が室内を見渡した。

「なんか珍しい組み合わせ」幸村はスプリングの力を借りて寝転んでいたベッドから器用に跳ね起きた。

「荷物を置いたら、必要なものだけ持って外に集合」夏木は礼儀正しく部屋の外から声をかけた。

「あ、リーダー。部屋どんなだった？」すかさず幸村が聞いている。

「テーマは『夜の砂漠』だったかな。ベッドに天蓋がついてるよ。あとで見に来る？」

「行ってもいいの？ 行く行く」

「まずは集合だ。奈瀬と仲本も」

僕はうなずき、スポーツバッグの中からペットボトルとタオルだけを取り出して廊下にでた。幸村が続き、なぜか仲本が施錠してい

た。「圭次、でかした、お前最高。これで堂々と姫さんの部屋に行けるよ」彼は鍵を返すと、幸村の頭をかいぐりかいぐりして、拳句にその手をはたかれていた。「晴吾のアホ。他チームの奴なんか連れていくか。さっさと裏切りやがって。俺は奈瀬と一緒に行くんだもんね」

外に出ると、すでに鍋やクーラーボックス、ダンボールに山盛りの野菜といったものがバンの荷台に積み込まれていた。火を使える場所は決められているので、手で運べない荷物は先に車で移動させるようだ。僕たちはここから全員で歩いて行く。徒歩でも五、六分の距離だ。加藤は人数を確認すると、バンに乗り込んだ。僕らも隣同士しゃべりながら、のんびりと歩きだす。自然とチームごとにまとまっていた。僕の隣には、珍しくムーミンがいた。目が合うと彼女は、えへへ、と照れたように笑った。きちんと化粧直してきたようだ。九条が言ったように、薄いピンク色のグロスがよく似合っていた。

「あの、奈瀬くん。キャンプ、たのしみだね。わたし、今日のキャンプすごく待ち遠しかったんだよ。すごくすごく、勉強しちゃったよ」

「へえ。偉いね、森川。俺なんて毎日ごろごろしてばっかだよ。軟体動物になりそう」

「あはは。そっかあ。あ、でもわたし、奈瀬くん見かけたよ。終業式の日」

「え？ 俺、何してたかな」

「すごく、かわいい人と、一緒だった」

「かわいい人……？」

「もしかして、彼女、さん？ あのね、ちょっと噂になってたんだ。実は。奈瀬くんがね、ときどき、すごいかわいい女の子と一緒にいるって。ゴスロリのコ。ゴスロリってね、難しいんだよ。メイクとか、髪型とかもそうだし、トータルで決めてかなくちゃいけないって、

けっこう服に着られちゃうんだよう。でもその人、本当にかわいくて

「ちよ、っと待って、森川。それ、ああ、ええとね。彼女、じゃないよ」「というか、女じゃない。

「ちがうの?」

「あー……、うん。知り合い」

沈黙。

「信じて、なさそうだね」

「そんなことないけど、隠したくなる感じの人なのかなって思った。もしかして、誰かの彼女さん? 妹さん、とかじゃないよね?」

「えつとね……。まあ、いつか。別に口止めされているわけじゃないし。あれ、幸村だよ」

「え?」

「だから、幸村が女装してたの。まあ、趣味は人それぞれだからいいんだけど。それに付き合わされてんの。たしかに、美人だよ。でもただのトモダチだから」

「幸村、くん……。そっか、幸村くんか。それじゃ、彼女じゃないね。あは、彼女じゃなくて友達だね。すごい、本当に女の子に見えたよ。わたしが見てもドキドキしちゃうくらい綺麗だったもん。今度、お化粧のしかた教えてもらおうかな」

「なんかもう、すげえよ。睫毛とかさ、ばっさばっさ音がしそうでさ、目とか唇もうるうるで。あいつ、才能発揮する場所間違えてんなって思った」

僕の物言いがおかしかったのか、ムーミンは我慢できずにぶつと吹き出した。笑いすぎて涙が出てきたのか、指で目元をこすっている。

「そっかあ。なんだあ。彼女、ちがうんだ」

「いくら美人でかわいくても男はちよつと」

僕らの笑い声が聞こえたのか、前を歩いていた幸村が突如くるりと振り返った。ぶんぶんと手を振るので、僕らも手を振り返した。

仲本はちゃっかり九条の隣をキープしていた。冗談でも言っているのか、九条も終始笑顔で、あいつも頑張っているな、となんだか応援してやりたくなった。

キャンプ場に着くと、早速白いバンが見えた。加藤に指揮され、先に着いた男子生徒が荷物を運び出している。まだ手が足りていないようだったので僕も手伝うことにした。森川と別れてバンに近づく、後ろからすすすと仲本が寄ってきた。

「あれ、姫さんはいいの？」

「こついうところは手伝っておいてポイント上げるの。それより、ムーミンといい感じだったじゃないの。お宅ああいうのがタイプ？」

「そんなんじゃないって。幸村の話で盛り上がったただけ。森川に失礼なこと言うなよな」

「あら。青春をどこに置き忘れてきちゃったの、奈瀬くん」

「仲本は一生青春やってるよ」

「俺はこのキャンプで決めますよ」

「健闘を祈るよ」

「おつ」

互いの拳をがっつと合わせて讚えあうと、僕らはせつせと荷物を運び出した。でかい鍋、さらにでかい鍋、フライパン、BBQ用の網、しゃもじ、お玉、包丁にまな板、ボールやザルや菜ばしにゴムベラまで。正直、何に使うんだと思うようなものまで揃っていた。一際重いジャガイモ入りのダンボールを引っ張り出したところで集合がかかった。

「チームごとに集まった？ メンバーの変更はないよね。それじゃあ、シエフは頭、リーダーは手首に目印になるように何か巻いて。タオルでもバンダナでもいいよ。何もつけていない人はネゴシエーターだ。あと、審判・判定役に加藤先生と沢北が入ってくれる。ペナルティ気をつけて。ノーチーディングでいこう」

男はタオル、女子はハンカチかバンダナが多い中、九条はシルク

のスカーフで髪を包んでいた。やっぱりアウトドアからはかけ離れていたけれど、相変わらずかわいい。ちくちくと嫉妬だか羨望だかの視線を感じたが、今更後に引くわけにもいかなかった。せいぜい、風呂上りにパンツを隠されないよう祈るまでだ。

「美味いカレー作るうなっ」幸村はそんな視線など物ともせず、姫さんに話しかけている。女の格好をしているときだけかと思っただが、やはり彼は大物なのかもしれない。

「準備が出来たグループからリーダーの人、前に出てきて。今からじゃんけんで食材を振り分けるよ。勝った人から選んでいく。ああ、森川はいいよ。わたし達のグループは最後だ」夏木はミーティングのときに九条が一方的に決めた約束をきっちり守っていた。

一番手、仮にA班としておく、がまずメインから肉をさらっていった。六種類のうちのどれかひとつでも欠けていればアウトということは、それぞれの価値はそう変わらないはずだが、心理的には肉とニンジンは同格ではない。基本は等価交換だが実際に材料を手にするのは食料調達の肝、ネゴシエーター達の裁量にかかっている。肉が一番上、というイメージ戦略に賭けてきたか。

続いてのB班は仲本と女子ふたりプラス、カップルという組み合わせだった。ここは手堅くニンジンとジャガイモの組み合わせをチョイスする。こちらはワンセットになっているが、もちろん交渉の際はばら売りだって可能だ。要は質より量である。

最後に、C班が残った玉ねぎと米のうちから米を選んだ。ちなみに、A班、C班の面子は男女ともにながちりと姫ファン、リーダーファンで固められており、なんとなく宣戦布告を受けているような気分させられた。幸村も僕も森川だって恨みを買っているんだらうなと思うと泣きたくなる、もとい身が引き締まる思いだ。無事にカレーが出来上がるだろうか。

メインが終われば、次はサブの食材が振り分けられる。ナス、ピーマン、ブロッコリー、シーフードやマッシュルームといった山盛りの食材がみるみるうちに無くなってゆく。なんてまあ貪欲な。カ

レーに入っつていそうなものはあらかた持つて行かれてしまふ。そんな調子で調理器具も便利なものはみんな姿を消した。電池式のミキサーとかフードミルとかテフロン加工のフライパンとか水なしで美味しく炊ける鍋とか、……本当によく揃えたな。ぼんやりしていたら何も残りそうになかったので、「やばくない？」と隣の夏木にささやいてみる。「そうだな、その鍋を持つていかれると困るかな」

最後の大鍋すら持つて行こうとしていたA班の女子が夏木を見た血も涙もないな、と僕は天を仰ぐ。夏木はしばらく視線を合わせたあと、にこりと笑った。僕にはなくA班の女に。

「あ、使うよね夏木くんのチームも。置いておくね」

効果は靨面だった。彼女はいそいそとでかい鍋を元の位置に戻すと、嬉しそうに手ぶらで自分のチームに戻っていった。

「俺知ってる。あれ、イロジカケって言うんだぜ」幸村がぼそりと言った。僕にも異論はなかったもので、うなずいておいた。

結局、僕らの手元に残ったものは、玉ねぎ、にんにく、オレガノ、タイム、ブラックペッパーの粒、コリアンダ、ローリエ、ナツメグ、バジル、トマトのホール缶、ツナ缶、さば味噌缶、ライチ缶、ピーラー、BBQ用網、まな板、すり鉢、そして夏木マジックで手に入れた大鍋だった。

全員、目の前の食材と器具を前にしばし無言になる。誰か突っ込めよ、という無言の圧力だ。全員の思いを代弁したのは幸村だった。「缶詰とスパイスばかりじゃねえ？」

その一言に釣られて、みんなも口々に感想を漏らす。

「さば味噌、はカレーと関係ないよね。美味しい、けど」

「玉ねぎとにんにくしかないのに、ピーラーってどういうこと」

「叔父様、何を考えていらっしやったのかしら」

「うーん、スパイスが乾燥物じゃないあたりはこだわりが伺えるんだけど、こだわるところを間違っただ感がひしひしとする」

「同感」三人分の声がユニゾンで揃った。

ひとしきり文句を言つと、僕らはふたたび黙り込んだ。始める前

から敗戦色が濃い、この上なく不利な状況に士気が下がる。そんな中で、くすりと笑ったのが森川だった。くすくす、という控えめな笑い声はすぐにあははっという大笑いに変わった。

「あは、あはは、ごめん、なさい。でも、おかしくって。スパイス、揃いすぎて。黒胡椒とか、どうやって使うんだろう、すり鉢で摩り下ろすのかな？　そういうこと考えてたら、おかしくなっちゃって」

それが伝染したのか、横で幸村がぶはっとなげ出した。「スパイスもいいけど、さば味噌が最高だよ。さば味噌って、学食じゃねえんだから……くくっ、あははっ。ああ、俺なんだかさば味噌食べたくなってきた」

笑い転げるふたりを前に、夏木と九条も互いに目を見合わせてくすりと笑った。僕もつられて笑う。ああ、これだけ変てこなラインナップなら元は取ったぞ、と奇妙に納得した。

「よし、これでカレー作るぞ」

「おお！」

しかし、ここからが本当の大波乱だった。

九条璃桜は台風の日だ。

米を研いでくれる？ と声をかけ、ことりと首をかしげられた時に気づくべきだった。とりあえず三回くらい洗ってくればいいから、と言いなおしたときに止めておくべきだった。迂闊で想像力が足りていない自分を責めるよりほかにない。

「姫さん、ちがうよ、米は水で洗えばいいの。洗剤とかそういう物騒なものはいらないから！」

米を洗うと聞いて、まず食器用洗剤を取り出すなんて、漫画の中だけの話だと思っていた。いくらなんでも、そんな間違いを素でおかす人間がいるとは思わなかった。

しかし、そんなものはまだまだ序の口だった。キャンプの炉に焚きつけて火を起こしている間、少なくとも三回僕の寿命は縮まった。ネゴシエーターがまずは和やかにピーラーと交換で果物ナイフをB班から受け取ってくるやいなや、九条は見ている者が悲鳴を上げそうになるほどダイナミックな手つきで玉ねぎを滅多切りにし始めた。誇張ではない。僕は本気でホラー映画の連続殺人鬼を思い浮かべた。「姫さん！ 九条！ ちょっと、それ、危ないって。ナイフ下ろして。玉ねぎ切り終わる前に指が全部飛んじやうから」僕は九条の首を掴んで止めなければならなかった。

「奈瀬くんたら、大げさなんだから。ほら、せっかくの火が消えちやうわ。ここはわたしに任せておいて」

僕は思わず夏木の姿を探してしまった。いつもどうやってこんなじゃじゃ馬の手綱を握っているのだろう。彼女は僕の言うことなんか聞きやしない。

「あのさ、小学校の調理実習で習わなかった？ 包丁を持つときは、

逆の手の指はこうやって丸くして怪我しないようにって」

「だって、目に染みるんですもの」

「いやそれ、関係ないよ」

不覚にも視線が泳いでしまう僕である。僕は夏木を深く深く尊敬した。今まで九条の奇矯な振舞いが前面に出てこなかったのは、ひとえに夏木のフォローあつてこそなのだ。その頼みの綱は、なぜか女子に囲まれていたが。

「リーダー！　じゃなかった、夏木！」呼んではみたものの、あちらも自分のことで手一杯といった様子だ。ネゴシエーターがネゴシエーターをゲットするためにネゴシエートしている。なにか違う、と思ったがとにかく夏木の助けは期待できそうになかった。

「夏木くん、いつつもりおと一緒なんだもん。今日のキャンプはわたし達とも遊んでね」

「わたしのチームのカレー食べたらいいよ。夏木くんのために美味しいカレー作るから」

「りおのお守りばかりじゃつままないでしょ？　自由時間は一緒に遊んでほしいなあ」

僕はちらりと姫さんを盗み見た。シェフの縛りは火の回りから離れられないことだ。案の定、姫さんは今にも飛び出していきそうな勢いだつた。

「く、九条？」

「奈瀬くん」ぐりん、とこちらを見る目が本気だ。

「なに」及び腰になりながらも、ここを離れようとするなら止めなければという使命感が僕に言葉を吐き出させる。

「奈瀬くん、あなたいい方ね。璃桜って呼んでみてくださらない？　さっちゃんなんてもう知らないわ。わたし、さっちゃんのお守りなんかいらぬもの。さっちゃんの浮気者！」めらめらと嫉妬に燃える九条に、消火器でもジェット噴射してしまいたいところだが、この炎はそんなものでは鎮まりそうにもない。

苦勞して起こした火は消えてしまふし、せっかく手に入れた米は

洗剤に浸かるし、開始から三十分が過ぎているのに、むしろ始まる前よりもカレーから遠ざかっている。

このままでは駄目だ。食べ盛り的高校生には一食抜きでもきつい。この際最下位だろうが、まともな昼飯にありつくことが最優先だ。僕は腹を決めて、改めて戦況を把握することにした。残念なことに夏木と九条はいいところプライマイゼロの働きだ。もうひとりのネゴシーターはと言うと、こちらは仲本の妨害に苦戦していた。

「晴吾、てめえそれ俺が狙ってたのに！」

「残念でした、本日の営業時間は終了いたしました。またのお越しをお待ちしております」

「ふっざけんな、さば缶やるから肉置いてけよ」

どっちがふざけているのか微妙なラインだが、ともかく頑張ってくれ幸村。僕は姫さんから半ば強制的に没収した果物ナイフで玉ねぎを刻み、にんにくをみじん切りにした。姫さんには火の番をしてもらっている。機嫌は低気圧気味だが大荒れの天気は過ぎ去ったようだ。

「火の加減は」どう、と最後までは言わせてもらえなかった。代わりに「どうわっ」という声が出た。炉の火はまるで中華料理店のキッチンのように激しく燃え上がっていた。

「姫さん！ 火力、火が強すぎるよ。キャンプファイヤでもする気？ わ、燃料がもうほとんどない」

「え？」

「え、じゃないよ。アウトドアの達人？ どうやったらこんなに火力大きくできるの」

「うふ」

ああもう、褒めてないから。

「わかった、九条はちよつとおやすみな。あ、缶詰のライチあるから。食べてていいよ」こうなったら俺ひとりでもやるわ、と決意する。しかし、九条は僕が差し出したライチ缶をあっさり無視した。

「璃桜」

「え？」火加減の調節が難しい。このまま燃料が燃え尽きるのを待つしかないのか。

「だから、璃桜です」

「知ってる、けど」

「じゃあ呼んでください」

「ちょ、姫さん、頼むからさ」

「姫じゃありません、九条も嫌です。璃桜って呼んでください」

「無理」

「どうして」

だってほら、仲本がスゴイ目でこっちを睨んでいるし。いや、仲本だけじゃない、僕が九条に詰め寄られているというのに、なぜだか嫉妬に狂った視線がいくつも突き刺さる。代われるものなら代わってやりたい。

「呼んだら、大人しくしている？」

「大人しくの意味がわかりません。でも、奈瀬くんの言うことを聞きます」九条はここできこり笑った。

「り、」おう、と続けようとしたときに、横から「リオちゃん」と声がかぶさった。ムーミンだ。彼女はネゴシエーターに代わって、少ない取引材料から食材を調達するために奔走していた。

「奈瀬くんを困らせちゃ、駄目、だよ。みんな、で、力あわせなきや、だよ」つかえつつかえそう言つと、ムーミンはじつと姫さんの目を見た。しばらくふたりは無言で視線を交わしていた。何かの電波でも交換してるのだろうか。目を細めてみるが、可視光線ではないようだ。

「奈菜ちゃんの言うとおりね。リーダーに従うわ」九条はあっさりと引いた。あまりの聞き分けのよさに僕はへたりこみそうになった。しかしうずくまっている時間はない。開始からすでに一時間、折り返し地点に差し掛かっていた。僕たちのチームだけが、まだ下ごしらえすら済んでいない。メイン六種のうち、ジャガイモと肉が足りず、米は使い物にならなくなった。夏木は相変わらず女子に囲まれ

ていたし、幸村と仲本はすでに交渉決裂している。リーダーのムーミンもメインの食材には手を出せない。すべてはまともな昼食にありつくため。僕は意を決した。

「森川、肉の代わりになるものを何か調達してきてくれる？ 魚でもソーセージでもいい。あと、出来たら夏木を助け出してやって欲しいんだけど」ムーミンがうなずいて、無法地帯と化しつつある場所に戻ってゆくのを見届けて、「幸村」と声を張り上げる。

「奈瀬ー、聞いてくれ。晴吾がすっげえ意地悪する。俺が先に狙ってたのに、横から搔っ攫っていくんだぜ」ぶつぶつ文句を言う幸村をなだめすかして、がしつと首に腕をまわして顔を近づけ、さらに声のトーンを落として「昼飯、食いたくないのか」と言うと幸村の肩がびくつと震えた。

「食う！ 俺もう腹ぺこ」よしよし、そうだろうそうだろう。俺だって昼飯が食いたい。

「今のままで食いつぶれるんだよ。ネゴシエーターの仕事しろ、幸村。正面から突つかかっていなくていいから。仲本のほかにもネゴシエーターがいるだろう。そいつらからなんでもいい、焼いて食えそうなもの取ってきて」

「わかった。……でも、大丈夫か？ なんか、すごいことになってない？」幸村は泡にまみれた米を目にしてしまったらしく、本気で動揺している。

「こつちは俺がなんとかするから」

「奈瀬」

「なに」

「お前、なんかさつきから性格変わってない？ そんなに積極的な奴だったっけ」

「いいから行けって」積極的にならなきゃ食うものねえんだぞ、という言葉を飲み込んで、僕は幸村に向かって顎をしゃくった。

「璃桜」

「なあに、奈瀬くん」

「俺の言うとおりにしてくれる？」

「もちろん、約束ですもの」姫さんは、ライチをぱくりと食べながらにっこり微笑んだ。

そこからは時間との戦いだった。制限時間二時間のうち一時間と十五分をすでに消費してしまった後だったので、もう一刻の猶予も残されていない。僕は、ボールにんにくとスパイスを放り込んだカレーのルウも砕いて混ぜた。ほとんど手当たり次第だ。そこに醤油、酢、白ワイン、レモンをさらに加え、適当に混ぜて味をみる。なんとなく、それっぽい味になっていたので、次に網を用意した。

「奈瀬くん、何を作っているの？」横から九条が覗き込む。

「シエラスコ、って知ってる？」

「いいえ。わたしも野菜、焼いていい？」

キャベツやらパプリカやらズッキーニと言ったメインとは関係ない野菜は、森川の努力の甲斐あって種類も豊富に揃っていた。僕はBBQ用の網にそれらの野菜を並べながらシエラスコの説明をした。「ブラジル料理なの？ わたし、食べるの初めて。奈瀬くんはどうして知っているの？」

「シドが、あ、俺の叔父なんだけどね。ちょっと放浪癖のある人で、ふらつと世界中どこへでも行っちゃうわけ。で、帰ってきたときに行った先で食べた美味しいものを俺に作って食わせてくれたの。たまたま今日、思い出してさ。どうせならカレー味にしてやるかって思ってた」

「素敵な叔父様ね」

「……たぶん、想像とは違うと思うけど」僕はもごもごと言った。叔父は意外なところで役に立つ男だった。

「奈瀬、くん。リオちゃん。お肉、ちがうけど、エビがあったよ。あとね、鶏肉」

「上等」僕はムーミンから貴重な蛋白源を受け取った。エビはほど

よく解凍済みだったので、殻を剥いて背腸を取ってから先ほどの調味料に漬け込む。鶏肉にはナイフの先で皮に切れ目を入れ、味が早く染み込むようにしてからやはりボールに突っ込んだ。

「なに、が出来るの？」網焼きの野菜に目をしばしばさせながらムーミンが聞き、姫さんがそれに答えていた。

「奈瀬。焼けば食べられるって、これとかじゃ駄目？」幸村はバケツトを一本丸ごと持ってきた。

「駄目じゃない」

「駄目じゃないよ、幸村くん」いつかのように、今度は僕と姫さんの声がハモった。

「ガーリックトーストだな」再び叔父のレシピ参照である。

「なにそれ美味そう！いつ食べられる？もうこのへん焼けてねえ？」目をきらきらさせている幸村に苦笑しつつ、僕はエビとチキンを網にのせた。スパイスの焦げるいい匂いが立ち上り、思わず喉が鳴りそうになる。

その頃になつて、ようやく夏木が戻ってきた。ものすごく憔悴している。

「ごめん」心底申し訳なさそうに謝る夏木を全員で労った。曰く、「あれでは仕方ない」だ。むしろよく無事で帰ってきてくれた。

「璃桜？」戻ってきたことが嬉しくて堪らないくせに、まだ何か言いたそうな姫さんを夏木がうながす。

「さっちゃん馬鹿」

「うん、ごめん」

「浮気者」

「ごめん」今度は苦笑だった。

「お守りじゃないもの」

「そんな風に思っていないよ」

「知ってるわ。……ごめんなさい」

幸村が僕のシャツの裾をくいくいと引っぱって曰く「奈瀬、俺知ってる。こつこつこの、痴話喧嘩って言うんだぜ」やはり反論は出来

ず、僕は曖昧にうなずいていた。

「みんな、焼けた、よ」恐る恐る、声をかけてきた森川に僕は心から感謝した。彼女はこのチームの理性だ。使い物にならないネゴシエーターに代わって一番よく動いてくれたのも森川だった。

「ありがとな、リーダー」

「え、え、え。どうしたの、奈瀬、くん。わたし、何もしてないよ」慌てて否定するムーミンは真っ赤になって首を振った。

「そっちも！ ラグシーン禁止。いらぬなら俺ひとりで食っちゃうよ」幸村が早速手をつけようとしていた。なんとか時間一杯まで踏みとどまらせて、加藤の「それじゃあ、頂きます」に唱和する。

カレー味のシェラスコは、物凄く美味かった。

後片付けを終え、一段落ついた後は自由時間だ。食休みを兼ねたおしゃべりもそこそこに、みんな仲のよい相手をつかまえて湖や小川へと散っていく。僕は楽しそうなクラスメイトを尻目にひとりペンションへと引き返した。目的は加藤椿教諭とふたりきりの逢瀬、もとい進路指導である。白紙の用紙を前にしてこつてり絞られ、ほうほうの体で逃げ出す途中、ペンションから少し離れた木陰に九条の姿を見つけた。彼女はつばの広い帽子をかぶり、大きな木の幹に背中を預けて座っていた。すこし近づくと、九条ひとりではないことがわかった。九条の膝を枕にして、もうひとり横になっている人物がいる。

「奈瀬くん？」視線を感じたのか、九条がふつと顔を上げた。

「リーダー、どうかしたの」僕はふたりに近づき、小声でそつと聞いた。具合でも悪いのだろうか。

「大丈夫、眠っているだけよ」九条が囁き返す。

穏やかな寝息が聴こえた。たしかに日射病や貧血ではなさそうだ。熟睡しているのか、僕が近づいても目を覚ます気配はなかった。

「奈瀬くん、みんなと一緒に行かなかったの？」

「あ、うん。ちよつと用事があつて。……ふたりは？」

「すこし休憩」

「そっか」

九条の手はやさしく夏木の髪を撫でている。無防備な寝顔は、普段大人びた印象の夏木をいくらか幼くみせていた。目を閉じていると案外、まつげが長い。顎から首にかけてのラインが華奢で、綺麗だと思った。

「さっちゃん、さっちゃん。……ふふ、駄目ね。しばらく起きそう

にないわ」その声はどこか嬉しそうだ。

実際、夏木を見下ろす九条の顔は、ひどく優しげだった。僕はなんとなく居たたまれなくなつて、ふたりから視線を逸らせた。

「俺、幸村と約束してるからもう行くね」

「奈瀬くん」立ち去ろうとする僕を九条が呼び止める。「罰ゲームの心の準備、わすれないでね」

僕は返事代わりに手を上げて湖へ向かった。

湖畔までくると、クラスメイトの賑やかにはしゃぐ声が聴こえてきた。

「奈瀬ー！」

幸村はハーフパンツを太ももまで捲り上げて膝下は水に浸かっていた。その向かいには、仲本がやはりジーンズの裾を折り曲げて立っている。ふたりともすでにびしょ濡れだ。

「幸村、髪まで濡れてる」

「え？ マジ？ 晴吾のアホ」脱ぎ散らかしたスニーカーと靴下を回収しながら、幸村が僕の横に来た。

乾いた石の上にとっかか腰を下ろし、首から下げていたタオルでがしがしと頭を拭き始める。「用事すんだ？」

「あー、うん。一応」

「ふーん、加藤、何か言ってた？」

「まあ、色々」

「そか」ぐい、と濡れたTシャツを脱いで上半身裸になると、ぎゅつと絞る。こぼれた雫が砂に吸い込まれてゆく。僕は幸村の一連の動作をなんとなく眺めながら、ずっと気になっていたことを聞いてみた。

「そっぴやペナルティって何だっけ。俺、ミーティングのとき聞いてなくてさ。なんか、肝試し？ あるみたいなことを姫さんが言ってたんだけど」

「知らねえ。俺も聞いてねえもん。Tシャツ、干しときゃ乾くかなあ？」しわくちやのTシャツを広げる幸村の上に影が出来たかと思うと、ぼたりと上から水が降ってきた。

「仲本！」振り返ると、幸村に負けなくらいずぶ濡れの上に物騒

な微笑をたたえた仲本が背後に立っていた。水は彼の髪から滴り落ちた雫だった。

「教えてあげるよ、奈瀬。ペナルティは肝試しかトゥルース・オア・デアの二者択一。いや、この場合は三択になるのかな。まあいいや。覚悟しとけよ、圭次。ちつくしよ、パンツまで濡れた」

「ははっ。全部脱いで乾かせばいいじゃん」

「あのね、俺はお前と違って羞恥心てものがあるのよ」そう言いながら、仲本も着ていたタンクトップを脱いで絞った。

「おお、いい体！ 晴吾、部活終わっても筋トレしてるって本当だったんだな」幸村が仲本の胸にぺたぺた触る。そういう幸村だって、細身のアスリート体型だ。

「ああ、でもやっぱり現役の体維持するのは無理だな。筋肉落ちるわ」

「だよなあ。去年も一昨年も、この時期は部活ばっかしてたもんな。なんか変な感じ。俺たち受験生なんだな」

「ま、こんなことしてる受験生もいないだろうけど。ところで奈瀬くん、ひとり乾いてるじゃない。ちよっと水浴びでもして、オニサンたちと一緒に日焼けでもしない？」

「しない。仲本、それよりもトゥルース・オア・デアって何」男の筋肉談義よりも罰ゲームの方に興味がある。

「つれないなあ。まあいいや。マドンナのプロモ知らない？」

知らない。僕も幸村も首を横に振った。

「まあ、王様ゲームの亜種、とでも想像してもらったらいいか。俺も正式なルールは知らないよ。確か、トゥルースかデアかっていうのを先に宣言しておいて、トゥルースなら出された質問に正直に答える。デアなら、何でも言うことをきくっていうゲームじゃなかったかな。ほら、例えばトゥルースを宣言したら、好きな女の名前を叫ばせるとか、デアなら腕立て百回とか」

「へえ、何か面白そう」

「圭次くん、君、罰ゲーム受けるほうですよ。わかってんのかね」

え」目をきらきらさせている幸村の顔を、仲本は意地悪く指でぴんと弾いた。

「肝試しは？」僕は幸村を仲本からひっぺがしながら聞く。

「ああ、なんかここ、もうちょっと登ったところに社があるみたいね。そこまで行くんじゃない？ それも結構しんどいな。この辺り、夜は真っ暗になるらしいし。どうするよ、ふたりとも」仲本は嬉しそうだ。

「ああ、なんだ。肝試しってそんなんでいいんだ」

「え、けっこう本格的じゃない？ ちゃちなお化け屋敷よりも恐そうだけど」

「あー、晴吾。奈瀬は暗いのか山の中とか、ぜんっぜん平気な奴だから」

「マジで？」

「平気だね、割と」叔父の屋敷のほうがよほど何か出そうだ。

「俺はやだなあ。お化け屋敷は嫌いじゃないけど、ひとりじゃつまんないもん。その、トゥルースなんとかにしようかなあ」

「ふっふっふ。トゥルースもデアも、厳選した内容でお届けしますよ」

「え、ねえ、それって誰が決めるの？」

「そりゃあ勝ったチーム」

そう言えば、なんだかんだでカレー作りは仲本のチームが優勝していた。「矢野と井上さんは最高だったね。ゴールインしてもいい夫婦になるわ、あれ」仲本が自慢しているのは、ネゴシエーターとシェフの役を務めた件のカップルだ。

「あ、矢野ー、いいところにいた。鍵頂戴」

ちょうど通りかかったカップルの片割れを呼びとめ、仲本は部屋の鍵を受け取った。矢野はついでに何かこっそりと耳打ちし、仲本はそれに親指を立てて笑顔を返していた。

「矢野ってさあ、もう井上とやったんかな」それを見ていた幸村がぼつりと言った。いっそすがすがしいほどの直球だ。「俺に聞くな

よ」と返しながら、つい僕は考えてしまった。幸村、お前はどのような？と。

「んーん、今夜が勝負」代わりに答えたのは仲本だった。

「なんでお前がそんなこと知ってるの？」幸村が食い下がる。

「今夜、部屋空ける約束してるから」

「仲本、矢野と同じ部屋だっけ」

「そう。あ、奈瀬。今夜泊まらせてよ。駄目なら井上さんの部屋に泊まるけど」

「ああ、そういうこと。でも、それってさすがにマズくない？」

「手えださないよ。俺は姫さん一筋だもん」

「別に泊めてもいいけど、ベッド余ってないよ」僕は部屋の中の様子を思い返しながら答える。ベッドの代わりになりそうなものはあつただろうか。

「なあなあ、奈瀬は経験ある？」

「セクハラ反対」

「ええっ、セクハラ違うぜ。なあ、晴吾も興味あるよな？」

「まあねえ。で、実際のところどうなのよ。奈瀬ってちょっとつつき難いけどモテそうじゃん。一年のとき、クールビューティとか言われてたっしょ」

「なんで知って……」

「マジ？ 誰から？」

「三年の女」

「すげえ！」

「……ないよ」

「え？」同時に聞き返される。

「だから、……経験はまだないって言ってるの。二度も言わすなへえ、ほお、とにやにや笑いながら相槌を打つふたりに舌打ちして「幸村はどうなの」と聞いてやる。俺ばっかり恥ずかしいなんて癪だ。

「俺？ ないよ」あっけらかんとしたものだ。

「ない、の？」思わず聞き返す。「うん、童貞」と答えられて力が抜けた。なんだ、俺、何を気にしていたんだろ。

「お子ちゃまだなあ、ふたりとも」仲本が笑顔で僕と幸村の頭をぐしゃぐしゃと掻き混ぜた。「ねえねえ、俺には聞いてくれないの？おふたりさん」

「晴吾の女遍歴とか、興味ねえもん」

「……長くなりそうだからパス」

「ええつ、酷くない？今は姫さん一筋なのに」

説得力ないよな、とうなずき合う僕らを見てひとしきり溜息をついた後、仲本はひよいと立ち上がりジーンズについた砂を払う。

「ああもう、濡れたパンツも限界。俺、着替え取りに行ってくる」

「晴吾、俺のも頼む」幸村が部屋の鍵を投げ渡していた。

「マジかよ。着替えてどれ」

「鞆の中に入ってるやつ。Tシャツでいいや。あとタオルももう一枚」

「お前、人使い荒い」「だから頼んでんじゃん」「いや、それ頼んでねえよ」そんな会話を繰り返した末、結局仲本を今夜泊めてやることで決着がついたらしい。ビーチサンダルを引っ掛けて駆けてゆく後姿は軽やかで、そっぴや走り高跳びの選手だったことを思い出した。

「前、仲本が褒めてたよ。幸村はめっちゃくちゃ速いって」

「何が？……ああ、部活？早いって、オナニーとかだったらどうしようかと思うじゃん」

「いい加減その話題から離れようぜ」神さま、この男に羞恥心という概念をお与えください。僕はそっと心の中で十字を切る。

「ふうん、そんなこと言ってたんだ、あいつ」幸村の顔がなぜか曇った。

「言ったらまずかった？」予想外の反応に戸惑う。

「いや……、あいつさあ。二年の冬に故障してるんだ。だから、今年の夏も大会には出てない。ずっと部活は続けてたけど、メニユー

はりハビリ中心で、正直他人のことどころじゃなかったはずなんだよな」

「え、そんな話、俺一度も」

僕は二年の時も仲本と同じクラスだった。しかし、仲本が故障していた話は初耳だった。

「あー、うん。隠してたみたいだな。あんなちやらちやらした男だけど、人に気い使わすのとか嫌がるから。俺とも普通にしゃべってたし。でも……俺だったら無理かもしない。晴吾みたいに出来ないかも、てか、絶対無理だ。自分が怪我で苦しんでる時に、横でのんきに走ってる奴とか見たら、殺意わく、かも」

「幸村」

「わり。今の内緒な。晴吾も今は吹っ切ってるのかもしれねえし」
幸村は無理やり笑顔を作った。そして、言おうか言うまいか迷うみたいに僕の表情を伺った。結局、「ただ、」と話を続ける。

「俺はあいつが跳んでるところが好きだった。なんか、わかるんだ。本気で好きなことやってるやつって、見てたらわかる。俺は走るの大好きだけど、晴吾はハイジャンが本気で好きだった、と、思う。俺はあいつが怪我したところも見てた。病院も無理言って付き添わせてもらった。俺は泣いたけど、あいつは、医者話を聞いても泣かなかった。ただ黙々とリハビリのメニューこなして、後輩の指導して、通院して。こいつどんだけ大人なんだろうって思った。怪我した後も変わらずふたりで馬鹿やったけど、それでも、平気な顔で部活の話が出来るようになったのは本当について最近のことなんだ。だから、……あいつが奈瀬にそういう話してると思ってなくて、油断、した。わりい」

幸村は膝を抱くようにしてぼそぼそとしゃべった。普段の彼らしくない、覇気の無い声が痛々しくて、僕は幸村の髪をくしゃくしゃと撫でた。ちようど、仲本がよくやるように。ずずつと鼻をすする音がしたので、僕は自分のタオルを幸村の顔に押し付けた。

しばらくそうやって並んで座っていた。幸村は顔を上げなかった

ので、僕は仕方なく湖を眺めていた。湖面が太陽の光を反射してきらきら輝いていた。こういう光景を見るたびに、CG処理じゃないのかと疑っていたけれど、ここは本当にきらきらしていた。

「……わりい。タオル、ぐちゃぐちゃにした」しばらくして、幸村は顔を上げた。目元がまだほんのり赤く染まっただけではいたが、涙はすでに乾いていた。

「いいよ」僕はタオルを受け取って、もう一度幸村の頭を撫でた。正気の時なら振り払うくせにそんな素振りも見せず、殊勝にも謝ってきそうな気配だったので「雑巾にでもするから」と続けたら、「そういうこと言うなら、お前の顔も拭いてやる！」と反撃してきやがった。

「嘘、ちょっと、それはマジ勘弁」本気で実行しようとする幸村から全力で逃げる。速い。さすが元短距離走者……なんて感心している場合じゃなかった。僕らはしばらく鬼ごっこを続けた挙句、あまりの馬鹿馬鹿しさにどちらともなく吹き出して、そのまま笑い転じた。

「あ、アイス発見！」笑いの発作から立ち直ったのは幸村が先だった。

「え？ どこ？ ああ、リーダーと姫さんか。ついでに仲本な」息を整えて立ち上がる。

三人がクーラーボックスから棒付きアイスを出して配っていた。誰かの親の差し入れだろう。

「圭次ー、着替え取りにこいよ。奈瀬も、アイスいらなーい？」僕達を見つけて仲本が叫ぶ。幸村と僕は顔を見合わせ、次の瞬間には再びダツシュしていた。

「アイス、うま！」

さつさと着替えをすませた幸村が棒付きアイスに噛り付いている。「お前ねえ、アイスごときで本気のスタートダツシュ見せる奴があるかよ」呆れと賞賛の混じった声で揶揄する仲本もすっかり着替え終わって、こちらは濡れた髪までスタイリングされている。

「幸村の場合さ、ゴールに食べ物とか置いておけば記録なんかいくらでも伸びるんじゃない？」半分本気で提案してみる。

「ああ、それ、一回試してやめた」

「……試したのか」

「うん。監督にめっちゃめっちゃ叱られて、こいつに馬鹿笑いされて、茜に褒められたから」

最後が気になったが、僕は小川の流に身を任せるように受け流すことにした。世の中、知らないほうが幸せということもある。

「夏木くん、アイスクーださいっ」

「夏木くん、わたしも。ねえねえ、今までどこにいたの？ ずっと探していたのに」

「アイス食べ終わったら、あっちの川に行ってみない？ すごく綺麗だったの。夏木くんと一緒にお散歩できたらいいのになあと思ってたんだ」

あつという間に四、五人の人ばかりができていた。夏木は苦笑しながらもアイスをだしに近づこうとする女の子達を上手に捌いていた。公平に声をかけ、さりげなく笑顔を見せ、うなずいて、ほんの少し困ったような表情をする。そのたびに半オクターブ高い歓声が上がる。手馴れたものだ。一方、九条の前にはアイドルのサインを待つファンのように男どもがずらりと列をなしている。大人しく、理路整然と、互いを牽制しつつ、恭しく姫さんからアイスを受け取る男子高校生の姿には微笑ましいものがある。今にも誰かが「握手してもらってもいいですか」なんて言い出しかねない雰囲気だ。

と、そのとき、

「心の準備は出来た？」

突然夏木と目が合った。挑むような流し目をおくられる。

「罰ゲーム」

九条が僕だけに聴こえる声で囁いた。一瞬の出来事だった。

ささやかな違和感が追隨する。オブラートに包まれたような。

しかし、正体を掴む前にそれは霧散してしまう。僕が答えに詰ま

っている間にふたりは離れた。すりと身を翻す、猫のような鮮やかな手際だった。

なんだかいろいろな感情にあてられて、精神的に飽和状態になった僕は四時をまわる頃にはさっさとペンションに引き返した。CPUの処理率八十パーセントで熱破壊一歩手前のパソコンみたいな気分だ。

部屋に入って電気を点けようとしたら、またしてもプラネタリウムだった。もうどうでもよくなって、僕はそのままベッドに倒れこむ。目を閉じてしまえば同じことだ。

考えてみれば、夏休みに入ってから僕はほとんどひとりきりで時間を過ごしていた。たまに誰かと一緒になっても、相手は大抵幸村かシドだったからお互いに気心も知れている。たとえ僕が黙り込んでいても、幸村なら勝手にしゃべっているし、シドなら放っておいてくれる。

「なんだ俺、人酔いしてた、のか」

自分の声でもちよつと気持ちが悪い。僕は仰向けに寝転んで腹の上で手を組んだ。さっさと収まればいい。

目を閉じてなるべく何も考えないようにする。そうすると本当に静かだった。幸村の涙や九条の指先や夏木の視線や森川の口紅を全部ひとつの引き出しの中に仕舞って、かちりと鍵をかける。そこに貼られたラベルは『開けるな危険』だ。それらは全部、知らなければ知らなかったで済んだものたちだ。むしろ、知ってしまったら困ったことになる。困ったことってなんだ？ 僕は自問する。それは他人の秘密だからだ。知らなければ気にならなかったのに、知ってしまったら無視できなくなる。そういうものからは、離れていたかった。面倒くさい、とはすこし違う。ただ、どう扱ったらいいのかわからなくて困る。そういう不測の事態を想定したマニュアルでもあれば

いいのに。親友の涙を前にしたら言うべき言葉はこれだ、とかね。そうすれば、自分の不器用さ加減に腹が立つこともなくなる。

「三鷹なら、どうするだろう」

いつもの癖で、行き詰ると幼馴染の顔が浮かぶ。何も答えは出なかったが、彼女のことを想うと気持ちには不思議と落ち着いた。即効性の精神安定剤だ。僕は目を閉じたまま、全身から力が抜けてゆくのを感じた。

西日で目を覚ますと、なぜか隣のベッドでは幸村が眠っていた。すうすうと寝息を立てている。僕は起き上がり、時計を探した。十七時五十分。天井は、今は冬の星座を映していた。窓からはオレンジ色の光が差し込んでいる。相変わらずシユールな空間だ。

もそもそとベッドから這い出して、プラネタリウムを止める。かなり深く眠っていたようで、まだ頭がぼうつとしていた。それでも夕食の時間が近づいていることはなんとか理解していたので、隣のベッドに近づいて、そつと友人の肩を揺さぶった。

「幸村。幸村つてば。起きて、もう飯の時間だよ」

言いながら、正直あまり腹は減っていなかった。起き抜けだから仕方がないか。

「あれ？ 奈瀬？ おあよう？」

こらこら。おあよう、になっっているぞ。ついでに今は夕方だ。

幸村はふああ、とあくびをして目をこすった。まるで猫みたいだ。「夕飯、六時からだったろ。そろそろ顔洗って下におりたほうがいいかも」スポーツバッグを漁ってタオルと歯ブラシを発掘する。

「夕飯！ 俺、腹減った」途端に目が覚めたのか、幸村はぱつとベッドから飛び起きた。元気なことだ。ついでに、くるりと僕に向き直る。

「……何」真面目な表情の幸村につられた。

「部屋巡りツアー忘れた！ 奈瀬、飯食ったら行こうぜ」にこつと笑った。僕は歯ブラシとタオルを持ったまま、うなずく。

起こすまで寝こけていたくせに、飯の一言で覚醒した幸村は、僕

を洗面所に追い立てた。備え付けの洗面台で鏡を覗き込むと、髪がこれでもかと跳ねていた。どうも変な寝方をしてしまったようだ。水でも被ろうかと思っただけ、そんな時間も残されていなかったの、見なかったことにして歯だけ磨いた。

「髪、切らねえの？」いつの間にか後ろに立っていた幸村が、寝癖のついた僕の髪をちよいと引つ張る。

「そっぴや伸びたな」口の中を泡だらけにしながらしゃべるのは難しい。

「もうちょっと襟足伸びたら結べるんじゃない？ いっそそっちのが楽かな」

「やだよ」僕はうがいをして、水を吐き出す。「なんか、仲本みたいじゃん」

「あはは、ホントだ。晴吾、たまに結んでるもんな。で、女子にピントかつけて遊ばれてる」

「それが狙いなんじゃない？」タオルで顔を拭きながら、にやっと笑うと「だな」と幸村も笑った。

「ああ、腹減った。夕飯何だろ。俺、すげえ楽しみ」「専属シェフだっけ」そんなことを話しているうちに六時になったので、僕らは揃って部屋を出た。食堂は隣の棟にある。中庭をはさんで建物を移動し、食堂に入ると映画のセットのような長いテーブルにカトラリーが並んでいた。その周りを囲むクラスメイトは、皆どこか緊張気味だ。空いている席を見つけたので座ろうとしたら、後ろから椅子がひかれた。

「どうぞ」

オーナーの九条氏が立っていた。

「どうぞ、も」

にこり、と笑われた。僕が座るタイミングを見計らい、椅子がそっと前へ押された。一連の動作は流れるようになめらかに行われた。座ってから後ろを振り返ったが、すでに九条氏は離れた後だった。

「今の何？」僕の疑問を幸村が代弁してくれた。

「何だろっ」

わからない。

僕はさっさと切り替えて、料理に集中することにした。

約束どおり、幸村と一緒に部屋巡りツアーを敢行して新鮮な感動を味わい、紙一重的な呆れをも体験した後、僕らは仕上げとばかりに露天風呂を満喫した。広々とした岩風呂に足を伸ばして浸かる。無色透明の単純アルカリ泉はわずかにぬめりを帯びており、水温は長湯にちょうどいい温度だった。

「あーもう、俺今死んでもいいわ」と仲本。

「死ぬな。でも、これは墮落するな」と幸村。

「明日つから現実に戻れるかなあ」これは矢野で。

「この世の快楽を極めたって感じ？」僕の言葉に皆うなずく。

空には満天の星。

そして清かな月。

風は清涼。

ときおり、柵一枚へだてた先から女子の話し声が聴こえる。あつちはあるで楽しくやっているようだ。

あんまりいい湯だったから、普段は飛び出す下ネタすら誰も言ひ出さなかった。食欲と性欲から出来ていっても過言ではない男子高校生が突如風流に目覚めるほどの風呂体験。そうそう、出来るものじゃない。

僕は至極満足していた。これだけでも、キャンプに参加した甲斐があったというものだ。

そしてすっかり失念していた。

これからがキャンプの醍醐味、メインディッシュにして華麗なるファイナル。

キャンプファイヤを囲んでの罰ゲームだということを。

風呂を浴びてさっぱりした僕たちは、再び昼飯の場所に集まった。

皆思い思いの格好だ。昼間と違うのは、大きな木が生まれ、それが真っ赤に燃えて炎が踊っていること。その周りに円陣を組むように座る。風に乗ってばらばらと火の粉が舞う。炎に照らされた顔は、普段とはまた違った表情を作る。意味もなく高揚する。火を見ているだけなのに不思議だ。

まずは準備運動がてら花火でも。パーティサイズの花火セットには、打ち上げ花火から鼠花火、線香花火まで揃っている。水を溜めた青のポリバケツが三つ用意された。すこし離れた場所に加藤が座って僕らの様子を見ていた。その横には九条氏。もしかしてちょっといい雰囲気なのかな、と思っていたら、女子のひとりがふたりに気づき、火のついていない花火を持ってかけよる。ふたりに渡してまた友達の輪へ戻ってくる。ふたりは顔を見合わせ、花火に加わった。

ひゅるるる、と甲高い音。鼠花火がくるくる回る。歓声。炎を透かして見ると、ゆらゆらとクラスメイトの顔が滲む。赤と黒のコントラスト。風呂上りのちよっと上気した女子の頬とか、結んだ髪の毛で露になったうなじとか、はしゃいでる振りですういうものに敏感に反応している男とか。みんな、無邪気を装って駆け引きをして、それを承知で愉しんでいる。

最後の打ち上げ花火が上がる。

ほんのちつぽけなものだったけれど、僕らには十分だった。線香花火の一本まで使い切り、重たく垂れ下がった火の玉がぼたりと地面に落ちたら、皆黙々と後片付けを始めた。

ものの五分で花火の痕跡を消し去り、再び円になって座る。

「なんだか思ってたよりもあっさり終わっちゃったね。みんな、罰ゲームが気になる？」

わかっていて聞く夏木は、けっこういい性格をしていると思う。しかも、罰ゲームを受ける側だから尚更だ。身も蓋もない言い方をするなら、メインは夏木と九条で、僕を含めた残りの三人はオマケみたいなものだ。みんなの興味がふたりに集中しているおかげで、

幾分気が楽だけれど。

夏木は罰ゲームの前にすこしばかり席順をいじった。離れて座っていた僕と幸村が呼ばれ、ちょうど右回りに僕、幸村、夏木、九条、森川の順番で座りなおす。

「忘れている人もいるみたいだから、もう一度簡単に説明しておこうか」こちらを向いた姫さんと目があつて視線が泳いだ。ああ、僕らのことね、と。

「罰ゲームは二種類。肝試しかトゥルース・オア・デアだ。肝試しを選んだら、懐中電灯ひとつでこの上にある社まで深夜の御参り。縁結びの神様らしいよ。距離にしてざつと五百メートルつてところかな。距離的にはたいしたことないけど、夜道は暗いからくれぐれも気をつけて。トゥルース・オア・デアを選ぶなら、そこからさらにトゥルースかデアかを選ぶ。ここに、負けチームの五人以外が作つてくれた籤がある。トゥルースなら右、デアなら左の籠からひとつ籤を引いて、書かれていることを実行する。籤の中身はわたしも確認していないから、……みんなの良心を信じるよ。さあ、お待ちかねの罰ゲームを始めよう」

薪が爆ぜた。組み木がくずれ、火の粉が踊る。

「奈瀬、君から右回りでいこう」

突如名指しされて、視線の一斉放火を浴びる。俺から？　と思つたが仕方ない。

「肝試しで」

勇気あるなという贅辞と、籤引けよという落胆の反応が半々。僕はちらりと肩をすくめて、隣の幸村に目配せする。

「んつと、トゥルースで！」

今度は、おお、という歓声が上がった。斥候役のつもりだろうか。どちらにしても、サービス精神旺盛な男だ。「次、リーダーは？」

「じゃあ、デアにしよう」夏木はあっさりと言った。女の子が息を呑む。何を書いたんだろう？　引いてくれるといいな、と僕は彼女達に心中味方しておいた。

「トウルースにします」続く姫さんも迷いはなかった。きつぱりと言い放つ。今度は、男達が息を呑む番だった。……何を書いたんだ。最後の森川はすこし悩んだ。しばらくキャンプファイヤの炎を見て考え込んだ後、「肝試し、で」と言った。

「奈瀬、一緒に行つてやれば？ さすがに女ひとりじゃ危ねえよ。お前どうせ恐くないんだし。いいだろ、リーダー？」幸村が気をきかせる。

「俺は構わないけど」応えながら考える。確かに、ひとりだろうがふたりだろうが恐くないことは恐くない。が、しゃべる内容には困るかもしれない。まあ、悩むほどのことでもないけれど。

「もちろん。奈瀬が一緒なら森川も安心だよ」あっさりとお許しがでた。さすがに反対する者はいなかった。それよりも、早く生まれ、という思いのほうが強いようだ。

肝試し組の僕は飛ばされ、まずは幸村の前に籤の入った籠が回された。幸村は初詣で御神籤を選ぶように、慎重に一枚つかみ出した。四つ折になっていた小さな紙切れを開くと、声に出して読み始める。みんなの話し声がびたりとやんだ。

「えつと……、『キャンプのメンバーから抱きたい女と抱かれない男をそれぞれ述べよ』だつて」

「あ、それ、俺だ」ひよいと手を挙げたのは仲本。厳選した内容が、これか。一応、男にあたって女にあたってても有効になるように書かれているが。

「抱きたい女でいいの？」多分同じことを考えたであろう幸村が確認する。

「それじゃつまらん。両方言えよ」昼間パシリに使われた腹いせか、仲本も容赦しない。

「じゃあ、抱きたい男と抱かれない女でいい？」じゃあつて幸村、そんな簡単そうに。

仲本の代わりに、いいよ、いいよ、と外野から声援が飛び交う。期待と好奇心が声に滲んでいる。

「発表しまーす。抱きたい男は仲本晴吾くん。こいつを一回、めっちゃくちやに泣かせてやりたいね、俺は」

きゃあ、という黄色い声上がる。一部の女子の琴線に触れたようだ。しかし幸村、昼間の照れ隠しだということはわかるけど、ずいぶんと思いついたものだ。

「次、抱かれない女はー？」ひゅーひゅーと煽りながら、今回飛び入り参加の沢北が合いの手を入れた。

「抱かれない女はねえ、フィンランドの妖精こと森川奈菜ちゃん！今日のカレー作りで惚れたよ、俺は。本気でかっけえんだもん」と、これまた予想外の人物を挙げていた。

悪びれず、照れず、きつぱりと言い放つ幸村に、冷やかしの代わりに拍手が沸き起こる。これだけ堂々と宣言されたら、拍手のしがいもあるというものだ。幸村はしごく満足そうに満場の拍手を浴びて、ついでに仲本からは「責任とって嫁にしてよねえ」という恨みがましい一言ももらっていた。

拍手が鳴り止み、オードブルが終わった後は肅々とメインディッシュへ移る。夏木の前に恭しく差し出される籠。伸ばされる手。その指先がてらりと光っていた。マニキュアだ。昼間は気づかなかつた。多分、風呂からあがつて塗ったのだろう。

「ああ、これ？ みんなが塗ってくれた」何人かが気づいて手を凝視していたらしい。夏木は甲を上にして差し出した手を火にかざす。驚いたことに、十本の爪すべてに違う色のネイルエナメルが塗られていた。「足もだよね」女子のひとりが言った。

間違いなく、全員の視線が夏木の足元に集中した。夏木はスニーカーを履いているので確認できなかったが、色とりどりに塗り分けられた足の爪を想像するるときどきした。

「ほんとに？ 見せて？」

一瞬、誰の声だかわからなかった。いや、こんなことが言えるのはひとりしかいない。しかも隣から聴こえた。わかっているのにとどきりとした。心、読まれたのか？ と焦った男は僕ひとりじゃない

はずだ。

「後だね。幸村もペディキュアされてみたい？」リーダーの鮮やかな切り返しに、幸村はぶんぶんと首を横に振っていた。地雷を踏んだことには気づいていないらしい。

うすく笑った夏木は衆目の中、籠から一枚の紙を取り出す。利き手だけで手品のように器用に開き、黙読する。その表情は変わらない。外野のほう緊張感で破裂しそうになっていると、夏木は「ああ」と何でもないことのように籤の内容を声に出して読み出した。

「『汝の隣人を愛せよ。ポツキーゲーム完遂でお願いします』だってさ」

緊張感をはらんだ沈黙に数秒支配される。直後に上がった黄色い悲鳴、歓声、野次、嬌声、溜息、吐息、それらが一斉に奏でた不協和音といったらなかつた。みんな、欲望には忠実だ。

籤の中身はありがちでも引いた相手が大物だつた。隣人、の言葉に従いリーダーの両隣を確認する。右が幸村で左が姫さんだ。さて、王子様に選ばれるのはどちらだろう。

「誰かポツキー持つてる？」当のリーダーはひとり淡々と駒をすずめてゆく。こういうゲームにあまり抵抗がないのだろうか。

「はい、わたし持つてる」

一番最初に挙手した女の子から菓子箱を受け取って、ありがとうと礼を言う姿は余裕そのものだ。ぴりぴりと紙のパッケージが破られ、透明な小袋が開けられてゆくの、みんなが身を乗り出さんばかりに見つめている。「ああ、そうか」熱い視線に促されて夏木が顔を上げた。

リーダーはまず、右隣の幸村を見た。幸村もポツキーを見ていたひとりだ。でも彼の場合は、純粹にポツキーが食べたいだけだつたりするから油断ならない。食べ物なら甘いも辛いもなんでも来いという男なのだ。細い体のどこにそれだけ収まるのか。四次元ポケットでもついているのかその腹は、と呆れて聞いたら応えて曰く、ただ燃費が悪いのだそうだ。

「あ、悪い。俺、付き合っている奴いるからこういうのはパス」チヨコレートの甘い誘惑からぎぎぎ、と幸村は目をそらせる。

「ああ、そうなんだ」リーダーは無理強いしなかつたけれど、わずかに表情が曇った気がした。落胆？ まさか。

外野からは、わたしが、わたしが、という気合の入った立候補者

が殺到している。選ばれるのはひとり。女子だって真剣勝負だ。どんな理由やシチュエーションであれ、リーダーとキス出来るかもしれないのだ。こんなチャンスは、たぶんもう二度とない。

夏木は相手を決めかねるように、ぐるりと輪を見渡した。そして最後に、彼女は自分の左隣を見た。九条璃桜も夏木を見ていた。

「あつ、またりおばっかりずるーい」

「一度くらい譲りなさいよ」

「りおはいつも夏木くんと一緒じゃないのお」

ふたりの目が合ったことを察して悲鳴が上がる。今までも何度も何度も繰り返されてきた光景だ。いつもなら矛先が姫に向かえばすぐに夏木がフォローに入っていた。女子のご機嫌をとりながらも、最終的には九条のわがままを通してきた。しかし今回、夏木はなぜか何も言わない。

「わたしが隣ですもの。当然、わたしが相手になるべきでしょう。そもそも、これは罰ゲームですから負けたチームがしなくちゃ意味がないわ」姫も複数のライバル相手に一歩も引かない。

だんだん、罰ゲームというより単なるリーダーの取り合いになってきた。女同士にらみ合い、あわや一触即発かと思われたとき、「誰だつていいよ」

全員の視線が声の主へ集まった。手の中でポツキの空き箱をくしゃりと握りつぶし、夏木が立ち上がる。どこか諦めたような、ぶつきらぼうな声だった。キャンプファイヤの炎が端整な横顔を赤く染めている。面食らう女子を尻目に、夏木は緩慢な仕草で手を差し伸べた。当然のように姫さんがその手を取り、そのまま軽く引かれて立ち上がった。「君がそれでいいなら」

「さっちゃん？」

他の女の子達は何も言えずに黙り込むしかなかった。正直、ちょっと意外だった。こんなやり方はリーダーらしくない。彼女なら、角を立てずもつとスマートなやり方で九条を選ぶことが出来たはずだ。そう思ったのは僕だけじゃないらしく、幸村も腑に落ちないと

いう顔でふたりを見ていた。

「さっちゃん、あの、わたし」

「単なるゲームだよ、璃桜」

戸惑いを隠せずにいる姫さんを遮って、夏木はあくまでも淡々と言い切る。どこか苛立ったような声に、九条が目を見開く。もしかして、夏木にこんな物言いをされたのは初めてなんじゃないだろうか。唇を噛んで俯いてしまった姫を見せられて、今度は男達が黙っていたなかった。

「リーダー、何もそんな言い方することないだろ」

「そうだよ、姫が可哀相じゃん。嫌なら俺が代わってやるよ」

ブーイングが飛び交い、キャンプファイヤを囲んでしばし騒然となる。どうなっちゃんだろうと成り行きを見守っていると、「はいはいはい、みんなそこまで」パンパンと手を叩きながら仲本が立ち上がった。「ゲームに本気になってどうすんのよ。リーダーも、らしくないぜ、ちゃっちゃんと終わらせてくれなくちゃ。まだ後ろがつつかえてんだからさあ。もしかして引き伸ばし工作？ 引っかかるらないよお、ちゃあんと全員罰ゲーム完遂してもらうからね、さ、しっかり俺たち勝者を愉しませてよお。頼みますよ、敗者諸君」思わず聞き惚れそうな美声と、気が抜けるようなへらりとした笑顔が場の空気を和ませる。仲本はその笑顔のまま、促すように夏木を見た。

「璃桜、顔をあげて」ややあつて、夏木が口調を改めた。

姫さんは恐る恐る顔を上げ、「ごめんね、ごめんなさい、さっちゃん」わけがわからないなりに、怒られたと思ったのか素直に謝っていた。涙声で何度もごめんなさいと繰り返す九条の前に、ようやく夏木も雰囲気をやわらげた。うるんだ目を夏木が親指でぬぐうと、「見せつけんなー」「痴話喧嘩かよ！」「夏木くんのばかぁ」というしごくもつともな野次が飛んだ。

予想外のハプニングがあったものの、いよいよふたりがチョコ菓子の端と端をくわえる。外野はこの時点で臨界点を突破していた。見

ていられない、と言いなから目をそらせないというか、ここまできたらいつそ恐いもの見たさというか。「途中で失敗したら?」「やりなおし」ほとんどやぶれかぶれで誰かが叫んだ。

チヨコレートはすこしずつだが確実に短くなってゆく。最初の一本は、あと一口というところでぽきりと折れた。安堵と落胆が入り混じった複雑な溜息がこここで漏れる。

二度目の挑戦。もう誰も何もしゃべらなかつた。キャンプファイヤの炎がゆらゆらとふたりの陰を描いていた。それがいつしか重なり、シルエツトがひとつに溶け合つた。最後の一口を食べ終える瞬間、姫さんの手がするりと夏木の首の後ろに回つた。

「ん……」

抑えた喉声がどちらのものだったのかはわからない。リーダーの手はごく自然に九条の腰を引き寄せていた。倒錯的なはずの光景はあまりにもナチュラルで、僕は逆にはらはらした。なんとなく、これが初めてじゃないんだろつなあ、と気づかなくていいところに気づいてしまう自分が嫌だ。

リーダーが姫さんのことをそういう意味で好きかどうかは微妙なラインだが、すくなくともキスに抵抗はないようだった。だったら最初の素振りは何だ? あれも演出の一部だったらどうしよう、外野を焦らして愉しいか? そんな不毛な考えに囚われているうちに、案外あつさりとふたりは離れた。

「次」

夏木の声に誰も反応しなかつた。それよりも、濡れた唇をぺろつと舐める仕草に目を奪われる。キスそのものよりも生々しい。完全にあてられた外野よりも一足先に自分のペースを取り戻したのか、九条は自分で籠を取ってきた。幸村と同じトウルースの籠だ。

「した? 今ちゃんとした?」

「うそ、影になつて見えなかつた」

見たいのか見たくないのか。嬉しいのか悲しいのか。いまいち反応しきれない外野を置き去りにしてゲームは進む。リーダーは

何事もなかったかのような涼しい顔ですでに着席していた。九条も籤を引き終わり、手にした紙切れを開いている。

「何て書いてある？」幸村が覗き込む。

「『今すぐ好きな人に電話でおやすみなさいのラヴコール』最後にハートマーク付きです」

「それってデアじゃないの？」幸村が夏木を振り返る。

「はつきり定義してなかったね、そう言えば。セーフだと思っけど、引きなおす？ 璃桜」夏木はそう言ったが、九条は首を横に振った。「このままで」

そばにあつたポーチから携帯電話を取り出す。そのまま短縮ボタンでも押しそうな姫の勢いに、そこで待ったがかかった。

「携帯、部屋に置いてきた」

「俺も」

「俺もです」

「取りに行ってもいい？」

「やっべえ、俺、バッテリ切れてるよ！」

何人もの男が慌てて立ち上がる。「夢みすぎ、夢みすぎ」仲本が意地悪く揶揄する。そういう彼も、片手にはっちり携帯電話を握り締めてスタンバイしている。いつでも着信オーケーという状態だ。

「男子ってアホよね」

「男って夢みる乙女なんだよねえ」

「取りに行くだけ無駄だと思うなあ」

こちらは手厳しい。たしかにその通りだとは思うが、夏木の時に見せた自分達の狂態は完全に棚上げだ。しかし、すっかり現実感を取り戻している女性陣の冷やかなコメントも、浮き足立つ男達の耳には届かなかつた。結局、彼らの強硬な主張が通り、ゲームは十分後に再開されることになった。

「この時間に電話しても相手の人平気？」

「平気よ。ありがとう、幸村くん」

時刻は午後十時をわずかにまわっていた。いつもは夏木が気を利

かせる場面だが、今夜の彼女は何も言わなかった。

やがて全員が揃うと、姫は二つ折りにしていた携帯電話を開いた。短縮ダイヤルではなく、十一桁のナンバをひとつひとつプッシュする。番号は記憶しているようだ。

全員が固唾を呑んで見守った。今ここで、誰かの携帯電話が鳴り出すかもしれないのだ。自分の電話を握り締めつつ、互いの様子を伺う。しばらくコールが続く。誰も一言も発しない。墨になった薪が音をたてて炎に飲み込まれた。

「……駄目ね、出てもらえないみたい」

やがて、姫さんはそつと詰めていた息を吐き出して、携帯電話を耳から離れた。見ているだけの僕たちですら、緊張で呼吸を忘れそうになっていた。結局誰の携帯電話も鳴らず、誰も電話をとらなかつたが、僕たちの間にはある種の奇妙な連帯感が生まれつつあった。「ね、もう一度試してみなよ」

「ほら、留守電もあるし。もし俺だったら、後で留守電に気づいてめちやくちゃ幸せになるよ」

「そつだよ、りお。ガツンと言ってやりな」

いつのまにか、みんな祈るような気持ちで成り行きを見守っていた。女の子が胸の前で両手を組んで囁く。「がんばれ、りお」

姫さんは手の中の携帯電話を見つめていた。もう一度通話ボタンを押し、そつと耳に押し当てた。コールが始まった。五秒、十秒、まだ電話は繋がらない。そろそろ留守番電話に切り替わる、そう覚悟したとき、

「電話、鳴ってるぜ、さつきから」

幸村が前を向いたまま呟いた。たぶん、聴こえていたのは彼の隣に座る僕と夏木くらいだったろう。それくらい、抑えた音量だった。「出てやんねえの？」

さらに音が絞られた。聞き取ろうと耳を濟ませたとき、ほんのわずかだが虫の羽音のような振動音が聴こえた。ヴァイブレーションに設定された携帯電話が、すぐ近くで震えている。

夏木が何か答えたようだ。ここまで声は届かない。幸村がゆっく
りと首を横に振った。
「なんだ、結局、みんな片想いか」

舗装路をはずれ、ウォーキングルートの分岐点で石段へと進み、急勾配を登りきった先に社はあった。

「けっこう立派だね。もつとちいさいかと思ってたけど」僕は振り返り、最後の石段を登りきった森川奈菜に声をかける。「……大丈夫？」

「だい、じょう、ぶ」肩で息をしながら森川が応える。

「ごめん、ペース速かった？」

「ううん。だいじょう、ぶだよ。奈瀬くん、ゆっくり歩いてくれたの、知ってる、よ」

息を整え、社の両端を守る小ぶりの狛犬に挨拶をしてから、森川は石畳の先へと進んだ。灯りと呼べるものは互いの手にある懐中電灯きりしかないので、足元を注意深く照らしながら歩いた。目がないるまでは本物の漆黒に見えた闇も、今は薄ぼんやりと物の輪郭を浮かび上がらせる。僕はたぶん、夜目がきく方なのだと思う。もともと悪路にも夜道にも抵抗がないので、この肝試しも大して苦にはならなかった。でも、慣れない森川にはストレスだったろう。

ようやく本殿までたどり着き、賽銭を投げるとふたりで拍手を打った。せつかくなので、もちろん心の中で願い事もしておく。

本音はともかく建前上は受験生なので、セオリー通りの合格祈願だ。祈り終わって目を開けて横を見る。森川はまだ祈っていた。ずいぶん熱心だ。

「ここ、縁結びの神さま、なんだって」

そう言えば、リーダーがそんなことを言っていたような。森川は祈り終わって僕を振り向いた。「奈瀬くんも、お願い事した？」

「したよ。でも、恋愛成就とかじゃないけど」

「そつか。わたしは、ばつちりお願いしちゃったよ。届くかなあ。届くと、いいなあ」

「森川も、好きな奴いるんだ」

「……うん」

僕たちはゆつくりと元きた道を戻り始めた。下りは足を踏み外すと危険なので、往きよりも慎重に歩く。古い石段は、まれに石が浮いてぐらつく。懐中電灯で照らしながら、一步一步確かめるようにして歩いた。

森川は大人しく僕の後ろをついてくる。いや、普段から大人しい女の子なのだけど、今日の昼間は大活躍していたから、静かになられるとちよつとだけ気になった。

「疲れてない？ 昼間、大変だったから」

「お昼？ ああ、カレー。えっと、バーベキュー、シエラスコ、だったっけ」

「そうそう」

「あれ、美味しいね。奈瀬くん、料理上手だね。リオちゃんも褒めてた、よ」

「あんなの、切った野菜と肉に味つけて焼いただけだよ。ていうか、九条が壊滅的に出来なさ過ぎるんだ。九条、最後になんて言ったと思う？ さつちゃんはピラーで林檎の皮を剥くけど、わたしはピラーでも剥けないわ、だって。一体何の陰謀かと思うよな」僕は言いながら吹き出して、森川もつられた。ふたりしてけらけら笑いながら石の階段を下る。「ああ、でも」と僕は続ける。

「九条にも驚かされたけど、森川にも驚いたよ、俺。リーダー役、ばつちりこなしてたじゃない」

「それは」

「幸村も言ってたけど、あれは格好よかったな。森川の好きな人で、今日のキャンプに来てるの？ 来てたら絶対見直してるよ」

「そう、かな」

「森川は告白とか、しないの？ このキャンプで両思いとか狙って

る奴多そうだよな。ああでも、男はみんな振られてるのか」

「リオ、ちゃん？」

「うん」

「すごいよね、リオちゃん。罰ゲームだったけど、リオちゃん真剣だった。相手の人と、上手く、いくといいのにな」

僕もそう思うよ、森川。

「奈瀬、くん。あの、……さっきの、こと、だけど」
「ん？」

ちょうど石段を下りきったところで森川が立ち止まったので、僕も止まって振り向いた。ここまで来ると、月明かりでけっこう明るい。もう少し歩けばウォーキングのルートに戻り、そこからはみんなの待っているキャンプ場まで目と鼻の先だ。

「しても、いいかな」

「何を？」

「……告白」

誰に、と聞き返すことは出来なかった。「奈瀬、くんに」

先に、言われてしまったから。

「え……」と「聞き間違いでも冗談でもなく、森川はまっすぐに僕を見た。

「聞いて、欲しいです」

「……はい」それ以外の答えなんてなかった。

薄ぼんやりとした灯りの下。月が明るい晩。真夏の夜の幻のように、現実感のない時間が流れた。

「体育祭のこと、覚えている？ 奈瀬くんが、わたしを助けてくれた時のこと」

「体育祭？」正直、覚えがない。体育祭は二ヶ月ほど前の話だ。

「覚えて、ないか」くすりと森川は笑う。僕は「ごめん」と謝った。

「ううん、いいの。奈瀬くんにとっては大したことじゃない、と思う。あのね、男女混合リレーがあったでしょう。わたし、じゃんけんで負けて、女子の代表に選ばれちゃって。わたし以外はみんな足

の速い子ばかりが出てたやつ。ほら、リーダーが最後に三人抜きして、二位になったでしょ、わたしたち」

「ああ、そう言えば」思い出した。

男女混合リレーは、普通なら陸上部や球技系の短距離に自信がある生徒が立候補する競技だ。うちのクラスは女子の代表がどうしてもひとり足りなくて、最後はじゃんけんで決めたのだ。リレーは配点が高い種目だから、どのチームもタイム優先で代表を決めてくる。僕たちのクラスも、森川以外の選手は立候補で決まっていた。

「わたしが、バトンもらった時は、一番だったのに。わたし、五人も、抜かれちゃって。足、すごく遅くて。幸村くんはバトン渡した後、恥ずかしくて申し訳なくて、しばらくそこから動けなかった」

そうだ、思い出した。でもあれは仕方がなかった。他のチームは全員を陸上部でそろえてきているところもあって、森川でなくてもトップを守るのは難しかっただろう。

「奈瀬くん、そう言ってくれた、あの時も。大丈夫、誰も森川のと責めたりしないよって。リーダーと幸村くんが、絶対に挽回してくれるから信じて待ってよう、って。だからわたし、みんなの待っている応援ベンチに、戻れたの。奈瀬くんが手を引っ張って立たせてくれて、わたしと一緒に帰ってくれたから。幸村くんも夏木くんも、すごく速くて、みんな一生懸命応援していて。わたしのせいで一番になれなかったけど、みんな、よくがんばった、って慰めてくれて、わたし、泣いちゃった」

そう、あの体育祭で僕たちは優勝こそできなかったものの、ベストチームワーク賞なんてものを獲っていた。

森川は一生懸命走っていた。それは誰の目から見ても明らかだった。だからみんな、労って慰めて褒めて応援した。当然だ。誰も森川を責めやしない。僕はたまたま、彼女が崩れる瞬間を見てしまったから、みんなの待つベンチに連れて帰ってきた。ただ、それだけだ。

「すごく、嬉しかった。ずっと、ありがとって言いたかった。手

を引つ張つてくれていたから、わたし、恥ずかしくて顔も上げられなくて、言えなかった。ごめんなさい。奈瀬くん、あの時はありがとう」

「森川……いいよ、そんな、改まって。俺が行かなかつたら、きつと他の奴が助け起こしてたよ」

「そう、だね。そう、かもしれない。でも、あのとき、わたしの顔を上げさせてくれたのは奈瀬くんだった。他の誰でもなく、奈瀬くんだったんだよ」

森川、と僕は彼女の名前を呼んだ。でも、続く言葉は出てこなかった。

「奈瀬くんが好きです。もしよかつたら、わたしと、お付き合いしてもらえませんか」

口紅が。

ピンクのグロス。普段はしないお化粧。

心の準備、と言った九条と夏木。

ざわつといろいろなものが一気に押し寄せてきて、

「ごめん、俺は」

混乱している。

無責任なことを言って、森川に話させたのが自分だから？

森川とは付き合えないから？

他に好きなやつがいるから？

三鷹が、好きだから？

「森川とは、これからもいい友達でいたい」

「……うん、わかった」

森川はあっさりとうなずいた。まるで、僕の自分勝手な答えを予想していたかのように。

「奈瀬くん、好きなひと、いるの、しってた、から」

「なんで、」

「わかるよう。だって、好きな人のことは、見ちゃうもん。わたし、クラスでもいっつも奈瀬くん、見てた、から。奈瀬くんも、見てた、

よね、あの人のこと。だから、しってる。……しってたけど、言いたかった。それだけ」

「……ごめん」

「いいの、いいんだよ。謝らないで。お礼、言いたかったのは本当、だし。言えて、よかったし。……奈瀬くん、は、告白しないの？」

「俺は、」出来るわけがない。

「奈瀬くん、想っているだけじゃ、気持ちは伝わらないよ。言葉にしないで、伝わらないんだ、よ。後から振り返って後悔しても、遅いんだから」

「相手、困らせるだけだから」苦い気持ちがこみ上げてくる。今更、何も言えない。

「どうして？ そんなの、やってみなくちゃわからな」「友達の彼女、だから」「……そ、つかあ。ごめんなさい」

「いいよ」僕は森川をうながして、再び歩き出した。スニーカーのラバーソールが砂を噛む。

二人分の足音を聴きながら歩いていると、「……みんな、片思いなんだねえ」ぽつりと森川が呟いた。

「あの姫さんでさえ、片思いだもんね」

「気持ち、伝わるといいね。あ、そうだ。わたし、もうひとつ、奈瀬くんに話しておきたいことがある」

「なあに」もう、何がきても驚かないつもりだった。

「あのね、怒らないで、聞いて、ね」

「ん？ うん」何だろう。

「昼間のあれ、ね。わざと、なの」

「あれ、って」

「カレー作り。わざと……負けたの。最初から、負けるつもりで仕組んだこと、なの」

「……どうして」

「奈瀬くん、罰ゲーム、参加してもらったため……。夏木くんも、」

リオちゃんも、わたしのために協力してくれてた、の。計画の段階からずっと一緒に考えてくれて、わざとらしくならないようにイニシアチブ・ゲームと罰ゲームっていう二段構えにしておいて、罰ゲームも、二重に用意した。先に奈瀬くんを選んでもらって、その答えを聞いてからわたしが選べる席順になっていた、でしょ。奈瀬くんがトウルースかデアを選んでいたら、奈瀬くんの好きな人がわかるような籤を、肝試しを選んだらこうやって告白、できる機会を、用意してくれていた。わたし、は、奈瀬くんが好きなのがいることは知っていたから、トウルース・オア・デアでも、告白するつもりだった、よ。他にもいっぱい、仕掛けがあつて……ごめんなさい。奈瀬くんも、幸村くんも、がんばってくれたのに。本当に、ごめんなさいっ」

「ちよ……つと、待って。じゃあ、あの時の姫さんも？」

「リオちゃんは、お料理上手だよ。リオちゃんだけじゃなくて、夏木くんも、本当はもつと上手くネゴシエート出来たんだ、よ」

「マジかよ」あれが演技？ 九条の新しい才能を見た気がした。

「ああでも、夏木のあれは、確かに今考えると変だ」そうか。昼間の違和感の正体がわかった。夏木はアイスを口実にわらわらと寄ってくる女子をそれは見事に捌いていた。あれくらい、夏木なら慣れつつこのはずだ。

「うん。ふたりとも、演技」

「……化けモンだな」くしゃくしゃつと前髪をかき上げ、天を仰ぐ。まったく、うちのリーダーと姫さんは、手を抜くということを知らない。

「ふたりは、悪くない、んだよ」

「別に森川だつて悪くないよ。怒ってないし、俺」

「本当？」

「怒りたい？」

森川はふるふるつと首を横に振った。

キャンプ場で僕らの帰りを待つていてくれたクラスメイトと合流し、ペンションに戻ってきた頃には日付が変わっていた。僕と森川は散々遅い遅いと文句を言われ、何があったの、と痛い腹をさぐられた拳句、好き勝手に空白の三十分を捏造されてからかわれた。

「だって気になるじゃんかあ。待つて言つてもせいぜい三十分くらいだと思つてたのに、倍も時間かけてナニしてたのかなあつて」

部屋に着いたら着いたで、あながち関係がなくもない友人が食い下がつてくる。この男に悪気がないのは百も承知だが、深く追求されても困るので、僕はさつさと自分のベッドにもぐりこんだ。

「なあ、告白でもされた？」

「さあね、おやすみ」

「ケチー」なんとでも。

「電気消すよ」

「あ、せっかくだからプラネタリウムにしようぜ。なんか外で寝てるみたいじゃん」

「別にいいけど……そういうえば仲本は？」

「さあ？ 他の部屋の奴らと一緒になんじゃねえ？」

もしかしたら朝まで遊んでいるつもりなのかもしれない。待つていても仕方がないので、もう寝てしまおう、と僕は目を閉じる。隣では幸村が寝返りを打つ気配がする。

どれくらいそうしていただろうか。疲れているはずなのに、興奮しているせいかなかなか寝付けなかった。うつすら目を開けると、天井ではちらちらと星が瞬いている。しばらくぼうつと眺めていると、ひとつ、星が流れた。長い尾を引きながらあつという間に消えてゆく。

「あ、流れ星。……奈瀬、まだ起きてる？」

「起きてるよ」

「みんな、もう寝たかな」

「どうだろう」

「ここ、やっぱりすごいよな。他の部屋も見たけど、俺この部屋が一番スキ」

「幸村、モダンアートの部屋も気に入ってたじゃん。地震がこなかつたら仲本と矢野の部屋でもいいけど俺は」

「ああ、あそこも面白いよな。よくわかんないモンがいっぱいあって。ピカソみたいな面とか……何に使うんだろ。晴吾ンとはなあ、本棚倒れてきたら死んじゃうよな。でも、井上は喜ぶかも。あいつ本好きだよ、昼休みはいつつも文庫本読んでる。だから矢野もあの部屋選んだのかなあ」

「さあな」

よく知っているな、と思った。僕は井上が本好きだなんて知らなかった。大体幸村は、昼休みは教室で寝ているから外でサッカーしているか体育館でバレーしているくせに、いつ見ているんだ。

「なあ、奈瀬」

「……何」ああ、駄目だ。目が冴えている。まだしばらく眠れそうになかった。

「今日の昼間、加藤としゃべったんだろ？ 進路、決まった？」

「……いや」

「お前なあ、そろそろ本気になれよ。……ちつ、この前おばさんに聞かれたぜ。何やってんだよ。お前頭いいんだから勿体ねえよ、推薦、受けるよ」スプリングをきしませて、幸村が上半身を起こした。

「十花が？ 幸村に？」

ぞわ、とした。

黒くてじめじめした汚い何かが背中にべつとりと張り付いたような感覚。これは、嫌悪だろうか。

俺に直接聞かずに俺の友達に聞いた？

なんだ、結局、気になっていたんじゃないか。

「そうだよ。お前、ひとりで考え込むのも立派だけどき、もうちよつと周りも信用したらどうなんだ。おばさんが気にするの、当然だろうが」苛ついた声。

「幸村、つてさ」

予想していたよりも、ずっと酷い声がでた。「そんなこと言うやつだったっけ？」

ぎしり、とスプリングが悲鳴を上げたかと思うと、次の瞬間、幸村は僕の胸倉を掴んでいた。引きずり起こされる前に、自分で上体を起こす。

「お前が何にも言わないからだろう！俺は言うぜ、お前のことが心配だから！おばさんだって、母親なんだぞ？息子の進路が気にならないはずないだろうが。俺はお前ほど、他人に無関心にはなれねえよ。今までだって言いたくなかったわけじゃねえ、お前が、言わせなかっただけだろうが！」

幸村は僕を突き飛ばすようにして手を離れた。その拍子にベッドのヘッドに背中がぶつかり、僕は舌打ちした。

「今まで、我慢してたって？」

「ああ、そうだよ」

「何のために？俺のために？俺がそういうの、嫌がるって知ってたから？言いたいことも言えずに黙ってたって？だったら今更、口出ししないでくれ」

「ひとりで決めるってか。茜みたいに？お前には無理だよ奈瀬。

茜には出来ても、お前にゃ出来ない。現にこうして、ぐだぐだに行き詰ってる」

「……だったら、どうだって言うんだ。俺が勝手にひとりで抱え込んで、自滅するだけだろう。お前はもう決めたんだろう。だから余裕でお節介か？」

「お前が、自棄になんねえように！そういうこと言い出さねえようにだ！お節介だろうが何だろうが、俺はお前の友達だから言う

ぜ。お前が嫌がってもうざがってもだ」

「幸村」

「あと一回でも、アホなこと聞いてきたら本気で殴るかな」

幸村は、じり、と後ろへ下がり、自分のベッドに腰を降ろした。僕も幸村と向かい合う形でベッドに座った。床に触れた裸足の足の裏がひんやりとした。思い切り掴まれた襟元がくしゃくしゃになっている。直す気にもならなかった。

「それで、言いたいことはもう終わり？」

「次は俺じゃなくて、お前の番だろうが、奈瀬」

まっすぐに、挑むような真剣さで幸村が僕を見据える。

僕は言つべき言葉も定まらないまま口を開きかけ、そのまま唇を噛む。

「そんな、困らせないでよ」結局、出てきたのは曖昧な拒絶と苦笑い。

「奈瀬」苛立ちを隠そうともせず、幸村が低く呻く。
もう勘弁しろよ、と思った。

どうして俺の進路のことでお前に責められなくちゃならない。

言いたいことなんて。

言つたところで、何になる。

それすら、言葉にしなければ伝わらないというのだろうか。

激昂した幸村とこれ以上向き合っていたくない。

冗談にして、終わらせてしまいたい。

それが出来ないなら逃げ出したい。

「なあ、奈瀬。お前、一度でいいから本気になったこと、あるか」

幸村の目は、暗闇の中でそこだけきらきらしていた。一等星のようだ、と僕は場違いなことを考えた。こんなに怒り狂った親友を見るのは、あの事件以来のことだった。

「本気になったことがあるかって聞いてるんだ。死ぬ気で努力したことは？ やつてもやつても越えられない壁に絶望したことは？ なんて俺じゃ駄目なんだって、夜中に飛び起きて泣いたことは？

……無いだろう、お前」

じりじりと、視線に焼かれる。幸村は僕に掴みかかりたい衝動を必死で抑え込むみたいに、自分の拳をぎゅっと握りこんでいた。

「無い、よ」喉がからからに乾いていた。「幸村、じゃあお前が教えてよ」

どうすればよかったのか。そもそも僕には、何を誰にどう相談していいのかさえわからない。僕がいつも考えるのは、ただ、こんなとき、三鷹ならどうするか。それだけだ。

「奈瀬、しっかりしてくれよ。頼むから、投げやりなことばっか、言うなよ」

変なやつ。どうして幸村が泣きそうな顔をしているのだろう。泣きたいのは、僕のほうだ。

「さっきお前、『越えられない壁』って言っただろう。もしも、その壁がない人間がいたらどうする？ それも、自分のすぐそばに」

「え？」

「三鷹茜」

その名前を口にするだけで、僕の中に冷静さが帰ってくる。ほとんど自己暗示のようなものだ。

「三鷹には壁がない。あいつに出来ないことなんか無い。そういう人間が昔から俺の一番近くにいたんだ。これがどういうことか、わかる？ まわりの大人は、やれば出来る、努力すれば報われる、って言うだろう。でも現実には、必ずしも、そうじゃないよな。昼間のゲームじゃないけど、才能もチャンスも、平等に配分されていることなんてない。努力したって失敗するときは失敗する。ゲームに勝つのは三鷹のような人間だ。だって次元が違う。そういうのを見ると、本気でやろうとか死ぬ気で努力しようとか、そんな気にならない。三鷹は三鷹で、俺は俺だっただけ……三鷹がいれば、それでいいじゃん、て、思う。頭、おかしのかな、俺」

支離滅裂だ。今度こそ殴られるかな、と覚悟した。いっそ殴ればいいのに、とも思った。ずっと言いたいことを我慢させていたのな

ら、それくらいは好きにすればいいのに。

「お前の頭がおかしいかどうかなんて、俺にはわかんねえけど」幸村はゆるゆると首を横にふった。「努力して失敗した後は何が残るのか、努力したやつは知ってる。そいつが無駄じゃなかったって思えたら、本気になるのも、そんなに悪いことじゃないんだぜ」幸村はまるで、自分自身に言い聞かせるように続けた。

「奈瀬、お前昼間俺に言ったよな。仲本は俺の前で格好つけたかっただけだつて。お前は、茜の前で格好つけたがってるだけじゃねえのか？ それなら俺にもわかるよ。普通だもん。女の前で男が格好つけたがるのは普通だよ。それが好きな女なら、なおさら」

「ちよつと、待てよ、幸村」

「るっさいな。認めるよ。いいか奈瀬、正直に答えろ」るっさい、てお前、巻き舌になつてる。

「茜が好きだろう」

「答えるよ、と繰り返す。」

人工の星の下でもわかる、大きな目がまっすぐに僕を見据える。

僕は観念した。

「ごめん、幸村。」

「ごめん、三鷹。」

「ああ、好きだよ」

すとんと、呼吸するよりも自然に、それは僕の中から出てきた。「いつから」

「たぶん、最初に会ったときから」

「それって十年以上前だろ？ お前、馬鹿だろ」

「ごめん」

「謝るな、バカ」

「幸村……、信じてもらえないかもしれないけど、お前と三鷹が付き合つて聞いたとき、俺はうれしかったよ。三鷹ってああいう性格だから孤立しがちだし、あいつはそれでいいみたいな態度とるけど、それってやっぱり寂しいだろ。だから、邪魔するつもりな

んでないんだ。三鷹と今更どうこうなりたいわけじゃない。俺はただ、今までどおり、三人で仲良くやれば、それで」

「奈瀬さあ、俺と茜が付き合うようになったきっかけ、って覚えてる？」幸村は僕の言葉を遮るように聞いた。

「覚えてるよ」戸惑いながら答える。「忘れるほど昔の話じゃないだろ」

幸村は、ベッドの上で膝をかかえていた。その様子は、なぜか途方に暮れた幼い子供のようだった。いじらしく、顔を上げてはいたが、その顔は泣いているようにも見えた。

「奈瀬。俺は茜が好きだけど、茜が好きなのは、俺じゃないんだ」

あれはゴールデンウィーク直前。ようやく、三年のクラスに馴染んできたばかりの頃だった。

連休を前に浮き足立つクラスメイトは、部活と受験の合間を縫って最後の高校生活を満喫しようとしてスケジュール調整に余念が無い。おぼろげながら全員の顔と名前が一致してくると、クラス全体のカラーも見えてくる。僕のクラスはどうやらアクの強い面子が揃ったようだ。入学当時から注目を集めていた夏木咲也と九条璃桜を別格とすれば、次に目立っていたのは身長差二十センチの凸凹コンビ。長身の男子生徒は、制服をさらりと着崩した軟派な外見もさることながら、もつぱら、声楽でもやればいいのにとと思うほどの美声で騒がれていた。もうひとりにはテンションが通常の一・五倍、特盛り牛丼くらいある躁病気味の小柄な男。まだ少年と呼んだほうがしっくりくるような、めまぐるしく表情を変える大きな目が印象的な男子生徒だった。ふたりはいつも何かしら企んでいて、トラブルメーカーのムードメーカーという厄介で賑やかな存在だった。

彼らとは特に親しいわけでもなく、すれ違えば、お前を知っているぜと視線で肯き合う程度の付き合いだ。彼らを含め、僕はあえて積極的に新しい友人を開拓することはなかった。同じクラスに、僕の幼馴染がいたからだ。彼女は人間関係に淡白で、僕も彼女ほどではないにしろ、自分ひとりで世界が完結するタイプの人間だった。僕は特に必要性を感じない、という理由から気心のしれた幼馴染と一緒にいることが多かった。周りは僕と彼女の仲を誤解したようだが、それも慣れっこになつていたので特に訂正する必要もない。むしろ、気を利かせてくれた分、苦手なタイプから声をかけられる機会が減り、対人ストレスは少なくなった。

ふたり、もしくはひとりで過ごす毎日が、ゆるやかに日常へと変わりかけていた。その日も普段どおりに四時限目を終えると、僕は校舎の端にある購買に向かった。大体は十花が弁当を持たせてくれるが、週に一度か二度は弁当なしでパンの日だ。十花は、弁当をつくる時は必ず僕と三鷹のふたり分を用意する。三鷹は十花の弁当は食べるが、購買のパンは食べない。本人は平気だと言うが、僕は気になるし十花から頼まれているので、自分用の昼飯とは別にヨーグルトやフルーツゼリーを買ったりする。三鷹は特に文句も言わず、礼を言って受け取り口に運ぶが、それは彼女なりのサービス、つまり僕の昼食に付き合ってくれている、というほうが正しい。特にしゃべることもないので、食べ終われば僕は午後の宿題を片付け始める。昼休み中に終わるかどうかがぎりぎりの量なので、毎日がちょっとしたスリルだ。三鷹は通学用の鞆の中から薄っぺらい洋雑誌を取り出して、それをめくる。九割がた英語だが、ときどきドイツ語や中国語のときもある。もちろん、三鷹がこれは何語で内容はこうだ、なんて解説してくれるはずもないので僕の適当な推測だ。

しかしその日、僕が購買からビニル袋を提げて戻ってくると、教室に三鷹の姿はなかった。机の上には、ぺらりとした雑誌が一冊出しっぱなしになっている。今日はメジャーだった。『ネイチャー』誌だ。

しばらく待ってみたが帰ってくる気配がないので、僕は昼飯を食べ始めた。あつという間に食べ終わり、昼休みの残りが半分になっても三鷹は戻ってこなかった。いつものように午後の授業のノートと教科書を広げるが、目の前でぬるくなってゆくヨーグルトが気にならなくなって集中できない。もうすぐ予鈴が鳴る、という直前まで粘ってみたが結局ギブアップしてノートも教科書もしまった。

「奈瀬くん」と呼ばれて振り向くと、ふっくらした輪郭の女子が立っていた。

女の子が僕の視線に一瞬ひるみ、僕は慌てて笑顔をつくった。名前が思い出せないので名札を見た。森川だ。

「あの、三鷹、さん。まだ戻ってきてない、よね？」

「みたいだね」

「わたし、ちょっと、心配で。あの、違うクラスの男子がね、三鷹さん呼びに来て。あの、あんまりいい噂をきかない人、だったから。三鷹さん、冷静だったから大丈夫だと、思うんだけど、帰ってこなくて、心配で」

僕は最後まで聞かずに立ち上がった。僕の勢いにひるんだ彼女に「ありがとう」とだけ言っただけで教室を飛び出す。追いかけるようにして予鈴が鳴った。

探しに出たはいいが、場所がわからない。とりあえず、人通りの少ない場所から手当たりしだいに潰していくつもりだった。体育館裏と屋上、どちらの確率が高いかは微妙なラインだったが、最初は屋上と決めて階段を駆け上がる。二段飛ばしで最上階まで一気にのぼり、扉を開けて外に出てみると、そこには人っ子ひとりいなかった。当然だ、もう二分もすれば本鈴が鳴る。それでもしつこく辺りを見渡し、ぐるりと囲む緑のフェンスから下を覗き込むが、やはり誰の姿も見つけることはできなかった。五月の爽やかな風が吹いていたが、僕はじつとりと汗をかいていた。

あきらめて再び階段を駆け下りる。渡り廊下で足を止めたのは、間の悪い教師に呼び止められたからではなく、制服姿の三人が地べたに這いつくばっている姿が視界をかすめたからだ。そのうちのひとり髪が長い。三鷹だ、と思った瞬間、僕は窓から彼女の名前を叫び、彼女が顔を上げたのを見届けて再び廊下を全力疾走していた。上靴を履きかえる間も惜しんで外へ飛び出す。教室や職員室からは死角になるその場所は、三階の渡り廊下からだけ見ることが出来た。「三鷹！」

僕の声に三人が顔を上げた。さっきは動転していたせいか気がつかなかったが、残りふたりは同じクラスの凸凹コンビだった。

「奈瀬、そこでストップ」

ちっちゃい方が叫んだ。僕は思わず足を止めた。

「うん。それで足もと気をつけて。ゆっくり迂回してこっちに来いよ」

腑に落ちないながら、言われたとおりに大回りして僕は三鷹の背後まで近づいた。

「三鷹、大丈夫？ 何があったの？」

僕は三鷹の顔を見て驚いた。あの冷静な彼女が、蒼白になっていた。ありえない光景を目の当たりにしてうろたえかけた僕に、残りのひとりが声をかける。

「ほら、奈瀬も手伝って。茜ちゃんは大丈夫だよ、俺達は探し物を手伝ってるだけ」

バリトンの、びっくりするほどいい声だった。こんなときじゃなかったら、聞き惚れていただろう。

「探す、って何を」

代わりに僕は自分の足もとに目をやる。コンタクトでも落としかか、と思っただが三鷹はそもそも裸眼だ。ならばよほどちいさな物だろうか。

「ピアス」

ようやく、三鷹がそれだけ言った。

「ピアスって、……三鷹の？ ピアスなんてしてたっけ」

僕の的外れな質問には答えず、三鷹はゆらりと立ち上がった。

「三人はもう、戻ったほうがええよ。本鈴、鳴ったし」

そう言った三鷹の膝も手も、土で汚れていた。自分だけ残って探すつもりらしい。俺も残る、と口を開きかけると、「いや、四人で戻ろうぜ」と小柄な方がきっぱりと言った。「放課後もう一度探してやる。今度は見つかるまで探すから、四人で戻ろう」

ほんぽん、と汚れた膝をたく彼の横で、長身の男はどこから取り出したハンカチを三鷹に渡していた。「ピアスってフックタイプのだよな。次からキャッチつけときなよ。余ってるのあるから、後で俺のあげる」

彼女は大人しく差し出されたハンカチを受け取り、それで汚れた

手を拭いた。

四人揃って数学教師の嫌味と説教を食らい、宿題ができていなかった僕はさらにネチネチとやられたが、そんなことよりも僕はなぜ三鷹と凸凹コンビ 名前は仲本と幸村だった が昼休みを延長してまで三鷹のピアスを探し回るはめになったのかが気になってまったく集中できなかった。数学教師の僕への心象はこれ以上ないほど悪くなっただろうが、その甲斐もなく、結局事の顛末は仲本と幸村から聞かされた。

ふたりの話と僕の視点を繋ぎ合わせて、何が起こったのかを想像してみる。まず、男は三鷹がひとりになるタイミングを見計らい、彼女を人目のすくない場所まで連れ出した。三鷹がなぜその男の誘いに応じたのかはわからないが、それ以前にも何らかのアプローチを受けていた可能性はある。はっきりさせておこう、という心積もりだったのかもしれない。ともかく、男はまったく相手にされなかった。三鷹の冷静な態度と独特の視線は男の恨みを買うには十分だっただろう。可愛さ余って憎さ百倍。プライドを傷つけられた男は彼女のピアスに目をつけた。

たしかに僕の高校ではアクセサリの類は禁止されているし、ピアスなんてもつての他というのが建前だが、その男が風紀委員の仕事を肩代わりしてやるうなどという殊勝な理由でその行動に出たはずもない。単なる腹いせで三鷹のピアスに手を伸ばした。そこへたま、仲本と幸村のふたりが通りかかった。サッカーの帰り、四時限目の移動教室で忘れ物をした幸村とそれに付き合っただけの道を歩いた仲本は、本来は立ち入り禁止の芝生をつきつて体育館の裏に出た。彼らは初め、ふたりを見て単なる告白だと思ったようだ。告白には違いなかったのだろうが、しだいに雲行きが怪しくなり、事がピアスに及んだ時点で三鷹も普段の冷静さを欠いていたらしい。女子生徒が男を押しつけ嫌がるそぶりを見せたので、幸村と仲本も傍観しているわけにはいかなかった。その男はふたりを見ると慌てたように姿を消したが、ピアスは外れやすいフックタイプだったこ

とが災いしてどこかにいつてしまった。手入れの行き届かない場所、しかも草木がぐんぐん伸びる五月のこの時期、地面はびっしりと雑草で覆われていた。ためらいもせず土で手を汚しながらピアスを探し出した三鷹を放っておけず、ふたりが探し物に加わったところに僕が来た、というわけだ。

幸村と仲本は約束どおり放課後も探し物に協力してくれた。七時限目が終わった四時から開始し、五時で一度仲本が用事で抜けた後も探し続け、とうとう幸村が見つけた。

「あつた！」と叫んだ彼の手の平には、本当にちいさな赤い石がちよこんと載っていた。

「あれ、それって」僕は土をくつつけたままのピアスを覗き込む。見覚えのあるものだった。

「……ああ、無理を言つて、ゆずってもらった物やから」三鷹は大それずに幸村からピアスを受け取り、僕らに礼を言つてそれをハンカチに包んだ。

「もらいもの？」ばんばん、と手をはたきながら幸村が聞く。

「そう、彼のお母様から」

「あれ、ふたりつてそういう関係？」

「どういふ関係を想像してるのか知らないけど、俺たちは単なる幼馴染」

「ふうん。そつか。よかつたな、三鷹。ちゃんと見つかつて」幸村はこつちが嬉しくなるような笑顔でにかつと笑つた。

その後、しばらくしてふたりは付き合い始めた。ちょうど、ゴールデンウィークが終わった頃からだ。あの事件の幸せな副産物。僕も、今まであまりしゃべつたことがなかった仲本や、とりわけ幸村とは意気投合した。

幸村は、三鷹と付き合い始めてすぐ、例の男を探し出して話をつけたらしい。もちろん三鷹には内緒でだ。その時、男はやけに仲本を気にしていた、らしい。問い詰めると、仲本は二年の終わり頃からずいぶんと荒っぽい噂を立てていて、彼が絡んでいると知ってい

れば手を出すつもりなどなかったと言う。これに幸村が切れた。

知られて以来まともに口をきいてくれない、と仲本に泣きつかれ、なだめたりすかしたりあやしたり説得したりしているうちに幸村には懐かれた。

今思えば。

あの頃の仲本は、怪我で荒れていたのかもしれない。それをひた隠しにする彼に、幸村は怒っていたのかもしれない。

ともかく、三鷹の事件をきっかけに、僕らの距離は近づいた。

幼馴染ほどではないにしろ、僕は幸村のことをわかっているつもりでいたし、彼も僕をわかっていると思っていた。

その親友の言葉が、今は、理解できない。

「茜が好きなのは、俺じゃない」

幸村は、ゆっくりと繰り返した。じゃあ誰だよ、という問いが腹の底からせりあがってきたが、それは喉につかえたまま出てはこなかった。

「勘違いすんなよ、お前じゃねえから」

「……してないよ」なんとかそれだけ搾り出す。

幸村は肺の中の空気を全部吐き出すような深い溜息をついた。

「結局、みんな片想いってこと。俺もお前も、茜も。どうしてこんなに上手くいかねえんだろ。そりゃあ、俺も考えが甘かったと思うぜ。告白したら他に好きな人がいるってきっぱり断られたし。でも話聞いてたら、茜とその人がうまくいく可能性は低そうだし、それなら俺と付き合ってたって、言ったんだ。茜は最初駄目だの一点張りだったけど、それでも俺が諦めなかったから、もう、好みじゃないとか男としての興味はないとか子供っぽいのは嫌いだとかぶっちゃけその人以外はどうでもいいとか、めっちゃ言われたよ」

確かに酷い言われようだ。しかし幸村はあまり湿っぽい調子ではなく、案外さばさばと当時を振り返る。三鷹の歯に衣着せない物言いには慣れっこだが、さすがに幸村に同情した。

「ま、俺のためを思って言ってくれたって前向きに受け取ってるからいいんだけどさ。とにかくチャンスをくれって拝み倒して、俺の粘り勝ち。最後は茜が折れてくれたよ。格好悪いけど、それが真相だもん。俺は、けっこう本気で茜のこと好きだったから、絶対俺に惚れさせてやるって思ってたけど。……あいつはまだその人のことを引きずってる」

「誰だよ、相手。俺、三鷹からそんな話聞いたことないけど」声が

かすれる。幸村は僕を見て、苦笑った。僕には今まで見せたことのない顔だった。

「茜はお前には言わねえよ。てか、言えねえだろうな。あ、別にお前の性格がどうのこうのってわけじゃないぜ。まあいいや、これ以上は俺の口から言うモンじゃないし。本人に直接聞けよ。ついでに、一発告白でもかまして玉砕してこい」

「玉砕って」

「一回泣いたらいいんだ、奈瀬なんか。晴吾も奈瀬も、大事なことは何にも言わねえでやんの」

「幸村、……ごめん」

思わず謝った。幸村はまだ膝を抱えた格好でベッドの上にちんまりと座っている。僕はそろそろと自分のベッドから降り、膝立ちで幸村の方へとにじり寄った。まるで、人の手を嫌う野良猫に近づくように。

ゆっくりと二メートルに満たない距離を移動し、向かいのベッドの淵にたどり着く。幸村は恨みがましい目で僕を見ている。

「ごめん。さっき酷い言い方した。謝らせてよ」

シーツの上に手だけついて、僕は臍を曲げた親友を見上げる。冷静に考えるとけっこう笑えるシチュエーションなのだけど、僕は精一杯真面目な顔で幸村を見た。今が真夜中だとかキャンプの夜だとかそういう現実的なファクタはベッドの下にでも突っ込んでおけばいい。

しばらくして、幸村はようやく体から力を抜き、しよすがないなと言うように、ぼんぼんと自分が座るベッドの隣を手でたたいた。僕は神妙な顔のまま幸村の横に腰をおろす。ちらりと横目でうかがったら、ばっちり目が合った。すこし笑ってみる。幸村は口を尖らせたが、すぐに笑って肘で僕を突いた。

「なあ、無責任なことはいいたかないけどさあ」そう前置きしてから、「茜に告げないの？」と聞いてきた。

「告るって……三鷹には好きな人がいるって言ったばかりじゃん、

幸村

「うーん、そう、なんだけどさあ。奈瀬なら、何とかなるかもって思ってる」

「根拠は？」

「いや……あんまり自信ねえなあ。むしろ逆効果かも」

「それじゃあんまりだよ」

「だよなあ。奈瀬ってさあ、母親似？ 父親似？」

今、会話がイレギュラーバウンドしたぞ。そう思ったが、せつかく親友の機嫌が直ってきたのだ。どんな悪送球もがちりキャッチしてみせよう。

「たぶん、父親似。母さんとは顔の系統が違う」

「……そ、つかあ」なんとも歯切れの悪い返答だ。

「それがどうかした？」

「いいや。なんでもねえ」

今度は返球すらしてもらえなかった。会話はキャッチボールって言うだろう。仕方なく僕は自分でボールを拾いに行く。「そもそも三鷹はアメリカじゃん。いつ帰ってくるかもわからないし」

「うん。なんか、向こうで知り合った教授に引き止められてるらしいぜ」

「へえ、すごい」

ベッドにふたり並んで座り、話している内容が好きな女の話なのだから、健全と言えば健全なのだろうがどうにも脱線している気がする。そろそろ本格的に本題を忘れてしまいそうになったころ、唐突に部屋の扉が開いた。

「ただいまー……って、何やってるの？ ふたりとも。俺、もしかしてお邪魔？」

ひよっこり顔を覗かせたのは、キャンプファイヤの後からずっと不在にしていた仲本晴吾だ。仲本は僕と幸村を見るなり、ぎよっとしたように開けたばかりの扉を再び閉じようとした。

「仲本、いいから入ってこいよ。帰ってきたばかりでどこ行くつも

りさ」

「いやあ、だって、ねえ」

仲本は要領の得ない返事をしながら、恐る恐るというふうには部屋の中に入ってきた。

「あーあ、今何時？ 晴吾」

「今二時半、いやもうそろそろ三時かな。お前ら、プラネタリウムつけてベッドの上で仲良く並んでおしゃべりしてたの？ そういうの、好きな女の子としたら？」

「余計なお世話だよ」珍しく僕と幸村は声を揃えた。

僕は立ち上がって自分のベッドに戻った。仲本はしばらく部屋の中を物色した後、窓際に置かれた猫脚のソファに寝転んだ。長身の彼にはすこし窮屈そうだ。本人はあまり気にならないのか、さっさと寝やすい体勢を探って落ち着くと、「おやすみ、おふたりさん」と言っただけという間に静かになった。僕と幸村は互いに顔を見合わせる、どちらともなく「寝るか」ということになった。

ようやく長い一日が終わりを告げる。

僕はプラネタリウムのスイッチを切った。今度こそ本当の暗闇が訪れ、ベッドリネンは気持ちよく体を包んだ。一日の疲労がじんわりと全身に広がる。何も考えず、夢もみずに眠りたい。これからのことは、明日また考えればいい。

そう思っていたのに、僕は結局、まんじりともせず夏の高い日の出を迎えた。

撤収は迅速だった。もともと寝起きが悪い上に寝不足が重なって、僕はほとんど不機嫌を通り越して重病人の気分だった。もちろんビュッフエスタイルの朝食も大して味などわからなかった。ぼんやりする頭にカフェインを流し込み、なんとか正気を保って爽やかなクラスメイトの中に紛れ込む。

車と電車と自転車をトリアススロンのように乗り継いで、家に着くころにはすでに疲労困憊だった。母親はぼろぼろになって帰ってきた息子をいぶかしんだだろうが、表面には出さず、代わりに汚れ物を出すように言った。僕はその通りにして、さっさと自分の部屋に引き上げるとそのままベッドに飛び込んだ。カーテンも閉じて、本当は両戸も閉めたいくらいだったけどそこまでの気力はなかったので省略。そうして僕はようやく眠った、のだと思う。次に気がつくとき、昼はとづくに過ぎていて、すでに夕方と呼べる時間帯だった。六時間近く寝た計算になる。僕はごそごそと起きだして、シャワーを浴びることにした。窓は閉めっぱなし、クーラーも扇風機もつけずに寝てしまったので汗をかいていた。窓を開けて、ちよつと勿体ないがクーラーの電源も入れて、室温を確認したら三十度あった。よくこんな中で眠りこけていたものだ、我ながら感心する。

室内の空気がほぼ入れ替わった頃に窓を閉め、着替えを持って風呂場に行く。十花はキッチンで夕食の用意をしていた。シャワーを浴びて着替えたなら、ようやく人間らしい気分になった。僕はタオルを首にひっかけてたまま、キッチンのカウンタに手をついた。

「何か食べるものない？」

朝飯はろくに食べられず、昼食もすつとばして眠ったので、空腹で目が覚めたのだ。十花はちらつと僕を見て、昼飯の残りだと思わ

れる素麺を出してくれた。しかし素麺一人前ではまったく足りず、まだそわそわとキッチンを覗き込む僕に、今度は火にかけていた大鍋からラタトウイユをよそって出してくれた。結局僕はそれを三杯お代わりして、ようやく満足した。

「一貴、これ、またシドに持って行ってあげてくれないかな」十花は僕が食べ終わるのを見届けて、今度は中ぐらいの鍋をカウンタに置いた。六時をすこし回っていたが、外はまだ明るい。僕は了承して立ち上がった。鍋を自転車で運ぶにはちょっとしたコツがある。僕の自転車にはカゴがついていないので、密かに鍋バッグと呼んでいる底がしっかりした鞆を肩にかけて運ぶ。僕は鍋の取っ手を掴んだところで一度顔を上げ、十花を見た。彼女は包丁を握っている。すこし迷ってから、「母さん」と声をかける。何て言ったら伝わるのかわからなかったので、僕はただ「もうすこしだけ自分で考えてみるよ」と言った。言ってから、さすがにこれじゃあわからないと気づいて慌てて付け足す。

「あの、いろいろ、これからのこととか。ほら俺、一応受験生だし、それで駄目なら相談、するから。あの、そうじゃなくて、相談に、のってください」最後は勢いで敬語になった。

十花は手を休めて僕を見ている。慣れないことをしているせいで、ひどく居心地が悪かった。

「君がそう望むなら、わたしも奈瀬も喜んで相談にのるよ」十花の声は、いつもより幾分やわらかかった。それから、すこしだけ困ったように「実は」と続ける。「わたしは毎日君を見ているから、特に心配はしていないんだけどね。……奈瀬はそういうわけにもいかないだろう？ あれは最近、君の受験の話ばかりする」まるで子離れが出来ていない、と言わんばかりの口ぶりだ。

「父さんが？ そう言えば、元気にしてるのかな。最近、メール来ないけど」僕の言葉に十花は苦笑する。「あまりメールばかり送って、君に煩く思われるのが恐いのさ。あれでも一応人並みに、息子の反抗期やら受験ストレスやらが気になるらしい」

「じゃあ、俺からメールすればいいんだ」

「そうしてくれれば喜ぶよ」十花はほつとしたように、再びまな板の上の野菜に戻っていった。

僕は鍋バッグを肩にかけ、愛車を玄関から出してサドルにまたがった。空には薄ぼんやりとした月が顔を出していた。まだ昼間の熱気が生ぬるく立ち上ってはいたものの、頬を撫でてゆく風は夜の気配をまとっていた。四十分ほどかけて、ゆっくりと自転車をこいだ。手ぶらで全速力なら二十分、電車なら徒歩を含めて三十分の距離だ。叔父の家にとどり着いた頃には七時を回っていただろうか。相変わらず、壁掛け時計の類は一切置かない家なので、携帯電話を持ってこなかった僕には正確な時間はわからない。盗まれる心配もないので、自転車は鍵をかけずに適当な木に寄りかかせておくだけで、玄関のドアノブに手をかけると鍵がしまっていたので、ポケットから合鍵を取り出して開錠した。

中に入ると空気が流れた。数日締め切られていたのか、不快ではないが肌にまとわりつくような感じがした。ひとまずキッチンに向かい、六つも並んだ電気コンロのひとつにラトウイユの鍋を置いた。こぼれていないことを確認してほつとする。これでまたひとつ、あの大人気ない大人に貸しができた。僕が手ぶらで来たときはぶつぶつ文句をつけるくせに、十花の手料理持参だとわかるところりと機嫌がなおるのだ。

目的は恙無く達成されたのでそのまま帰ってもよかったのだが、なんとなく叔父を待ってもいいような気になった。単なる勘だが、今夜あたり帰ってきそうな気がした。

あまり暑くはなかったが、僕は勢いよく家中の窓を全開にしていた。二階にはさすがに生暖かい空気がたまっていたので、天井に備え付けてあるファンも回した。相当昔のものなので、故障しているかもしれないと思ったが、それは重たそうにはあるもののゆっくりと回り始めた。羽に降り積もっていた埃が舞って、窓の外へと運ばれていった。

いつものようにリビングのソファで待つのも悪くなかったが、今夜はなんとなく隣の部屋を覗きたくなかった。古いピアノのある部屋だ。僕は好奇心に従い隣の部屋へ移った。開け放たれた窓から差し込む月の光でぼんやりと部屋全体が白く浮かび上がって見えた。アップライトのピアノが壁に背中をつけて置かれ、あとは椅子が一脚、忘れられたようにぼつんとあるだけの殺風景な室内。遮光カーテンが風を受けてゆらゆらと不規則に揺れた。

物の形がわかる程度には明るかったので、僕は電気を点けないままピアノにそつと近寄った。ピアノの腹に抱かれるように仕舞われていた、背もたれのない椅子を引き出して座る。そのまま蓋に手を置き、硬くてすべすべした感触を指で確かめる。ぐつと力を加えて持ち上げると、蓋はあっさり開いた。その下で鍵盤を守っているフェルトの布を取り除くと、白と黒の象牙が現れる。輝くように艶やかな、とはお世辞にも言えない、日に焼けた鍵盤はそれでもどこか味わいがあつてなめらかだ。蓋の内側に刻印された『BECHSTEIN』の文字が最初は読めなかった。叔父に聞くのも癪だったので、帰ってからインターネットで調べてそれがドイツのベヒシュタインという楽器メーカーであることを知った。元々はシドの母親、レティツィアさんの嫁入り道具だったそれは、彼女の死後息子に譲られた。イギリスからわざわざ船で運んだと言つただから、シドにとつても思い入れのあるピアノなのだろう。

真ん中のドの鍵を押してみる。僕の知っているドの音よりもかなり低い。長い間調律されていなかったため、全体的にピッチが下がってしまったっている。調律しなよと言う僕に、叔父は外国製のアンティークを任せられる調律師がいないと応える。が、本当は他人の目にさらしたくないだけなんじゃないかと思う。でも、狂うに任せるピアノはなんだか可哀相だ。

僕はしばらくでたらめに白鍵と黒鍵を押した。交互に。上から下下から上に。シドの指は鍵盤を舐めるように、あるいは鍵盤の上で踊るように動くが、僕の場合は弾くというよりも押す、に近い。

ぼやんぼやんとした音がする。弦が伸びた、間抜けな音だ。それでもシドが弾けばそれなりに味のある個性的な音に聴こえるのだから、楽器よりも弾き手の腕が問題なのだ

僕は諦めてピアノの蓋を閉じた。そういえば、一オクターブ上のシの音が出なかった。打鍵の際の抵抗がやけに軽かったので、完全に弦が切れているのかもしれない。叔父は知っているはずだが、直すつもりはないのだろうか。帰ってきたら確かめてみよう。

そこでひとつ欠伸がでた。疲労感がゆるやかに眠気を連れてくる。六時間近い昼寝でもまだ足りなかったようだ。今何時だろう、とふと気になったが、確かめるのも億劫だ。あまり遅くならないうちに、十花に連絡しなければ。そんなことをぼんやりと考えながら、僕は蓋をしたピアノの上につつぶした。風が気持ちよく吹き抜けていった。

どれくらいそうしていただろうか。人の話し声で目を開けると、キッチンの方から物音がする。独り言かと思っただが、どうやらシドが電話でしゃべっているようだ。一貴が、と聴こえた。相手は十花なのだろう。そこで、はたと家に連絡をいれていないことに思い至り、僕はすこし遠い目になった。一体、今何時だ。

僕はピアノの椅子を元の位置に戻し、窓を閉めて部屋を出た。扉はどちらも開けっ放しなので、すぐにシドの姿が見えた。キッチンの壁にもたれて肩と耳の間に受話器を挟んでいる。煙草に火をつけようとして、手元が狂ったのかライターがごとんと床に落ちる。ちいさく舌打ちし、それから慌てて否定する声が聴こえる。どうやら、誤解されたようだ。

僕はシドに近寄り、安物のライトを拾って手渡してやった。道具にはあまりこだわりがないのか、バーの名前が入ったマツチでも百円のライターでも誰かから贈られた高級なジッポでも、彼は同じくらいぞんざいに扱っ。礼を言う代わりにじろりと睨まれたので、僕は小声で「代わって」と言った。

叔父から電話を受け取ると、受話器から「一貴？」という十花の声が聴こえた。

「ごめん、母さん。今何時かな」

「零時三分四十秒を回ったところ。……泊まるつもりなら連絡をいれなさい」

「うん、ごめん。そのつもりだったんだけど、知らないうちに寝ちゃったみたいで」

「で、どうする、帰ってくる？ 泊めてもらおう？」

「今夜は泊まるよ。ちよっと叔父さんと話したいことがあるし」

「そう。泊まるならシドに礼を言っておきなさい。おやすみ」

おやすみなさい、と返すと十花はあっさり電話を切った。シドはシンクにもたれてぷかりぷかりと煙草をふかしている。白い輪っかになった煙が吐き出される。「そういうわけで、泊めてね、叔父さん」

「どういうわけだよ。百パーセントお前の都合じゃねえか」

「機嫌悪い？ 母さんお手製のラタトゥイユあるから、夜食にでも食べたらず？ あ、俺も食べるけど」

「……ちつ。あのなあ、一貴」叔父は乱暴に煙草の火をシンクに押し付けて消した。十花の手料理につられないのは珍しい。

「夜中まで家中あけっぱはねえだろ。玄関の鍵どころか窓は全部全開じゃねえか。帰ってきたのが俺じゃなかったらどうするんだ」

「どうって……、こんな所まで他に誰が来るわけ。でも、まあ、無用心にして悪かったよ。何も盗られたりしてないよね」

「お前に何かあつてからじゃ遅いんだぞ。俺に死んで詫びろってか？」

「心配しすぎ。それに、別に詫びてくれなくていいし」

「誰がお前に詫びるか阿呆。お前は自業自得だ。それから、もしお前に何かあつたら、死ぬときは相手に報復してそいつも道連れだ。俺を犯罪者にしたくなかつたら、十花を泣かせるような真似はしてくれるなよ」

「なんだよそれ」僕は憮然としながら、過保護でシスコンで常識知らずで過激派のイギリス人を見た。彼の青い目は本気だ。「犯罪者の身内なんていらぬし」

「なら、いいけどな」シドは鍋を掻き混ぜて言った。「美味そうだ。……お前も食べるのか？」

「腹減ってるもん」

「お前は毎日十花の手料理だろうが。こついつときくらい遠慮しろ。戸棚のシリアルなら食っていいぞ」

「運んできたの俺だし」

叔父は盛大に溜め息を吐いたあと、スーパボールとスプーンを二つずつ取り出した。

「で、俺に話して何」ふたり並んでソファに座り、鍋を空にしたところで叔父は再び煙草に火をつけた。

「ああ、うーん。……最近どこに行ってたの？」切り出し方がわからず、関係のない質問から入ってみる。シドはちらりと片眉を上げて僕を見る。非常に胡散臭そうな顔だ。

「まあ、いいけどよ。ここところはギャラリー探しかなあ。やっぱり今年中に個展やるところと思ってるよ。で、やっと今日見つけたわけ。まあ、キャンセルの穴埋めなんだけだな。おかげでスケジュールがなあ、融通きかねえんだけど、こればかりは譲るしかないんだよなあ。秋から冬にかけてがよかったんだが、さっそく来月だよ。残暑もいいところ」参ったぜ、と叔父は金髪をかく。

「ふうん。気が向いたら行くよ、友達と。……あ、R指定とかじゃないよね？ あんまりアカデミックでも前衛的すぎても困るけど」

「注文が多いなあおい」

「だって何撮ってるのかぜんぜん想像つかないし」

「……お前って」シドはまじまじと僕を見つめる。「年々十花に似てくるな」

「そう？ あんまり似てない気がするけど」強いて言うなら女顔かもしれない、とは思うが。母親はアジア系外国人の顔立ちで、僕はどこからどうみても日本人の顔だ。

「ああ、いや。外見の話じゃねえよ。仕草とか、なんだろうな、雰囲気かな。その、核心に触れない感じの話し方とかそういう」シドは自分の顔の前で、金庫のダイヤルでも捻るような仕草をした。何のジェスチャだ。

「俺あんなに浮世離れしてないよ。あ、もしかして口説いてる？」

俺、身の危険感じたほうがいい？」

「阿呆。男にもガキにも興味ねえよ。性転換してくるか、五年経ったら考えてやってもいいけどなあ」

「五年したらシドなんて四十じゃん」

「ばっ、お前、まだ三十四だぞ俺は。五年たつても三十代だ」

「ぎりぎりじゃん」

「ぎりぎりでも三十代は三十代だろうが。ああ、前言撤回。似てねえ、ぜんっぜん似てないね」

「大体、十花十花つて、そりゃあ今は母さん綺麗だけどさ、そのうちあの人だつて皺くちゃのばーさんになるんだよ。その時になつたらシドはどうするの？」

いつの間にか核心に迫っている。いや、あくまでもシドの核心だが僕にとつても他人事ではすまされない。「そうだなあ」と叔父はしばらく煙草の煙を目で追つたあと、にやりと笑つた。

「望むところ、かねえ。もういつそばーさんになつてから告白したら俺の本気を認めてくれるだろうか、とかねえ。割と考えてるね、最近」

「ふうん」なんというか、まあ、叔父の考えそうなことではある。「その歳になりゃあ俺も枯れてるし。セックスの心配はないわけだ。ハードル低くなると思うんだがな」

「ちよつとお、未成年の前で軽々しく近親相姦とかセックスとか言わないでくれる？」

「お前自分で言つてんぞ」

シドはふらりと立ち上がり、キッチンの方へ姿を消したかと思うと、両手に缶ビールを持って戻つてきた。

「未成年」

「誰がお前に飲ますつて言つたよ。俺が飲むんだよ。ガキはジュースにしなさいよ」

ジュースなんて入っていたためしがない癖に。しかし喉は乾いていたので、汚れた食器を片付けがてら、僕は冷蔵庫を物色した。かろつじてミネラルウォーターのボトルを探しだし、それを持って戻るとシドはすでに二本目のビールに口をつけていた。

「俺ね、昔っからずつと、母さんばっかり追いかけてるシドつて

アホだなあつて思ってた。だってさあ、叶うはずないじゃん。いくら半分とはいえ、血の繋がった姉弟だぜ。しかも相手結婚して子供までいるんだぜ。冗談でなけりゃ頭おかしいか嫌がらせか単なるマゾかって思うじゃん」

「……お前はさらつと人の傷口を抉って塩を塗りこむ発言をするよな」しみじみと呟いたシドを無視して僕は続ける。

「冗談なのか本気なのかっていうのは、さすがに長い付き合いだからわかったけどさ。まあ正直、あんまりわかりたくもなかったけどでも、自分が同じような立場になると、なんか逆に尊敬する……片想いって、しんどいんだよね」

「尊敬されても叔父ちゃんは流されてやらねえぞ。一生根に持つぞクソガキ」

「しつこいもんね」

「粘りと根気だ」

「はは、自分で言わないですよ。でも実際、あっさり諦められるくらいなら、こんなに苦しい思いなんてしてないよね。脈なしでさ、相手には他に好きなやつがいてさ。今更どうしようもないのに」

「……なんだよ、お前のコイバナかあ？」シドはつつぷした僕の頭をぼんぼんと叩いた。「一丁前なこと言うようになったねえ、お前も」

「……ありえないよ。こんなぐちゃぐちゃしたの、もうヤだ。脈ナシの片思いなんて金輪際したくない」

「それが恋愛の醍醐味ってやつだろうが」くしゃくしゃ、とシドの大きな手が僕の頭を撫でる。

「そんな醍醐味……三十すぎてから楽しむよ。俺、これが初恋だもん」

「叔父ちゃんだって、十花は初恋の相手だぞう」

「嘘」

「真顔で否定すんな」ぱかっと叩かれた。「本当だったの。そりゃあ、まあ、他に全然女と付き合わなかったとは言わないけどな。お

前が何年初恋引きずってるのか知らねえが、叔父ちゃんに比べればまだまだ」年季の入りが甘い、と笑う。

僕はシドの手を払いのけて、ミネラルウォーターを喉に流し込んだ。涙が滲みそう。そんな僕をじっと見ていたシドがにやりと片頬だけで器用に笑った。「で、可愛い子か？」

「当然。つか、綺麗系」

「ほお。俺も知ってる相手？」

「……知ってる」

「なるほど、彼女か。ありやあ……ううん、確かに難しいな。叔父ちゃんとしては、一貴には是非頑張っただけが」

「え、今のでわかった？ それとも謙かけてるだけ？」

「わからないでか」

「じゃあ、頑張っただけ、は単純にシドのライバルが減るから？」

「ははは。そこまで気づいていて惚れてるなら、お前も相当難儀な男だよなあ」シドにだけは言われたくない。

「だから、こうして、相談してるんだろ」僕は手の中でペットボトルを遊ぶ。

「まあ、とにかく気持ちを伝えるってのが先決なのでは？ 青少年よ」

「……勝算ゼロでもですか、先生」

「勝算？ 恋愛は勝負ではないのだよ。それに、負けたって金を取られるわけだし、命を取られるわけだし。せいぜい一晩二晩泣き明かして、それで思い切れるかどうかは神のみぞ知る、だろ？」

「他に好きな人がいて、おまけにそれとは別に、現在進行形で付き合っている相手がいても？」

「へえ、やるなあ。しかし些細なことだ。少なくとも、こんな所でぐだぐだ言い訳を探しているお前が文句言える筋合いじゃねえ。伝えなきゃ始まるものも始まんねえぞ」

「そりゃあ、そうかもしれないけど」

「ふられたら責任とって慰めてやるよ」

恨みがましく見上げる僕にへらりと笑って、叔父は青い目を細めた。二本目のビールをちびちびと舐めているのは、まだ僕の話に付き合ってくれるつもりだからと解釈した。

「ねえ、シド」ソファの背もたれにことんと頭を乗せて、僕は天井を眺めながら話し続ける。「大学とかさあ、どうして行くの？ やっぱり就職に有利だから？ 勉強、楽しかったから？ それともりあえず？ あ、うざいこと言ってる自覚はあるからそこは指摘してくれなくていい」

「なんだお前。水で酔っ払ったのか？」くくつと笑う、彼こそが酔っ払いだ。

「おしえてよ、せんせー」

「他人の理由なんて聞いても役に立たねえぞ。特に俺のなんかはなでもまあ、今日はやけにお前が素直だし、可愛い甥っ子の頼みをきいてやらんこともないが」長くなつた煙草の灰を落とす。それから深く吸い込んで、シドは昔を懐かしむように遠い目をした。

「本当は高校を卒業してすぐに日本に行くつもりだったんだがな、常識的に考えて、いきなり生活能力のない高卒のガキに押しかけられたら誰だつて迷惑だろう。俺は十花の重荷になりたいわけじゃないからな。だからまず大学を出て、日本で自活出来るくらいまで日本語をみっちりやろうと思つたんだよ。それが理由だ。大学ではジヤパニーズ・スタディを専攻して、一年間日本に留学もした。その間にな、一度だけ十花に会いに行つた。二十歳になるかならないかつて頃の話だ。その時十花に言われたんだ、お前はもつと自由になつていいんだよつて。……まったく、情けない話だぜ。俺は十花に縛られているつもりはなかったし、自分の意志で日本まで来たのに何言つてんだこの人はつて、腹も立つたさ。いつか言い返してやるうと思つて、十年以上経つちまつたけどな。だけどな一貴、俺も今お前に同じことを言うぞ」青い目がまっすぐに僕を見据える。「迷うのはいいんだ、悩むのもいい。だけど縛られるな。思い込むこと信じることは原動力にはなるが、見えるはずのものが見えなくなつ

ちまうのは駄目だ。人間てやつはな、見たいものだけ見て、聞いたことだけ聞いて、信じたことだけを信じる生き物なんだよ。だからときどき、スイッチを切り替えてやれ。第三者の視点、より高い視点、広い視点にな」

言ってから叔父は照れたように視線をそらせた。「まあ、お前は俺と違ってわかってると思うけどな」そして空になったビールの缶を手に立ち上がった。「どうした、惚けた顔をして」

「まさかシドの口から常識なんて言葉が聞けると思ってなくて」驚いたんだよ、と言うと、叔父は笑って僕の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「おやすみ、お前ももう寝ろ」

八月の最後の二週間は宿題に追われて過ぎていった。相変わらずのうだるような暑さには辟易したが、僕は叔父の家へ通い詰める代わりにせつせと図書館へ足を運び、参考書を読み込み、もくもくと例題を解いた。朝から晩まで机に向かう地味で健全な受験生活だ。

三鷹はまだ帰ってこない。

自然と零れそうになる溜息を飲み込み、僕は目の前の問題に集中しようとした。夏休み最後の週末、幸村に誘われて模試を受けに来ていた。

機械的に手を動かす。問題文を目で追い、計算して、マークシートを塗りつぶす。会場には五十人余りの高校生が詰めている。細長い机が整然と並び、その合間を見回る試験監督の靴音が近づいては遠ざかってゆく。

終了の合図の後、問題と解答用紙が回収されると幸村が近寄ってきた。

「ああ疲れた。これが練習だっていうんだから嫌ンなるぜ。まだ本番はこれからなんだよなあ」肩がこったのか、右腕を付け根からぐいぐい回している。

「お疲れ」僕も鞆を手にして立ち上がる。

「あ、奈瀬。俺さっきの休憩時間に矢野と井上見つけたんだよ。あいつら模試も一緒に受けてんのな。仲いいよなあ」

「そうなんだ」答えながら会場内を見渡したが、出入りが激しいせいか見つけれられない。

「でな、模試終わってからみんなでカラオケ行こうって話になってさ。奈瀬も行くだろ？」

「カラオケかあ」正直なところ、騒がしいのであまり好きな場所で

はない。けれど幸村の期待を込めた目で見られると断りづらい。背中ではたはたと揺れる犬の尻尾が見えるようだ。

「いいじゃん、行こうぜ。仲本も誘うし。俺まだ奈瀬とカラオケ行ったことねえもん」

別に行かなくていいじゃん、と言いかけてやめる。甘いかなあとも思うけど、意地を張るほどのことでもない。「いいよ」と言うと、幸村は「やりい！」と小さくガッツポーズをした。

模試会場を出ると、階段の下で矢野と井上さんが待っていた。矢野は電話中らしく、井上さんが手を振ってくれた。

「仲本くるー？」幸村がたたつとふたりに駆け寄る。矢野が携帯電話を耳にあてたまま、ぐつと親指を立てる。

すぐに電話は切れ、矢野は改めて「仲本は後から合流するって」と幸村に教えていた。

井上さんはワンピースの上から薄手のパーカを羽織っていた。サイズが大きいのか肩が余っていて、袖は手首で折り返してある。ああ、彼氏のね、と気づいたらこちらが面映かった。

「井上さん、なんか俺達邪魔したみたいでゴメンね」彼氏とふたりきりが良かったんじゃないかと思いをかける。

「ううん、気にしないで。わたし達が誘ったんだから。カラオケは人数多いほうが楽しいよね。それにメンバー豪華なもの！奈瀬くん達とカラオケ行ったって言ったら、友達羨ましがるだろうなあ、うふふ」

デートの邪魔をしているのではないかと心配したが、そう言ってもらえるなら気が楽になる。

一駅ほどの距離をしゃべりながら歩くとカラオケボックスに着いた。曇り空の夕方だったので暑さはそれほどでもなかったが、冷房の効いた建物内に入るとやはりほっとした。受付を通って個室に入ると、さっそく幸村が選曲を始めていた。

イメージ的にアップテンポなポップスかロックあたりだろうと踏んでいたら、いきなり女性ヴォーカルでR&Bだった。ハスキーな

低音と震えるような高音の声質が非常に似合っていて、正直かなり上手い。つくづく弱点のない男だと思う。井上さんが即興で八モリを入れたりして、一曲目から幸村は絶好調だった。

「幸村くん、すごく上手ね！ 女のわたしが歌うよりも色っぽいじゃない」

「井上も八モリあんがとー。やっぱコーラスつくとき音に厚みがでていいなあ」

女子高生がふたりいる、そう思ったのは僕だけじゃなかったように、隣の矢野も笑いを堪えるような複雑な顔でふたりを眺めていた。幸村と井上さんがメインで歌い、思い出したように矢野や僕にもマイクが回ってきた。井上さんは七十年代、八十年代の歌謡曲が持ち歌というシブイ一面を披露してくれた。一方の矢野と僕はそれぞれ、ふたりからのあれ歌ってこれ歌ってというリクエストに可能な範囲で応えていた。

「ちょ、これキイ高いって。無理無理。俺声域狭いんだから、下げても無理」彼氏の弱気な発言に「大丈夫大丈夫。出る出る」という彼女の無情なゴーサインが出る。

「井上って意外とDS？」ジューズで喉を潤しながら、幸村が悪びれずに云うと「やだ、ばれた？」なんて身も蓋もない会話も展開された。

三十分ほど経った頃、矢野が携帯電話を手にして一度席を外し、しばらくしてから仲本と一緒に戻ってきた。

「晴吾ー」扉に近い席に座っていた幸村は、仲本を見つけるとマイクを握ったまま飛びついていた。

「はいはい、お待たせえ。お、ちゃんと奈瀬もいるねえ。カオリちゃん、呼んでくれてありがとねえ」首に幸村をぶら下げたまま、仲本は軽く片手を挙げて全員に挨拶した。相変わらずのノリと相変わらずの美声だ。

この男がこの声でバラードなんて歌ったら、すごく雰囲気が出るんだろうな。普通にしゃべっているだけでも、ずっと耳元で聴いて

いたくなるような極上の低音だ。同性でもそう思うのだから、異性なら尚更だろう。

「みんな、お前に期待してるみたい」幸村が自分のマイクを渡す。

「え、うそ、そうなの？ 言っておくけど、俺の歌はネタよ？ マジメに聴いちやダメなのよ？」

ぱぱっとリモコンで選曲しながら仲本は苦笑した。珍しく謙虚だ。改めて人数分の飲み物を頼み、それが運ばれてくる頃には僕らは全員理解した。身をもって思い知った、と言ったほうがいいかもしれない。

仲本晴吾は確信犯的な音痴だった。

リズムはいい。声は文句なくいい。だがピッチが悪い。しかも揺れる。無駄に美声なお陰でなんだか気持ちが悪い。

「俺、こんなエグいビブラート初めて聴いた……。なんか、悪酔いしそう……」仲本、頼むからメロディアスな曲は辞めてくれ。お前、わかってやっているだろう。自重しろ、自重」「何回聴いても気持ちわるっ」

声楽でもやればいいのに、と思っていた頃がすでに懐かしい。井上さんも、ハモリ用のマイクを握ったまま絶句していたが、こちらは腑抜けた男達よりも立ち直りが早かった。流石というべきか。

「仲本君、リズム感はあるんだから、ラップにしましよう！」曲の途中でぶちつと強制終了させたかと思うと、神業的な速さで次の曲を打ち込んだ。

「これ、聴いたことあるけど歌ったことないなあ」

「大丈夫、仲本くんはやれば出来るコ！ その声で音程外すなんて勿体ない！」

「え、俺苛められてる？ 褒められてる？」「ほらイントロ始まった！ 気合入れていけー！」

結論から言うと、井上さんの読みは大当たりだった。ほとんど音程を無視してしゃべり倒したただけなのに、地声がいいので聴けてしまう。「元を取ったわ」と満足げな井上さんに、幸村が拍手を送っ

ていた。

ふたりが再びマイクを握ったのを機に、仲本が僕の隣に腰を下ろした。ウーロン茶を一気に飲み干して一息つくつと、タンバリンで合の手を入れながら「仲直りしたんだな」と囁くように言った。

「え？」

「幸村とだよ。お前ら、キャンプの夜、なんか変だったじゃない。

あの後、しばらく落ち込んでたんだよ、あいつ」

「あいつ……って幸村が？」

「俺が落ち込むとでもお？」

「……だから、耳元で凄むなつて。自分の声考える」なんだか背中がゾクゾクする。

「せっかく心配してやってんのに」

「仲直りも何も、別に喧嘩したわけじゃないし。幸村はあの通り元気だろ」「ま、今は本当に元気みたいだから、いいんだけどさあ。

あれでときどき、カラ元気ではしゃぐから」ガラスのコップに残った氷をストローでじゃりじゃり掻き混ぜながら、顔だけは普段どおりの笑顔で、仲本は静かに腹を立てていた。

「経験談、てわけ？」

鎌をかけたら、一瞬人でも殺せそうな目で睨まれた。

「わかつてるじゃん。わかつてるなら俺にこんなこと言わせないで欲しいナア」

肩をぐつと掴まれたかと思うと、そのまま引き寄せられて仲本の息が耳をかすめた。

「圭次を泣かせるなよ？ 下手な真似しやがったら、奈瀬でも容赦しねえぜ」

いつものも甘さなど欠片もない、硬く乾いた声が舐めるような近さで吹き込まれる。「おい」と思わずその肩を押しのけようとした瞬間、「きゃあ、何やってるの！ ちょ、そのまま動かないで！ デジカメ持ってくればよかった」マイク越しに叫ばれた。ひどい音割れと大音量で頭がくらくらした。

「井上さん……」「カオリちゃん……?」

奇妙な姿勢で固まった僕らに携帯電話のカメラを向けながら「はい、チーズ」と井上さんは笑顔でシャッターを切った。

「カオリちゃんてさあ、特殊関係人?」

「ほほほ、そうとも呼ぶかもね。ほらほら、もう一枚いくわよ。長身の男前って絵になるわあ。あ、奈瀬くん、もうちよっと寄って寄って」

井上さんのリクエストどおりに、仲本ががしつと肩をまわしてくる。その腕から逃げようとしたら「そういう絵もいいわ、本気で嫌がってみせて」悦ばれたので体から力が抜けた。まずい、逃げる気が失せそうだ。

「カオリちゃん、じゃあこんなのはどうよ?」いきなり顎を掴まれて顔を寄せられる。

「ノるな!」悪乗りしたふたりは僕の抗議など聞いちゃいない。

幸村と矢野を置いてけぼりにして、井上さんはサドっぷりを発揮しながら次々と注文をつけてくる。

「仲本、愉しんでいるだろう」ぎりぎり、と両手でのしかかってくる男を押しつけながら僕は呻いた。でかいので重い。「はは、失恋の八つ当たり? とも言うかなあ」「迷惑なんだよ」「まあまあ、そう言わずに」

この状況では同情の余地はない。「しかし、八つ当たりでよくこんなこと出来るな」「え? こんな余裕でしょ。俺、奈瀬とならチューくらいは出来そうよ。お前が泣いて頼んだら舌を入れてやらなくも」「誰が泣いて頼むって?」井上さんが本気にしたら責任とれよ、と僕は内心毒づいた。

「カオリちゃん、どう? いい写真撮れた?」

仲本もいい加減飽きてきたのか、僕の上からどくとどさつとソファに腰を下ろした。

「ありがとう、仲本くん、奈瀬くん! お陰でいいのが撮れたわ! これ、友達にも見せてあげていいかなあ。心配しなくても、ネット

で晒したりはしないからね。そんな勿体ないこと出来ないわ」

「どう、いたしまして……」

「井上ー、なんで奈瀬と晴吾だけー？ 俺と矢野はあ？」

「ほほ。ごめんね、絡みはガタイがいい方が好みなのよ。それに奈瀬くんがツンデレっぽいし……。幸村くんはまた今度ね」

誰がツンデレだ。

井上さんからそつと目をそらせると、彼氏と目が合った。矢野は申し訳なさそうに、彼女からは見えない角度でちよい、と謝ってみせた。さては矢野、未必の故意か。

たとえそうだったとしても、腰が引けながらも井上さんと付き合い続ける矢野はすごい。正直ちよつと感動した。別の意味でも涙出そうだけど。

そうこうしているうちに、備え付けの電話が鳴った。受付の人間が延長の確認をするのを断り、僕たちは揃ってそこを出た。カラオケボックスで過ごしたのは二時間程度だったけれど、模試よりも消耗した気がする。しかも最後の三十分は主に撮影会だった、井上さんプロデュースの。

外は生ぬるい風が吹いていた。八月最後の日曜の夜ということもあってか、家族連れや大学生らしい酔っ払いとすれ違う。ゆるやかな人の流れに乗りながら、僕たちは駅までの夜の散歩を楽しんだ。

繁華街と呼ぶには猥雑さが足りず、オフィス街と呼ぶには貫禄が足りない、そんな中途半端な雑踏の中を歩く。撮影会の流れで僕の隣には仲本がいた。

「そっぴや茜ちゃんどうしてるの？」

しばらくどうでもいい話した後、ふと思い出したかのように仲本は聞いた。「幸村から聞いたんだけど、彼女今アメリカなんだって？」

「そ。でも、どうしているのやら」

電話はおるか、メールさえ来ない。僕は三鷹の顔を思い出しながら溜息をついた。

「ああ、悩ましい。連絡来ないの？ 奈瀬から電話してあげたらいいじゃん」

「忙しいところ邪魔したくないよ。それに……三鷹って電話嫌いだし」

「ふうん。ちょっと寂しいねえ。でも、もうすぐ帰ってくるんですよ？」

「多分、ね」

応えながらすこし不安になる。本当に帰ってくるのだろうか。まさかこのまま、行ったきりなんてことは、ないだろうか。

「空港まで迎えに行ったらげれば？」

「……便名知らない」

「圭次ー、茜ちゃんいつ帰ってくるか知ってるっ？」

「知らーん」

「……な？」

「秘密主義なのね、彼女」

仲本はひよいと肩をすくめた。

ギャラリイに併設されたカフェスペースで三鷹と待ち合わせた。細長い店内は静かで、表通りに面したガラス張りの壁からは午後の日差しが差し込んでくる。九月の第一週目の土曜日。店の時計によれば、時刻は間もなく午後三時になるうとしていく。

家が近いにも関わらず現地集合にしたのはいろいろと心の準備がしたかったからだ。けれど結局相手の到着が気になって、何度も時計に目をやる破目になった。ずいぶんと落ち着きのない客だと思われるだろう。

僕の他に客は二組。学生風のカップルとスーツ姿の男性ふたり。どちらもとても静かで、先ほどから話らしい会話は一言も聴こえてこない。他人事ながら、彼らの無言がギャラリイの展示物のせいではないことを祈るばかりだ。

午後三時ちょうど。僕はカップに残っていたコーヒーを飲み干した。空になったそれをソーサーに戻した時、新しく客が入ってきた。いらっしやいませ、という店員の声に続いて耳慣れたアルトが聴こえた。

「カズくん」

女性にしては低く、研磨したかのように滑らかな声。正直、体が震えた。

一ヶ月と少し。たったそれだけ会わなかっただけで、こんなにも懐かしく感じるものだろうか。

「おかえり、三鷹」そう言った僕の声も震えていた。

相変わらぬ白い肌。長く伸ばした黒い髪。アメリカに行っても出不精は治らなかつたのだろう、夏だというのにまったく陽に焼け様子が無い。カフェの人間の視線が彼女に集まるのがわかった。

「ただいま」抑揚に乏しい声。

にこりもしない受け答えは不機嫌そうにも見えるが、休日にくうして出かけてくれるだけでも、彼女にとってはかなりの譲歩なのだ。ゆっくりとした動作で、視線だけで「出よう」と告げてくるので、僕も伝票を手にして立ち上がった。

会計を済ませて隣のギャラリイへ移動する。受付のそばには見慣れた金髪の男が立っていた。今日はいつものよれたシャツではなく黒いTシャツにジーンズを履いている。目にかかる前髪をうつつうしそうにかき上げて、眼鏡のリムに手を添える立ち姿は被写体のほうが向いていそうだ。

「シド、ここ禁煙」ジーンズのバックポケットから煙草を取り出すとする男を見咎めて、僕は声をかける。

「よう甥っ子。茜も、よく来てくれたな」

シドは煙草を引っ込めて破願した。久しぶりに会うのだろう、三鷹の姿に満足そうに目を細める。

「ご無沙汰しております」三鷹も軽く頭を下げた。その動作で黒い髪がさらりと流れた。

昔から三鷹はシドにだけ敬語を使う。そして、いつものサデイスティックな微笑は鳴りを潜める。

「また後でな、おふたりさん」

シドは、受付のカウンタに置いてあったリーフレットを二人分差し出して、空いた手で道順を示した。

カウンタの左手奥へ向かって進む。室内はシンプルな造りだった。白い壁とコンクリの床。天井に近い位置に窓がついていて、そこから光が差し込んでいる。この時間の照明は自然光だけだ。仕切りでいくつか分割された展示場に、まばらな人影が見え隠れする。今日は招待客だけだと聞いたので、ゆっくり観ることが出来そうだ。

想像していたよりもずっとカジュアルで、いい意味で力の抜けた空間だった。アートでもなく、ドキュメンタリーでもなく、気負わずに撮ったスナップ集という体裁を取っている。

最初の展示物の前に来た。一瞬、白黒の写真かと思ったが、良く見るとそれは非常に緻密な線描画だった。一輪の花が細部にわたって記録されている。

「これって……」見覚えがあった。これよりもずっと単純化された画になっていたけれど。

叔父の肩、腕の付け根に近い部分に咲いたタトウの花に、それはよく似ていた。よほど好きな花なのだろうか。

「手間隙かけた惚気もあつたもんやな」ぼそりと三鷹が呟く。どこか呆れたような口調だ。

「え？」

聞き返す僕を無視して、三鷹はひとり次へと進んだ。しばらく眺めたあと、彼女のあとを追って二枚目の、今度こそ写真の前で立ち止まる。

雨に濡れた街角の一コマが写っていた。老舗らしい宝飾店の店先で、スーツ姿の男性が携帯電話を耳に当てている。仕事帰り、恋人へのプレゼントでも選んだのだろうか。幸せそうな雰囲気伝わってくるセピア色の一枚。題名の代わりに日付と「IN LONDON」と書かれたメモが写真の下にピンで留められている。

その写真に隣り合って三枚目、どうやらこの二枚はセットになっているようで、他の作品よりも間隔が狭く展示されている。半年後の日付と「IN TOKYO」のメモ。ビルが立ち並ぶオフィス街で、やはりスーツ姿の男性が空を見上げた一瞬をとらえていた。ただし被写体は別人で、こちらはカラー写真だ。眩しいのか、手で日差しを遮るようにしているので表情は見えない。

飛行機かな。だとしたら見送りだろうか。それともただ、誰かを思い出して空を仰いだのだろうか。渡されたりリーフレットを開いてみるが、説明らしい説明はない。その代わりに、写真を作品として公開することに同意してくれたモデルひとりひとりに対する感謝の言葉が添えられていた。

そこからは、真剣な表情で弓の手入れをする若いヴァイオリニス

ト、雪の中携帯電話を握り締めて立っている女子高校生、飼い主をじっと見上げる大きな犬、カメラに気づいて困ったように微笑む年配の男性、手作りチョコのレシピア本を前にためらうお姉さん、と白黒、セピア、カラーを取り混ぜた作品が続く。モデルも男女年齢国籍種別問わずと言ったラインナップに、叔父の取り留めのなさが見事に反映されている。それでいて、ぼんやりとだがすべての作品が根っこの部分でつながっている気がする。

みんな、大切な誰かのことを考えている。

僕はそつと隣の三鷹を見た。凜とした、清廉な人間だと思う。すつと背筋の伸びた立ち姿が綺麗で、例の微笑さえ浮かべていなければ、しとやかそうにも見える。

「どうしたん」

つい、と涼しげな目元で流し見られて、僕は慌てて正面の写真へと視線を移す。心の中を見透かされているようで、顔が熱かった。

視線を戻した先、引き伸ばされた写真のメモを読む。十五年前の日付、場所は神戸。写真のコラージュになっていて、連続したシーンが集められている。動画のコマ送りのようなものだ。被写体は二代半ばくらいの若い男と幼い少女。女の子は満面の笑顔で青年の頬にキスを贈っていた。きつとお姫様のように大事に育てられてた子供なのだろう。ふたりの面差しもどこか似ているので、父娘か近い親戚なのだと思う。照れたような、困ったような顔で、それでも愛しげに女の子を見つめる男の顔が、一瞬誰かとかぶる。

「九条さん？」

クラスキャンプでお世話になった九条さんだ。「え、ということ、こっちの女の子って」

「九条璃桜」三鷹が言い切ったのでまず間違いなさそうだ。

美少女のはずだ。お姫様のように育つ、というのもあながち誇張ではなかったのかも。僕はじっくりと白黒のスチルを眺めた。若い男は確かに九条氏だった。

「若い頃も格好よかったんだな。あ、こっちの男の人ね、九条の叔

父さんなんだって。俺たち夏休みにみんなでキャンプ行ってさ、ほら、三鷹にもメールしたやつ。そのとき泊まったペンションのオーナーだったんだ。……あのときは、いろいろあったなあ」

しみじみと呟いてしまう。たった一泊二日の短い滞在だったにも関わらず、ありとあらゆる告白フラグが立ちつぱなし、イベントは目白押し、おまけに親友との喧嘩だ。一方的に怒られていたような気もするけど、とりあえず、あれは幸村との初めての喧嘩だった。

「あのさ、三鷹……三鷹？」

いつの間にか、隣にいたはずの彼女の姿がない。僕は慌ててギヤラリイ内を見渡した。出口に近い位置、一番最後の作品の前でぼんやりと立ち尽くす姿を見つけて駆け寄る。物思いにふけて惚けてた僕も悪いけど、あっさり置き去りにするなんてさすがサディスト……なんて思っただけで控えめに抗議しておいた。

「何をそんなに熱心に」三鷹の視線の先を追って絶句した。

若い女性が幼い赤ん坊を腕に抱いている。セピア色の古い写真は、台風の日叔父の屋敷で偶然見つけたものだった。急いでリーフレットを開いて確認するが、これといったコメントは見つからない。すべての作品に添えられていた日付と場所のメモもなかった。

「シドのやつ」

いくら大昔のものだとわかっていても、自分の写真が引き伸ばされてギヤラリイに飾られていると思うとかなり恥ずかしい。しかもこれだけ明らかに意図しているところが違う気がする。そもそも、これは叔父が撮った写真じゃないだろう。ああ、だからリーフレットに載せていないのか、と納得しかけて僕はがりがり頭を掻いた。三鷹はじつと写真を見つめている。一種の羞恥プレイだと思う。そろそろ勘弁してくれ、そう思いながら声をかけようとして気が付いた。

三鷹が目を奪われているのは、十花だ。

まつすぐに。ひたむきに。真摯に。密やかに。何気なく。時に熱を込めて。訴えかけるように。無意識に。意識的に。

三鷹茜は奈瀬十花を見ていた。

それは留守がちな彼女の母親代わり、家族的な親愛の情などではなくもつと特殊な感情、たぶん恋愛感情からだ。でなければ、およそ執着心など持ち合わせていなさそうな彼女が、他人を巻き込んでまでちっぽけなピアスなど探し回るはずがない。手と膝を土で汚して、地面に這いつくばってまで必死で探したのは、それが十花からの贈り物だったからだ。

ひたひたと潮が満ちるように押し寄せる感情に飲み込まれる。ほとんど為す術もなくさらされる。後悔とか失望とか切ないとか腹立たしいとか、そんな想いがぐちゃぐちゃになって交じり合い、さざなみのように足元を濡らした。

相手が幸村なら諦められた。指先に刺さったちいさな棘が、気づかないまま自然に抜け落ちてしまうように、この気持ちもいつか淘汰されたかもしれなかった。

茜が好きなのは俺じゃないんだ、そう告白した幸村の辛そうな顔が浮かんだ。同時に、生々しい悲しさにつま先から喉元まで浸された。どうして幸村じゃないんだ。あいつはあんなに、お前のことが好きなのに。

「どっして」

身動きが取れなくなつて、もがくようにして搾り出した声は低く掠れていた。ぎゅっと握り締めた手の平に爪が食い込む。

「なんで十花なんだよ、……叔父さんも、三鷹も」

自分でも何が言いたいのかわからず、混乱した頭で途方に暮

れてしまう。三鷹はゆっくりと僕の方へ振り向いた。黒い涼しげな瞳には何の感情も浮かんでいない。凧いだ湖面を思わせるような、静まり返った視線が絡む。

「説明したら納得できるん？ わたしがどうして、どれくらい、どんなふうに、十花さんを想っているか、ここで説明したら満足？」感情の抜け落ちた声で淡々と問いかける三鷹は、口元だけでうつつらと微笑った。

いつもの冷やかかさの代わりに、作り物めいた優しさの片鱗がかすめる。出会ったばかりの頃、三鷹はよくこんな笑い方をした。子供らしさの象徴のように義務的に笑っていた。

「血が繋がっているだけあって、よく似てる」いつの間にか伸ばされていた手が、僕の頬をそっと撫でた。「たぶん、これを嫉妬っていうんやろうなあ。カズ君を見ると、ときどき、無性に苛めたくなってしまう、困る」

ひんやりとした指先が離れていく瞬間、僕は無意識のうちにその手を掴んでいた。細い、女の手首だった。親指の下で薄い皮膚を通して脈拍が感じられる。その拍動に重なって、自分の心臓の音が聴こえる。ずっと速くて、ずっと激しくて、ずっと煩い。

「放して」

鋭い口調で三鷹が命じる。体が反射的に従おうとするのを意思の力で踏みとどまる。幼い頃からの刷り込みか、三鷹の言葉に逆らうのは酷く骨が折れる。僕が手を放さずにいると、仮面のような無表情を貫いていた彼女の瞳に苛立ちと冷やかさが戻ってくる。三鷹は元来、気の短い人間なのだ。そして、どんな感情であっても、何も無いよりはずっとマシだった。

「三鷹の言うとおりだよ。多分、三鷹がいくら説明してくれたところで、俺は納得なんて出来ない。満足なんてしない。馬鹿なことを聞いてごめん。三鷹の気持ちかを否定したかったわけじゃないんだ。今は、幸村のことをどうこう言うつもりもない。俺は、ただ……昔みたいに、お前ともっと話したり一緒にいられたらいいと思ったん

だ

いつかの夢ではあんなにすらすら言葉が出てきたのに、今の僕と
きたら。小学生の告白でも、もう少し気のきいたことが言えるだろ
う。当然のことながら三鷹の反応も夢とは違っていた。彼女はゆっ
くりと僕の手に分の手を重ね、「放して」と繰り返した。慌てて
手首を解放すると、三鷹は何度か感触を確かめるように動かしてそ
の手をそつと下ろした。

「……ごめん」「後悔するくらいなら一度目で放し」「まったく返す
言葉もない。

溜息が聞こえて、僕はますます居たたまれなくなる。もう一度謝
りかけたとき「十二年と六日前」例の抑揚のない声で三鷹は話し始
めた。視線はすでに僕を離れて写真の十花に注がれている。

「わたしはちょうどこの場所で彼女と知り合った。まだこの街に越
してくる前で、父と母に連れられて引越しの下見に来ていた。この
ギャラリイに寄ったのは新幹線の時間に余裕があったからで、本当
にただの偶然だった。展示物は残念ながらちっとも興味をそそらな
かったけど、わたしは代わりに話し相手を見つけた。綺麗な女の人
がここでこうやって、一枚の絵をじつと眺めていた。わたしは退屈
で死にそうだったから迷わず彼女に声をかけた。こんにちは、その
絵ばかり熱心に眺めていらっしやいますね、って。女性は最初辺り
を見渡して、それから視線を下げてわたしを見つけてくれた。わた
しに声をかけてくれたのはお嬢さん？ て聞かれたから、はいつて
応えた。あまり期待はしていなかったけど、もしかしたら数分間は
退屈から解放されるかもしれないと思って。それに振り返った女性
はやっぱりととても綺麗だったから、たとえ挨拶以上の言葉を交わす
価値がなくても、しばらくその姿を眺めて過ごせばいいと思った。
でも、それが杞憂だということは数語交わしただけでわかった。続
く二十七分間は至福の時間だった。五年半生きてきてこんなに楽し
いと感じたことはなかった。彼女は頭脳明晰で、言葉は礼儀正しく
適切に選び抜かれていた。父と母の書齋に詰め込まれた膨大な数の

書籍を除いて、わたしを満足させてくれたのは彼女が初めてだった。彼女はいろいろな分野に通じていて、芸術的なセンスもあつた。カズ君は知ってるやろうけど、わたし絵が下手やろう？　つまり、抽象化するっていう行為が」

体系化はしても抽象化しないのが彼女の特徴だ。たぶん、出来ないのではないする必要がないからだと思う。桁違いに性能がいいCPUとメモリを搭載したコンピュータみたいなものだ。情報処理能力に長けていて、容量が大きい。

その証拠に、僕やその他の人間としゃべっていても会話の流れやニュアンスに目だった齟齬が生じることはない。ちなみに模写をさせたら写真並の正確さで、彼女が持ち合わせていないのは絵心のほうだと思われる。

「その時彼女が言ったジョークが鮮やかで、いつかアレンジしたものを使つてやろうと思つているけど、もつたいなくてまだ誰にも聞かせられない」珍しく三鷹は思い出し笑いをしていた。そんな顔を最後に見たのはいつだったか、ちよつと思ひ出せない。もしかしたらこれが初めてかもしれない。それくらいレアだ、思い出し笑いをする三鷹なんて。

彼女を見ると僕の体からもすとんと力が抜けた。毒気を抜かれたというか鼻白んだというかいつそ恐いもの見たさというか、よくするにアレだ、これは惚気だ、三鷹流の。

「ああ、でもカズ君には特別にとつておきの一言を聞かせてあげよ。わたしが十花さんを好きになつたきっかけを。新幹線の時間が近づいてきた別れ際、去り難く思つていたわたしの前に膝をついて、彼女はわたしと目線を合わせてこう言った。生きているのはそんなに詰まらない？　もしも貴女が退屈で退屈で死にたくなったら、わたしに連絡してきなさい。……素敵やつた。今まで誰ひとりとして、わたしにそんな質問をした人はいなかった。そのとき渡された名刺を今でも大切に持っている」

「そう、なんだ」コメントしづらい特別扱いだ。間違つても聞かせ

てくれてありがとうとは言いたくない。「なんで俺にそんなこと話すの」

「どうして十花さんなのか、って聞いたやろう」そりゃそうだけど。「いや、実はシドさんがあんまり自慢げに見せびらかすから。わたしも惚気ておこうかと」

「何のことかわかんないんだけど……この写真のこと？」

「シドさんに聞いてみ」

長い付き合いだから断言できるが、三鷹はどこか楽しげだった。

こういう時こそストイックに自分の想いを胸に秘めていて欲しいと思う。

大体、シドにしたって三鷹にしたって、罪悪感とか悲壮感とか何かないのか、普通あるだろう、どうなんですか。何が悲しくて告白しようとした女の子から自分の母親へのラブコールを聞かされなければならぬのか。

ただひとつ確かなことがあるとすれば、三鷹の言う「無性にカズくんを苛めたくなる」という瞬間が、まさに今だということだ。よかつたな三鷹、ダメージは大きいぞ。

「アメリカか」見納めだという気持ちで、最後にもう一度だけセピア色の写真を見た。母親の腕の中ですよすやと眠る赤ん坊は今の僕とは正反対に見えた。平和そのものだ。「来年の今頃はもう、日本にはいないんだな」

なんだかんだで三鷹とは十年以上の付き合いになる。来年のことは、正直なところあまり実感がわかなかつた。

「卒業したら戻ってくるんだろ？ ああ、夏休みもあるもんな。アメリカの大学って夏休み三ヶ月もあるんだっけ。絶対遊びに行くから通訳兼ガイドさんやってよ」口に出したら何かこみ上げてくるものがあつて、それを飲み込もうと僕は出来るだけ軽い調子で言った。別に、二度と会えなくなるわけじゃない。それに、三鷹は十花がダイスキなんだ。そんなに長い間、離れていられるはずがない。

「いや、バチエラーをとつたらメデイカルスクールに行く。インタ

「ンもあるし、今は日本に帰ることは考えてない」

「え？ でも、行ったきりってわけじゃないよな？」

「今は日本に帰ることは考えてない」

三鷹はゆっくりと、そう繰り返した。

「メデイカル……って、つまり医療関係、だよな？ そりゃあ、大変だろうけど、三鷹なら、どこでだって……。ごめん、俺言ってることおかしいな。つまり、俺が言いたいのは、三鷹は、十花と離れなくても平気なんだ？」

「質問の意味がわからない」

「だって、会えなくなるじゃん。それとも、もう会わないっていうこと？ 十花のこと、好きじゃないのかよ」

「声が大きい」

僕は舌打ちする。何人かの客が僕らを振り返った。僕はもう一度三鷹の手をとると、カウンタの横を通ってエントランスをくぐり、外へ出た。シドに声をかけられたような気がするが構っていられなかった。三鷹は手を引っ張られたまま黙ってついてきたが、足を止めると同時に僕の手を振り払った。三度、同じ言葉を繰り返すつもりはないようだ。

「……行くなよ」こんな言葉で三鷹が翻意するとは思えなかったが、言わずにはいられなかった。長い髪が風に煽られるのを手で抑えながら、三鷹は僕を睨みつける。

「圭ちゃんに何か言われた？」

苦々しい口調に勢いを削がれる。どうしてここで幸村の名前が出てくるのかわからなかった。

「幸村は関係」「なくないやろう。何か言われたはず」「僕はぐっと答えてしまった。「大体、そんなセリフ、カズくんらしくもない。そんなことを言うのは、圭ちゃんくらいやと思ってたのに」「ますます三鷹の声が低くなる。僕はどうやら、数少ない彼女の地雷を見事に探り当て、さらには思い切り踏みつけたらしい。

「カズ君、最初で最後のわたしからの忠告やから、よく聞いて」

少女の雰囲気圧倒されて、僕は一も二もなくうなずいた。

「君は極端から極端に走りすぎる。ある特定の人間の意思を汲み過ぎる」

「ちよ、と待って。三鷹は、俺が幸村に何か言われて、それで前のことを好きだと錯覚してるとか、そういうことを言ってるわけじゃない、よね」「違う」「そんな、はつきり……」「いや、いいんだけど。」

今や三鷹は、冷ややかで呆れ顔でどこか腹立たしそうでそのうえサディスティックで、詰まるところ非常に三鷹らしかった。嬉しいような悲しいような、複雑な気分だ。

「わたしはね、カズくん」口の端をわずかに持ち上げて、優しげな声で囁かれる。「君の無関心さは嫌いじゃなかった。都合の悪いことには目をつぶるところも、けだるそうで殺伐としたところも、本気にならないところも、卑怯で臆病なところも、圭ちゃんを傷つけるほどの無頓着さも、人並みの努力もしたことがないくせに、報われなかったときのことを考えて努力することをためらうところも、無意識の卑屈さも、……全部、嫌いじゃなかったよ」

そして今度は、はつきりと笑った。もしも僕が中学生だったら、まちがいにトラウマになっていただろう。しかし多かれ少なかれ当て嵌まってもいたので、僕は内心で、このサディストが、と毒づいただけだった。三鷹は僕の考えていることなどお見通し、といわんばかりにわずかに首をすくめてみせた。

「それって全部、わたしの好みやから。君は意識的にも無意識下でも、わたしが好む人格になりすまして行動をとろうとしてしまっ。君はわたしに囚われすぎてる。君の思考がわたしに縛られている」

三鷹はそこで一度言葉を切って、まっすぐに僕を見据えた。

「君はわたしから解放されるべき」

九月の下旬ともなると、朝夕はすっかり涼しくなった。昼間はまだ暑いけれど、季節はゆっくりと移り変わっている。

僕は相変わらず幸村とつるみ、仲本や矢野たちとふざけあっている。クラスは夏木と九条を中心にまとまり、今は受験勉強と文化祭の準備に追われている。

キャンプ以来、森川奈菜と姫さんは意気投合しているらしく、よくふたりでいるところを見かけるようになった。

噂によると、夏木は進学しないそうだ。

三鷹は幸村と別れた。幸村は一晩泣き明かしたらしく、結果を報告してきたときもまだ目が腫れていた。慰める言葉も出なかったけれど、あいつは一人で立ち直った。

僕は進路希望の紙を埋めて提出し、加藤先生をちよっぴり涙ぐませた。

シドの個展はそれなりに話題を呼んだ。いくつかの雑誌で取り上げられたようだが、本人はすでに飽きていたらしく、今は日本を離れている。またそのうちに、ふらりと戻ってくるだろう。彼の場合、十花なしでは一ヶ月と持たないのだから。

父さんが久しぶりに帰ってきた。母さんは顔には出さないけど嬉しそうだ。僕も嬉しい。

三鷹はいつものように雑誌をめくっている。ただし洋雑誌ではなく、フリルやリボンがたくさんついたドレスの女の子が載っているやつだ。ピンクのウィッグのいかれたツインテールもいる。別れてからも、ときどきは幸村の趣味に付き合っただけで出かけているらしい。

「好きだ」

試しに言ったら聞き流された。「片想いしている三鷹が好きだ」
今度はちらりと睨まれた。「天才でサディストっていうだけでもし
んどいのに、十花に惚れるなんて」ぱたり、と雑誌が閉じられる。

「茜らしいよね」

「忠告、なんてするんやなかった」

真顔で見つめ返す三鷹は、人生最大の汚点だとも言うつようにふ
うつと息を吐き出した。僕がこらえきれずに吹き出すと、冷ややかに
睨まれる。

「一貴ー、宿題終わったんならバレーやろ、バレー」幸村に呼ばれ
て、僕は立ち上がった。

f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0981h/>

KOOL

2010年10月8日14時17分発行